

DachuRa

エル・エインズワース

エインズワース家の一人娘。心優しく慎ましやかで、使用人からはとても慕われている。貴族令嬢であり、社交界デビューを済ませているものの、お茶会や夜会に参加する事は殆ど無く、外の世界を知らない。

モーリス・バートン

エインズワース家の執事。エインズワース家当主であるヘクターの従者であり、エルのお目付け役。

メアリー・バレンタイン

エルの侍女兼エインズワース家の雑用係。博識で仕事の早い十九歳。

ヘクター・エインズワース

エインズワース家当主。エルの父親。やや独裁的な考え方をしており、使用人にもエルにも厳しい。

シャールロット・エインズワース

エインズワース夫人。エル之母親。非常に穏やかではあるが、使用人には厳しく、ヘクターに忠実な妻。

キース・スタインフェルド

スタインフェルド家嫡男。エルの婚約者。金髪に青い瞳が印象的な美青年だが、妙な噂が流れているようで……？

セドリック・アンドール

謎の多い美青年。エルの十八歳の誕生日パーティーに訪れていた様だが……？

マーシャ・レイノルズ

セドリックの幼馴染。ブロンド髪に猫の様な縦長瞳孔が印象的な気さくな美女。

ライリー・ワトソン

雑貨屋の女主人。姉気質な女性。セドリックとマーシャとは昔馴染みらしい。

DachuRa 1st story-Ivy- I

I prologue

テーブルに並ぶ、ベリーのジャムとシュガーがトッピングされたカップケーキに、クロテッドクリームが添えられた焼きたてのスコーン。そして、気品溢れるゴールドエンボスの装飾が施された美しいティーカップに注がれているのは、ヴィクトリア女王が最も好んでいると言われている高級茶葉で淹れられた紅茶。

誰もが羨むであろう、贅沢なアフタヌーンティーだ。

だが私はそれ等に目もくれず、ロンドンの街並みが一望できる窓から外を眺めていた。

——時は十九世紀末、大英帝国のロンドン。

この国を絶対的に支配するのは、階級制度という名の呪いである。そして私は、その頂^{いただき}に君臨する上流階級の一人だ。

自身の暮らしが恵まれていると気付いたのは約五年前、十二歳の頃だった。外の

世界を遮断されて生きてきた私は、この国は強制的に人間の命に優劣を付け、更には生きる事を許されぬ人間が居るという事をその歳まで知る事は無かった。

「どうかなさいましたか、エルお嬢様」

頭上から聞こえた声に、顔を上げる。

自身に安心感を与える存在である彼は、この屋敷——エインズワース家に最も長く務める老執事だ。彼は私の世話係であり、普通のお嬢様は生涯知る事の無い様々な知識を与えてくれる先生でもある。

当時十二歳の私に、この国の仕組みを教えてくれたのも彼だった。

「……今日の事、お父様とお母様には内緒にしておいてね」

紅茶の水面に視線を移し、物憂げに言葉を漏らす。

自身の心に深い影が差しているのは、両親の言いつけを破ったからだ。いや、正確に言うのであれば、私の両親であるこの屋敷の主人の命令を、彼——モーリス・バートンを含めた使用人数名が背反した。

“それ”の内容は、決して複雑では無く、至って簡単なものだ。この屋敷の厨房を担当する使用人から、私が料理を教わった。たったそれだけの事である。

本来であれば、厨房は貴族の令嬢が足を踏み入れる場所では無い。高価なドレスが汚れるだけでなく、大体の人間が「厨房の様な場所に、高貴な人間である自分が足を踏み入れる必要は無い」と判断するからだ。

だがそれはあくまで自己判断であり、入ってはいけないと命令をされる事柄では無いだろう。私と同じ様に料理を趣味とし、厨房を出入りする貴族は少なからず居る筈だ。

なのに両親は、何故だか私が厨房に入る事だけでなく、料理や掃除等の教養を身に付ける事にまで酷く厭悪した。

その所為で、この家の使用人が少しでも私に家事の教養をすれば、数時間にも渡って叱責し、更には鼠の居る地下室に数日間監禁する事態にまで至った。

その様な仕打ちを受けた彼らが、私を責めた事は過去に一度も無い。彼らの立場上、この家の令嬢である私を責める事など出来る筈も無いのだが、それでも嫌な顔一つせず、更には教養を身に付けようとする私を止める事もしなかった。

大切な存在である彼らが、酷い仕打ちを受けているのを黙ってみている事は出来ず、それからというもの私は、料理や掃除、洗濯などの教養を両親に隠れて受ける様になった。

「勿論ですとも。彼らにもしつかりと釘を刺しておきました。お嬢様がご心配なされる事は何もありませんよ」

彼が柔らかな口調で告げ、微笑みを浮かべる。

「……そう。ありがとう、モーリス」

彼と同じ様に笑顔を作り、紅茶が注がれたティーカップを手を取った。カップを口元に近づけ、その香りを嗜たぐんでから口に含む。

口の中に広がる渋みの無い味に、鼻に抜けるベルガモットの香り。高価な事も納得出来る程、良質な物だ。強張った体が解れていく様な感覚に、ほっと息を吐く。だが、心に落ちた影は未だ晴れる事は無かった。言葉にし難い漠然とした不安感と、鬱々とした気持ちちは消える事無く続いていく。

——この暮らしが、息苦しいと感じ始めたのはいつ頃からだっただろうか。この国の仕組みを知った時からか、それとももっと昔からか。

モーリスやその他使用人からは、心配性な性格なだけだと言われてきた。確かに、それが性格だと言われればそうかもしれない。私は一つの事柄に執着しやすく、些細な変化等にも過敏な方だ。

だが、私はどうしてもこの漠然とした不安が、自身の性格だと割り切る事は出来なかった。自身を苛む不安感は最早病的で、私生活に支障をきたす迄に至っている。早くこの不安を取り除かなければ、直に限界を迎えてしまうだろう。

カップを持ったまま溜息を吐くと、モーリスが「まだ何か心配事でも？」と不安気に私の顔を覗きこんだ。「なんでもないの」と慌てて笑顔を作り、再び紅茶を口に含む。

この事を、使用人に話す事は容易い。きっと話を聞いた彼等は、自分の事の様に真剣に悩んでくれるだろう。

だがどうしても、自身の事に彼等を巻き込みたくはなかった。それは彼等を信頼していないという訳では無い。ただ、高慢な両親への奉仕に日々尽くしている彼等に、これ以上心配事を増やしたく無いだけだ。

母があまり身体が丈夫でない事から、この家に医者が出入りする事が多い。機会があれば、その医者に少し相談をしてみても良いかもしれない。

ぐるぐると回る思考を断ち切る様にそう自身に言い聞かせ、カップの残りの紅茶

を全て飲み干した。

II Thoughts that do not intersect

悪天候の多いロンドンでは珍しい、晴れ間の広がる午後二時半。社交ダンスのレッスンを終え、身体への疲労と少々の憂鬱感を抱えながら重い足取りで自室へ続く廊下を歩く。

社交ダンスとは、一般的に思い浮かべられる男女ペアのダンスで相違ない。貴族という肩書を持つ者は皆身に付け、社交パーティーが行われる度に誘い誘われ思い思いにダンスに興じる。

そんな中でも、私の様な貴族令嬢は取り分けダンスに誘われる機会も多い。その理由は、純粹に社交界の殿方が少しでも「若い女」と触れ合いたいからだと聞いたが、実際はその家の品位を見極める為だという理由も含まれているらしい。

その為、少しのミスで家柄の品位を落としてしまわぬ様に、貴族達は子孫に幼少

から完璧な社交ダンスと高度なコミュニケーション能力を叩き込む。

私の場合もそれと同じだ。少々不器用な私の為に、両親は家庭教師の中でも一際腕のいい人間を私に付けた。

だが、困った事に私の不器用さは想像以上の物だった。

レッスンは本格的な物になったのは、私が十六歳になったの時。つまり、一年半前だ。

一年半もレッスンを受け続けていると言うのに、今日だけで家庭教師の足を踏んだ回数は四回、転倒した回数は二回。

私の才能の無さに、家庭教師には「これ以上教えても意味がない」と匙を投げられる始末だった。

きつと、私がダンスを上手く覚えられない事は両親の耳にも入るだろう。世間体を一番に考えている両親の事だ。私のダンスが上達しないのは家庭教師の所為だと決めつけ、担当の教師を変えろと言いつつも出さかもしれない。

厳しく、気難しい人ではあったが、此処まで根気よく教えてくれた人だ。私の所為で彼女が両親から叱られてしまうのは心が痛む。

憂鬱な気持ちには晴れず、窓の外を眺めながら溜息を吐いた。

ふと遠目に見えた、窓の拭き掃除に励む使用人の姿。

彼女はメアリー・バレンタイン。この屋敷の使用人であり、私と歳の近い若い女性だ。彼女とは仲が良く、定期的にお茶会を共にしては主人と使用人の関係を忘れ談笑している。

真剣に拭き掃除に勤しむ彼女は、まだ私の存在に気付いていない。そんな彼女に
つい悪戯心が働き、足音を忍ばせゆつくりと背後から近付いた。

「メアリー！」

やや大きめに彼女の名を口にし、小さな両肩にぼんと手を置く。それと同時にその肩が大きく跳ね、メアリーが声にならない悲鳴を上げた。

「お、お嬢様！」

振り返った彼女が困惑にも似た声音で怒り、きつく私を睨みつける。

「驚かせるのはやめてくださいと、何度言ったら……」

「ごめんなさいね、貴女の姿が見えたからつい」

想像通りの愛らしい反応に笑みを零し、彼女に抱き着く様に身を寄せる。

彼女は、モーリスとはまた別の意味で安心して話が出来る相手だ。使用人よりも、

大切な友人と言う方が感覚的には近いかもしれない。

「この窓は大きいから、一人で掃除するのは大変でしょう。私も手伝うわ」

メアリーの足元に置かれている、水桶の縁に掛けられた雑巾を手に取った。それを程良い大きさに畳み、彼女と同じ様に窓ガラスの汚れを拭き取っていく。

「いけません、お嬢様。お気持ちだけで十分です」

「気にしないでいいのよ。次のレッスンまでまだあと一時間も余裕があるので、する事が無くて困っていたの。それに、貴女と少しお話がしたくて」

彼女に微笑みかけると、メアリーの頬がほんのりと赤く染まった。そして照れた様に口元を緩め、「ではお言葉に甘えて、少しだけ」と弱々しくも返答する。

改めて思うが、メアリーは本当に愛らしい。この屋敷の庭師がメアリーに想いを寄せていると噂に聞いたが、それも当然だと思える程だ。同性の私ですら、彼女の愛らしさには心惹かれてしまう。

「メアリー、貴女好きな人はいるの？」

彼女なら、きつと男性から言い寄られる事も少なくないだろう。そんな疑問から、女性同士ならではの話題を投げかける。

「好きな人、とは……？」

メアリーが窓拭きの手を止め、小さく首を傾げた。

「想い人……と言うのかしら。恋い慕っている相手の事よ」

「恋い、慕う……」

復唱する様に呟いた彼女が、僅かに考え込む素振りを見せる。

自分自身恋愛経験が無い事から、今迄自らその様な話題を切り出す事は避けていた。だが、いざ口に出しその話題を振ってみれば、忽ち湧き上がるのは深い好奇心。緊張に似た動悸を感じながら、思いに耽るメアリーの横顔を見つめる。

「——これを、『恋』と呼ぶには不確かな物ですが」

口を開いた彼女の顔は赤い。

「——お慕いしている、方は……」

メアリーの言葉を聞き逃すまいと、彼女の口元を凝視する。だが彼女はそれ以上言葉にする事は無く、代わりに肯定を示す様に私の瞳を真っ直ぐに見据え小さく頷いた。

「この様な話は、あまり得意では無いのです。経験が浅いので……」

火照った顔を冷ます様に、彼女が手で顔を扇ぐ。

何処となく雰囲気や思考が大人びているからか、彼女は自分よりも経験が豊富な

のだとばかり思っていた。だがその仕草を見てみると、彼女は自分と然程変わらな
い、十九歳の女の子なのだと実感する。

「ふふ、可愛いわねメアリー」

「……^{から}揶揄うのはやめてください」

顔を赤く染めたまま、彼女が不服そうな表情を浮かべた。そんなメアリーから視線を外し、窓ガラスに向き直る。

ふと屋敷の外に目を遣ると、庭園の手入れをしていた庭師^{ガレナ}と目が合った。挨拶代わりとして、彼に微笑みを送る。

「……？」

普段なら、庭師^{ガレナ}の彼は目が合うと私よりも先に反応を示してくれる。だが今日の彼は、少しおかしい。その顔は酷く強張っていて、此方に視線を固定させたまま動かない。

だがそれを疑問に思う前に、窓ガラスに反射して見えた「顔」に全ての思考が停止した。

窓ガラスに叩きつけられたのはメアリーの額。手元の窓ガラスが、その衝撃で僅かに波打つ。

会話に夢中だったからか、それとも気配その物が無かったのか。私達のすぐ背後に、父の存在が迫っている事に気付くことが出来なかった。

「——何故、エルが掃除なんてしているんだ」

その場に響いた低い声に、背筋に寒気が走る。怒りを含んだ父の声は、普段使用人を叱責する声とは比にならない。

「……や、やめて……お父様」

震えを抑え込み、なんとか喉奥から声を絞り出す。

私が使用人の仕事を手伝ったことは、これが初めてでは無い。父に見つかればその都度使用人が叱責されていたが、今の様に暴力を振るう事は一度も無かった。これ程までに怒りを露わにした父は、今迄に見た事が無い。

父は何時、私達の存在に気付いたのだろうか。メアリーと恋愛話をしていた時には、周囲に人の気配は無かった。父も此処には居なかった筈だ。

一体何が、父を此処まで怒らせてしまったのだろうか。

「……私が、勝手にやっているだけなの。彼女は、メアリーは悪くないわ」

メアリーの額を窓ガラスに押し付け、その腕を掴むと、父が此方に視線を向けた。「——お前が掃除をする必要など何処にも無いだろう。何の為に使用人を雇ってい

ると思つてゐるんだ」

「——ご、ごめんなさい……。これだけの窓を一人で掃除するのは……大変だと思つて。それに、彼女と話がしたかったの」

父の鋭い視線に圧倒され、思わず顔を背ける。

「お前は優しいね、エル。だが、それは労働者階級である彼らの仕事だ。本来価値など無い彼等に、私は大金を支払つて生かしてやつてゐるんだよ。この程度の事で大変と言われるだなんて、心外だな」

「そんな……」

「それに、話がしたいなら部屋に呼びつければいいだろう？ 貴族であるお前が、身分の低い彼らと『立ち話』をする必要は何処にもない」

父が掴むメアリーの項から、軋む様な痛々しい音が鳴る。それと同時に漏れる、彼女の苦しい声。

「お前は賢い子だ。私が言っている事、分かるね？」

私の瞳を真つ直ぐに見据え、父が笑つた。

幾ら自分達の身分が高かつたとしても、幾ら彼女達の身分が低かつたとしても、それが暴力を振るつていい理由にはならない。階級制度なんて物が無くなれば、私

達はなんの変わりもないただの人間なのだから。

だが階級制度を含めた人間同士の差別は、私達が人間である以上取り除く事は不可能に等しい。私の瞳に映る父は「異常」だったとしても、この世の中に生きる人間の瞳で見れば「正常」なのかもしれない。

自身の中を渦巻く諦観と絶望。

父の言葉を肯定する様に、手に持った雑巾を床に落とした。

「お父様、その手を離して」

満足気な顔をした父が、手の力を緩める。その拍子に、ゆらりと傾くメアリーの身体。

咄嗟に手を伸ばし、彼女の身体が床に叩きつけられる前に抱き留めた。

それは、反射的に取った行動だったと思う。自身の行動を見た父がどう思うかなんて、考えなくとも解る事だというのに、それを止める事は出来なかった。

父の呆れた溜息を頭上で聞きながら、メアリーの背を摩り「大丈夫？」と声を掛ける。それに彼女は弱々しく微笑み、小さく頷いた。

「エル、残念だよ。お前が私の言う事を分かってくれないなんて」

父が軽い足取りで私達の周囲を歩きながら、落胆の滲んだ言葉を漏らす。

現状を知らない人が聞けば、きつと差程大きな問題では無いと判断するだろう。それ程に、今の父の口調は柔らかく、まるで子供を諭す様な声音だ。

——いっそ強い口調で叱りつけてくれれば。

そう思ってしまう程に、私にとって父の柔らかな声音は、腹の底が読めない恐怖その物だった。

私が今日、メアリーに話し掛けたりしなければ、メアリーの仕事を手伝ったりなどしなければ、きつと彼女をこんなつらい目に合わせる事は無かったのだろう。悲しい事だが、それが現実だ。

だが、本当にそれだけなのだろうか。

ただの勘だと言ってしまうえそれまでだが、今の父の怒りの原因は他にもある様に思えた。

「——お父様の言っている事が、分からない訳では無いの」

考えれば考える程、今日の父の行動は不自然だ。

数時間前の父は普段通りで、特別苛立ちやストレスを抱えている様には見えなかった。尚且つ、父は使用人に八つ当たりをする様な人間でも無い。

今の父の行動には、何か意図があるのでは無いか。沸き上がった僅かな疑問は、

徐々に広がっていく。

だがこの状況でそれを父に指摘できる程、自分は肝が据わっている訳でも無かった。

今目の前にいるメアリーと、自分自身を守る事で精一杯だ。疑問の真相を解き明かす余裕は、微塵たりとも存在しない。

「自分の身分の事も、階級の事も、勿論全て理解しているわ」
震える声で、当たり障り無い言葉を紡ぐ。

「でも、今日の事は――」

頭に並べた許しを請う言葉を、口にしようと顔を上げた。

瞳に捉えた、恐ろしい程無表情の父の顔。

そして、振り翳す赤い薔薇が活けられた陶器の花瓶。

自身はその後、何と言葉を続けようとしたのだろうか。頬を掠めた花瓶に、言葉が続けるは疎か、その言葉すらも頭の中から消えてしまった。

自身の背後の壁に「それ」はぶつかり、ダマスク柄のカーペットが敷かれた床に水と薔薇、そして先程まで花瓶だった物が散らばる。

激しい心音は、自身のものか。それとも腕に抱いたメアリーのものか。それも分

からなくなる程に、恐怖で思考が埋め尽くされる。

「――何してるんだ、早く片付けろ」

巡る思考を断ち切ったのは、父の冷酷な声。顔を上げると、父が鋭い視線で私達を見下ろしていた。

「……ご、ごめん、なさい」

それは誰に向けられた言葉なのか。恐怖に支配された今、私はそれを理解する事が出来なかった。

メアリーから身体を離し、割れた破片に手を伸ばす。

どうすればこの状況を回避できるのか、どれだけ考えようとしても恐怖心が邪魔をし、答えに至らない。

「――！」

大きな破片を拾い上げようとした際、指先にちくりと鋭い痛みが走った。思わず、散らばった破片から手を引っ込める。

大した怪我では無いというのに、指先の怪我は何故こんなにも出血量が多いのだろうか。じわりと滲んだ鮮血は止まることなく、カーペットに一滴雫が落ちる。

そんな私を見たメアリーの顔が、一瞬にして青く染まった。大丈夫だと伝えよう

と慌てて口を開くが、間髪を容れず父がわざとらしい口調で嘆く。

「——ああ、お前の所為で私の大切な娘が怪我をしてしまったじゃないか」

過度な恐怖心からか、将又はたまた酷い動機と息苦しさからか、声の出し方を忘れてしまった様に言葉を出す事が出来ない。その代わりとして、強く首を横に振り否定を示すが、父は私に目もくれずメアリーをきつく睨みつける。

「傷が残ったら、どう責任を取るつもりだ」

「も……申し訳ありません、今すぐに片づけます」

顔に恐怖を滲ませたメアリーが、声を震わせながら慌てて花瓶の破片の方へ手を伸ばす。だが父はそんなメアリーに「もう遅い」と一言投げ掛け、その小さな背を勢い良く蹴り飛ばした。その衝撃で、バランスを崩した彼女の身体がぐらりと傾く。

「メアリー！」

咄嗟に彼女の名を呼び、その身体を受け止めようと手を伸ばした。このまま倒れてしまえば、彼女は間違いなく散らばった破片で大怪我をしてしまう。

これは全て私が招いた事だ。それにメアリーを巻き込み、怪我をさせてしまうんだなんて、そんな事絶対にあつてはならない。

だが伸ばした手はメアリーに届く事は無く、虚しく空を切った。

ぐしやり、と陶器の破片が擦れ、割れる音が響く。

メアリーの髪を纏めていたブリムが外れ、長い髪が床に垂れている為彼女の表情は見えない。だが、私の怪我とは比にならない程の量の血液がカーペットに滲みを作っていた。

「エル、お前もあと半年後には成人を迎えるんだ。そろそろ、道具の使い方を覚えるべきだよ」

父が、先程とは打って変わって優しい笑みを私に向ける。そして、未だ床に倒れたままのメアリーに一言「日が落ちる前に全て片付けておけ」と言葉を投げ、早々と仕事部屋の方向へと消えていった。

視界の隅に映ったメアリーが、操り人形マリオネットの様な不自然な動きでゆつくりと身体を起こす。その拍子に見えた彼女の顔には、無数の傷と真つ赤な血液が付着していた。

メアリーが身体を動かす度に、ぱらぱらと床に血液の付いた破片が落ちる。

「——お嬢様、お怪我は」

メアリーが私の方へと手を伸ばした。その手を強く握り、「大丈夫よ」と声を掛ける。

今のメアリーは、決して軽症ではない。きっと傷が痛んで酷く苦しいだろう。

だが彼女はそんな中で、「良かった」と一言零し儂い笑みを見せた。確か、今日は母の身体を診に医者に来ていた筈だ。

ただの切り傷ですら、手当を怠^{おそ}れば化膿や感染症の危険性を伴う。早く、メアリー^{メアリー}の怪我を手当してもらわねばならない。

「メアリー、お医者様の所へ行きましょう」

彼女の身体を支えようと、その背に腕を回す。

だが、私の手を遮る様に、誰かの手が強引にメアリーの身体を抱き上げた。

「メアリーの事は私が。お嬢様も、医者の手当てが必要でしょう」

僅かに泥が付着した黒のエプロンに、使い古した白のシャツ。私と目を合わせる事無く淡々と告げたのは、先程庭園の管理をしていた筈の庭師^{ガーデンナー}だった。

III Mother's eyes

二十二時半の寢室。ドレッサーの前で私の髪を梳くメアリーの姿を、鏡越しに見つめる。

彼女の頬のガーゼや両腕に巻かれた包帯は、目を背けたくなる程に痛々しい。全ては私の所為だ。私があの時、掃除を手伝うなんて言わなければ、もつと周囲を気にしていれば、彼女にこんな大怪我を負わせる事は無かった。

「メアリー……、昼間は、ごめんなさい」

鏡越しに彼女の顔を伺いながら、恐る恐るその言葉を口にする。

彼女が今の今まで日中の話題を出さなかった為、触れるべきではない事柄かと思っていたが、それでも私の所為で怪我をさせてしまった以上このまま黙っている訳にはいかない。

「お嬢様が謝る事ではございません。全ては私の責任です。あまり気に病まないでください」

私と視線を交わらせる事は何いものの、彼女の口調はいつも通り優しく、その表情は穏やかだ。だが何処か、私と彼女の間に壁を感じる。

そもそも、この家の令嬢である私と、使用人の彼女が親しい間柄という時点で普通じゃない。本来なら、何方も壁を作るべき関係だ。

単に、今までの私達の関係が異常だった。たつたそれだけなのに、どうしてもその事実が悲しくて、認めたくないと思っている自分が居た。

「それよりも、指の傷はまだ痛みますか？ 医者からは、深い傷だったと聞きました」

「——私は……大丈夫よ」

確かに彼女の言う通り、指先の傷は深かった。全く痛まないと言ったら嘘になる上に、医者からは完治に多少の時間が掛かると言われてしまった。

だが、そんな私の傷よりもメアリーの傷の方が余程深い。後に庭師ガーデナーの彼から聞いた話だが、顔の傷の方は特に酷く、傷跡が残ってしまう可能性も低くは無いらしい。

女性の顔に傷をつけてしまうなんて、あつてはならない事だ。メアリーは氣に病むなど言うが、それでも私は酷く自責の念に駆られていた。

「——ごめんなさい」

もう一度、謝罪の言葉を口にする。

それに対し、メアリーは何も言う事は無かった。ただ、微笑みを湛えたまま私の髪を梳く。

そんな彼女の姿を見ながら、ふと脳裏を過ったのは日中の父の事。父の行動は、あまりにも不自然だった。

「ねえ、メアリー」

使用人の彼女なら、父との接点も私以上にある筈だ。彼女なら何か知っているかもしれないと、彼女に再び声を掛ける。

「今日のお父様、少し、変じゃなかったかしら」

「……変？」

今まで微笑みを湛えていた彼女が、その一言で急に顔を強張らせた。髪を梳く手が止まり、何かを考えこむ様な表情に変わる。

鏡越しに見つめたメアリーは俯いたままで、相変わらず視線は交わらない。もしや聞いてはいけない事柄だったのかと、心臓が早鐘を打つ。

だが突如、彼女がぱっと顔を上げた。

「それは、私が旦那様を——」

鏡越しに私の瞳を見据え、紡がれる言葉。力の籠った彼女の声に、何を言われるのかと思わず身構える。

だが、タイミングが悪くも部屋に響き渡ったノックの音で、その言葉を最後まで聞く事は叶わなかった。

メアリーと共に、反射的に扉の方へと視線を向ける。

私の返事を待たずに、開かれる扉。

——もし、部屋を訪れた人物が父だったとしたら。

日中の事がフラッシュバックし、一瞬にして恐怖が心の中を満たす。

だが、顔を覗かせたのは予想外の人物だった。

「お、お母様……」

私の顔を見てにこりと微笑んだ母の顔に、思わず安堵の溜息を吐く。

「なあに、お邪魔だったかしら」

抑^{から}揄う口調の母に、「とんでもございません」とメアリーが透かさず返答し、彼女が一步私から距離を取った。ブラシをドレッサーに置き、私達に近づいてくる母に会釈をして逃げる様に寝室を去っていく。

メアリーが先程何を言おうとしたのか、聞きそびれてしまった。また機会があれ

ば、話してくれるだろうか。内心口惜しく思いながら、私の背後に回った母に、鏡越しに視線を投げた。

「珍しいわね、こんな時間にお母様が来るだなんて」

徐にブラシを手にとった母にそう声を掛けてみるが、母は何も答えない。

「お身体に触るわ。早く寝室へ戻った方がいいんじゃないかしら」

母は比較的穏やかな性格をしている為、父よりは話しやすい方だ。だが時々何を考えているか分からない時があり、二人きりになるのは非常に気まずい。

正直、母には早く要件を言って出て行って貰いたい所だ。しかしそんな事は口が裂けても言える筈も無く、仕方なく口を噤み私の髪を梳く母を黙って見つめた。

「――ヘクターが、メアリーに怪我をさせた様ね」

ずっと黙っていた母が突如切り出したのは、日中の例の話題。あまり触れて欲しくない事柄に、鼓動が跳ね上がる。

「貴女がその場に居合わせたと聞いたけれど、怪我は無いかしら？」

日中父と起こしたトラブルは、何処まで母の耳に入っているのだろうか。

指に巻かれた包帯を隠す様に手を握りしめ、「私は大丈夫よ」と当たり前障りない返答をする。

「そう、良かった」

私の髪を梳きながら、母が安心した様に顔を綻ばせる。その顔に、嘘をついてしまった罪悪感からかちくりと胸が痛んだ。

母も、母なりに私の事を心配してくれているのだろうか。使用人達にはきつく当たったとしても、娘の私にはほんの少しだとしても情を抱いてくれているのかもしれない。

「もし貴女が怪我をして、傷跡が残ったりなんて事があつたら——」

だが、母の続けた言葉に、その僅かな期待も打ち碎かれる。

「——今後の婚姻に関わるでしょう？」

母の言葉が、容赦なく胸に突き刺さる。ずしりと重くなつた心は先程よりも痛く、思わず手元に視線を落とした。

——婚姻に関わる。

そうだ、貴族令嬢の最大の仕事は、自身の家の為に、命じられた家へ嫁ぐ事。

「だから、それが心配で」

母の心配する先が、私の身体では無く婚姻の事だという事は心の何処かで分かっていた。自分の身体を心配してくれているのかもしれないなんて、淡い期待を抱い

てしまった自分が馬鹿みたいだ。

だが不思議と、傷付いたり、悲しんだり、なんて感情は湧かない。

——ああ、やっぱり。

私の中に浮かんだのは、諦観にも似た感情だけだった。

今も胸が痛むのは、きつと愛しても居ない相手の元へいずれ嫁がなくてはいけな
いから。

きつとそうに違いない。

それよりも、今はメアリーの傷の方が重要だ。

「メアリーは大怪我をしたの。お医者様は、二カ月もすれば完治すると仰おっしゃって
いたそうだけど、傷跡が残る可能性も低くは無いんですって」

出来れば、彼女には傷が残らない様に腕のいい医者の方で治療を受けさせてやり
たい。

この家を出入りしている医者も腕は良いが、内科や精神科を主に担当している医
者であり、外科は専門外だそう。現在は、止血と消毒のみの、最低限の治療しか
していないと聞いた。

使用人の立場でその様な治療を受けるのが、難しい事だとは理解している。だが

怪我をさせたのは紛れも無く父であり、そしてそれを招いたのは私だ。十分な治療を受けさせる理由にはなるだろう。

「…そう」

だが、母の返答はたったそれだけ。

まるでメアリーには興味が無いとでも言う様に、「貴女に怪我が無くて良かったわ」と呟く様に繰り返した。

私の身体を心配しない母が、使用人の身体を心配する訳が無い。それは十分に理解している為、今は同情や心配を求めている訳では無い。

だが、怪我の治療ぐらいまともに受けさせるべきだ。それが、貴族の口癖である
「高貴なる者の務め」^{ノブレス・オブリージ} なのではないだろうか。

沸々と沸き上がる苛立ちに、勢い良く振り返り私の髪を梳く母の手を振り払った。
「メアリーが、大怪我をしたと言っているのよ！ 専門医の治療を受けさせるべきだわ！」

自身の声が、想像以上に大きく部屋に響く。部屋の外にまで聞こえてしまったかもしれない。

もし今の言葉が父の耳に入ったら、叱られてしまうだろうか。

だかもう、後に引き返す事は出来ない。怯むこと無く、真つ直ぐ母の瞳を見据える。

「——どうして？」

部屋に響く、母の落ち着いた声。

母の表情は、恐ろしい程に変わらない。

「命に関わる怪我じゃない筈だわ。どうして、わざわざ“物”の為に専門医を呼ばなければならぬのかしら」

「——そんな……」

ふふ、と母が奇妙な笑みを漏らした。

母のブルーの瞳は、サファイアの様に美しく、社交界でも評判高い。私も、そんな母の瞳が美しく、羨ましく思っていた。

だが今の母の瞳は宝石なんて綺麗な物では無い。まるで底の無い深海の様で、見据えた物全てを飲み込んでしまいそうな恐怖を感じた。

思わず、母の瞳から目を反らす。

「——でも……怪我をさせたのはお父様で……、せめて治療だけでも……」

「でもそれは、メアリーが招いた事でしよう？　これが命に関わる怪我ならヘクタ

―も何か考えたでしょうけど、あの人が何もしないなら、それが正しいのよ。大丈夫、心配しなくても社交界に変な噂が立つなんて事はないわ」

言動に合っていない、幼い子供を諭すような、優しい声音。

自身の鼓動が、耳奥で低く響く。それに合わせてぐらりと眩暈めまいが起こり、目の前が真つ暗になるような絶望感に襲われた。

昔の母は、これ程残酷な事を言う人では無かった。分け隔へだてなく優しく接し、花が咲いた様に愛らしく笑う母が、私は大好きだった。――筈はずなのに。

「――違うわ……、私が、悪いのよ」

まだ母に、何処か期待をしているのか。それとも絶望故の言葉なのか。自分でも分からない。

「――全部、私が悪いの……。私が、メアリーに……」

だがその言葉は、最後まで言い終わる前に止まる。

「だめよ、エル」

私の言葉を止めたのは、紛れも無い目の前の母だった。私の口元に人差し指を立てた母が、微笑みを湛え目を細める。

「それ以上言ったらヘクターに……、貴方のお父様に報告しなくてはいけなくなっ

てしまうわ」

「――！」

感じる本能的な恐怖。まるで呪いでも掛けられてしまったかの様に、喉奥が塞がり声が出なくなる。

「でも、そんな優しい貴女が大好きよ」

黙った私を見た母が、少女の様に嬉しそうに笑った。その屈託の無い笑みは、いつか見たあの大好きだった笑顔と同じで、自身の顔から血の気が引いていくのが分かった。

「でもね、貴方は間違ってる」

小さな子供をあやす様に、母の手が私の頭を撫でる。

「貴女は優しすぎるの。自分の人生は、全て生まれ持った階級で決まる。エル、貴女はこの階級制度の頂である、上流階級の人間よ。貴女を騙し、この場から引きずり落そうとする人間は必ず存在する。それが、彼等よ」

母の手が頭から離れ、今度は頬へと伸びた。

「優しい、というのは良い事よ。でも、貴女の欠点はその優しさ。彼等に騙されない娘こそが、エインズワース家に相応しい人間になるの」

それだけ言うと、母は私の言葉を聞かずにドレッサーに向きなおらせ、再びブラシを手を取った。

——彼等、とは。

そう尋ねたかったが、きつと母は何も答えない。更には動悸も酷く、その言葉を口に出せそうも無い。

黙って母に髪を梳かれながら、鏡越しに母の表情を伺う。

「貴女はとても恵まれていて、幸せなのよ」

ぽつりと、母が独り言の様に言葉を漏らした。

「——お母様……？」

「幸せ、そう、幸せなの。貴女は誰よりも幸せ。私も、私もよ、幸せなの」

まるで洗脳の様に、自分自身に言い聞かせる様に、母は私の髪を梳きながらその言葉を繰り返し続けた。

IV Late at night

消灯時間をとくに過ぎた零時過ぎ。母が去った後の寢室のベッドで、中々眠りに付く事が出来ず寝返りを打つ。

日中の父の行動、大怪我を負ったメアリー、そして先程の母の言葉。全てが消える事無く、頭の中を回り続ける。

大切な人が傷付けられる姿を目の前で見ている事しか出来ないなら、いつそ自身が彼女達と同じ仕打ちを受ける方がマシだ。そして彼等が私を騙そうとしているのなら、きつとこのまま騙されていた方が私にとっては幸せなのだろう。

苛立ちの籠った溜息を吐き、再び寝返りを打つ。

メアリーは今頃、自室で何を考えているのだろうか。傷の痛みで、眠れない夜を過ごしてやらないか。日中の事がトラウマになってやしないか。

彼女の事を考えれば考える程心配は募り、眠るどころではなくなってしまう。

「——このままじゃ、頭がおかしくなってしまうそう」

誰に向けた訳でも無い独り言を漏らし、ゆつくりと身体を起こした。ナイトテーブルに燭台しよくだいとマッチが置かれているのを確認し、音を立てない様ベッドから降りる。手に取った、掌に収まるサイズのマッチ箱。この屋敷に置かれている物に、低質な物は存在しない。

きつとこれも、何処か有名な店から取り寄せた物なのだろう。マッチ箱には、金のインクでブランド名だと思われる文字が描かれていた。

こんな物にまで無駄にお金を掛けるなんて、本当に貴族のする事は下らない。そう内心毒突きながら、擦ったマッチの先の火を燭台の蝋燭三本に移す。

ぼんやりと、オレンジ色の光に照らされる寝室。この部屋に置かれている物も、高級な物ばかりだ。

沸き上がる不快感に、寝室に置かれている家具から目を背けた。火が消えてしまわぬ様そつと燭台を持ち上げ、扉の方へと足を向ける。

——寝室の扉の前。

ぴたりと私の足を止めさせたのは、幼少期の朧げな記憶。

その日も、今日の様に眠る事が出来ず、好奇心から一人で寝室を抜け出した。だが入った場所が悪く父に見つかってしまい、それから数年間私の寝室には外側から

鍵を掛けられる様になった。

歳を重ねるにつれていつの間にか鍵を掛けられる事は無くなったが、やはり当時の事が気掛かりで寢室を抜け出す事は躊躇われる。

「——情けないわね、大丈夫。少し気分転換をするだけ」
自分に言い聞かせる様口に出し、寢室の扉に手を掛けた。

廊下は寢室よりも温度が低く、空気がひんやりとしている。羽織物の一つでも持つてくるべきだったかと後悔しつつ、燭台の灯りで辺りを照らしながら屋敷の中を練り歩く。

改めて、この屋敷はとても広い。人の居ない深夜だと、猶更その広さを痛感する。なおさら
ぼんやりと様々な部屋を眺めながら、幼少期の事を思い起こす。当時まだ小さかった私は、この屋敷が世界の全てだと思っていた。

見る物全てがきらきらと輝いて見えた当時の私は、良い意味でも悪い意味でも、何も知らなかった。

両親の言葉の意味、使用人と自分達の違い、格差、社会の制度。何も知らなかった私はきつと本当に幸せだったのだろう。幼少期の頃の記憶は臃おぼろげで殆ど覚えて

いないが、それでも無邪気に笑って生きていた事は覚えている。

そんな幼少期に戻りたいかと問われれば、直ぐには答えられない。だが、今よりかはきつと数倍もマシだ。

何も知らずに生きていられたら、同じ時間の中をループする様に繰り返して生きる事が出来たら、それ程楽になれる事は無いというのに。

メアリーとの関係は、今後どうなってしまうのだろう。先程ドレッサーの前で、確かに感じた彼女との間の壁。

もしかすると、もう楽しく会話をする事も出来ないかもしれない。お茶会を共にする事も出来ないかもしれない。もう、心からの笑顔を見せてくれる事はないかもしれない。

だが、それが当然であり、当たり前前の事なのだ。使用人と令嬢。それはどう足掻いても変えられない関係。

「——幸せ、私は、幸せ」

先程母が言っていた言葉を、同じ様に口に出してみる。

「——幸せ、幸せ、私は、誰よりも幸せ」

自分に言い聞かせる様に、そう思い込む様に、何度も、何度も、口に出す。

毎日、一時間毎に違う家庭教師ガブリエスが私の元を訪れ、私に教養する。ピアノ、ヴァイオリン、社交ダンス、テーブルマナー。学ばなくても生きていける事ばかりだ。

それを、私は黙って受け、無駄に知識をつけていく。そんな変わらない毎日。仲の良い使用人とも、会話という会話だって出来やしない。

——そんな私が幸せだなんて、笑ってしまう。

もしこんな残酷な世界が幸福な世界だというのなら、一体神は何を思いこの世界を造ったのだろうか。

誰かが言った、〃神は乗り越えられる試練しか与えない〃。もしその言葉が本当なら、私に与えられた試練とは何なのか。それは、乗り越えられる物なのだろうか。

私には分からない。何も、何も。

——何も。

ぼんやりと考えながら足を踏み入れたのは、ひと際大きな部屋。

大きなテーブルに沢山の椅子が並べられているのを見る限り、此処は食堂の様だ。だが、此処が食堂として使われているのを、今までに一度も見た事が無い。

テーブルも椅子も、全て使われた痕跡が無く新品だ。それでも埃一つ被っていない

いのは、毎日使用人が掃除を続けているからなのだろう。

燭台をテーブルに置き、適当に選んだ椅子を引く。そこへ腰掛け、ぐるりと一周、この大きな食堂を見渡した。時計の秒針すら聞こえない、無音の空間。

揺らぐ事の無い燭台の灯りだけが照らすこの場所は、少々不気味で酷い孤独感を覚える。だが、今は何故だか此処がとても落ち着く場所の様に思えた。

椅子の背凭れに身を預け、瞳を閉じその空間に意識を溶かす。此処なら、安心して眠る事が出来そうだ。だがこんな場所で眠ったりなどしたら、きつと明日には騒ぎになっているに違いない。

両親は、また使用人を責めるのだろうか。そしてまた、私の寝室には鍵を掛けられてしまうのだろうか。

ふふ、と一人自嘲を零し、瞳を開いた。

視線の先にある、一体の石膏像。その像の掌の上に、鞘に納められた短剣が置かれていた事に気付いた。椅子から腰を上げ、吸い寄せられる様にその像に近づく。

その石膏像は、決して珍しい物では無い。どの屋敷にでも置かれているであろう天使像だ。その天使像の掌に短剣が置かれている事を不自然に思いながらも、そつとそれを手に取り、ゆっくりと鞘から短剣を引き抜いた。

月明かりが反射する、鋭い剣先。その刃の薄さや重量感から、レプリカではない本物の短剣だという事を理解する。

前腕と同じ長さの刃渡り。この短剣で自身を貫けば、時間は掛かれど間違はなく私は絶命するだろう。

——そんな自身の姿を想像し、ほんの一瞬、心に安らぎを感じてしまった。

決して死を望んでいる訳では無かった。だがきつと、この病的な不安から逃れる術は自身の死一択。

短剣の柄を両手で持ち、剣先を自身の胸元に突き付けてみる。

最初は、ほんの些細な好奇心だった。本当に自身を刺すつもりなど無かった。

だが、短剣を胸元に突き付けた瞬間に覚えた快感。自身の胸元から致死量の血液が溢れ出し、熱い痛みで声も出ず、緩やかに近づく死を自覚する。

それはなんと甘美で、美しい未来だろうか。

私を見下ろす天使像。

自殺は大罪とされ、その死は封印される。昔、何かの本で読んだ事だ。

神は、きつとこの行為を許してはくれない。これは、神への反逆に値する。^{あた}い。
だかもう、なんだってよかった。

手に力を込めてしまえば一瞬。だが、短剣の扱いに一切慣れていない自分が、正確に自身の身体に剣先を突き立てる事が出来る可能性は限りなく低い。人間の肋骨を短剣で砕くには、大人の男性でも難しいという話を何かの本で読んだ記憶がある。

——失敗をしたら。万が一、生き延びてしまったら。その先を考えるとゾッとする。

だが、逃れられない永遠の不安と、失敗する可能性のある自殺。天秤に掛けた際、何方に傾くかはもう分かっていた。

失敗するリスクが低い部位で、確実に死を迎えられる方法。剣先を、胸元から首筋へと滑らせる。

一思いに首元に刃を突き立てれば、そのまま息絶える事が出来るか。それとも、刃先で首筋を搔つ切ってしまった方が確実か。

最早憑りつかれた様に、頭の中を埋め尽くす死の切望^{デストロイド}。

残された時間は少ない。決行しても、直ぐに誰かに見つかってしまえば一命を取り留めてしまうかもしれない。その前に早く、実行しなければ。

剣先を首筋に触れさせ、瞳を閉じた。最後瞳に映った光景は、変わらず私を見下ろす天使像。

十、九、八、と心の中でカウントダウンを始める。

残り時間が短くなるに連れて、柄を握る手に力が籠る。

ああ、これで楽になれる。

これで、不安も消える。

これで、未来を心配しなくて済む。

これで、幸せになれる。

これで、これで、これで。

——これで、全てを終われる。

三、二、一。手に籠った力が、最大に達した。

首筋に触れた剣先が、私の喉を——

「——エルお嬢様！」

その場に響いた、私の名を呼ぶ声。鼓動が跳ね上がり、思わず手に持っていた短剣から手を離してしまった。

石の床と短剣がぶつかり合う騒音が響き渡り、思わずびくりと肩を震わせる。

「——なんで、なん、で」

漸く決断できた死を逃してしまった惜しさと、死を選ぼうとしてしまった自身の行動に恐怖を感じ、身体が強く震え出す。

「——なんで、貴方が、此处にいるの」

声の主は、私が心から信頼を置いているモーリスだった。

私を見つけたのが他の誰でもない彼だったという事に安堵感を覚えながらも、錯乱状態にある私は冷静な判断をする事が出来ない。

「ちが、違う、私は、ただ、ただ、怖くて、ごめんなさい」

黙って私を見つめる彼に、言い訳にもならない言葉を並べ立てる。

何が違うのか。どうして彼に謝っているのか。何に對して謝っているのか。どんな言い訳をするつもりなのか。今の私には、分からない。だが、言葉は止まらず、瞳からは涙が溢れた。

そんな私を、彼は責めようとはしなかった。

ただ黙って私の近くに寄り、床に落ちた短剣を静かに拾い上げる。そして暫く様々な角度からその短剣を見つめ、気が済んだとでも言うように一人頷いて短剣を鞘に戻した。

「——これは、旦那様のコレクションの一つですね。骨董店で見つけたアンティーク品です。本物の短剣ダグですよ」

天使像の掌の上に戻した彼が、ふふ、と微笑みを漏らす。

「なぜ、こんな物が此処に置かれているのでしょうか。使用人が勝手に持ち出してしまったのかもしれませんがね。使用人の中に盗人ぬすびとが居るとは考えたくありませんが、きつとこの部屋なら主人が出入りする事が無いと知って此処に隠したのでしょうか。犯人捜しをする必要があります」

普段通りの、穏やかな口調。鼻腔を抜ける彼の柔らかな香りに、徐々に落ち着きを取り戻していくのが分かる。

だがそれでも、私の足はその場に根を生やしてしまつたかの様に動かない。頬を伝い落ちていく涙も、身体の震えも、止まらないままだ。

「お嬢様は昔から好奇心旺盛で、少々落ち着きの無いお子様でした。テーブルの上に登ったり、無理矢理こじ開けた窓から身を乗り出して落ちそうになったり、書斎ライブラリーに籠ったきり出てこなくなつてしまつたり。それに、かくれんぼもお上手でしたね。

この広い屋敷で、貴女様を見つけるのには非常に苦労しました」
徐おもむろに、モーリスが私の肩に触れた。

「あの時」と同じだ。もうこんなに、肩が冷えている」

彼が私を腕の中に迎え、落ち着かせるように優しく背を撫でた。

幼少期を思い出す、優しい手。小さな頃、よく転んでは泣いていた私を、彼は私が泣き止むまでこうして抱きしめて、背を撫でてくれていた。

その時からずっと彼からしていた、香水とは少し違う、薔薇によく似た香り。それがとても落ち着く物で、不思議とその香りを嗅ぐと心を落ち着かせる事が出来た。年を重ねる毎に、こうして抱きしめて貰う機会は減ったが、それでもその時の感触は今でもよく覚えている。そして、懐かしい感触に再び涙が溢れた。

「ホットミルクでもお持ちしましょう」

ぽんぽんと、彼の手が背を叩く。まるで小さな子供をあやすような手に、思わず笑みが零れた。

「それを飲めば、自然と眠りにつくことが出来ますよ」

私を抱きしめていた彼の手が、ゆっくりと離れた。名残惜しさを感じながらも、それに合わせ漸く動いた足で一步後ろに下がる。

「ねえ、モーリス」

「いかがなされましたか？」

「ホットミルクもいいけど、少し、お話をして欲しいの」

朝が早い彼を、こんな深夜に呼び止めてしまう事は憚はばられる。もう若くない身体には、充分な睡眠が必要だ。彼に、迷惑を掛ける事はしたくない。

だが、今日だけは一人になりたくなかった。

「お話、ですか。では、私が昔出逢った女性のお話でも致しましょう」

彼は迷惑だなんて微塵も思っていない様子で、私に優しく微笑んで見せた。

V Borrowed name

最後に見たのが、もう随分と昔に思える寝室。

ナイトテーブルに置かれたキャンドルに火を付けるモーリスの姿を眺めながら、彼が淹れてくれたホットミルクに口を付ける。

薔薇の花弁が練り込まれたそのキャンドルは、私が所持しているキャンドルの中でも最も気に入っている物だ。ふわりと柔らかく立つ薔薇の香りは何処かモーリス

の匂いに似ていて、とても穏やかな気持ちになれる。

「さて、ではお嬢様のお望み通り、『お話』でもしましょうか」

私が眠りやすい環境を作ってくれた彼が、漸くベッドの隣に置かれた木の丸椅子に腰掛けた。

「あまり面白い話ではありませんが、今のお嬢様なら、興味を示してくださるかもしれませんね。——これは、随分と昔の話になります」

彼の口ぶりに自然と期待が膨らむのを感じながら、ゆつくりと穏やかな口調で話し始めた彼の声に耳を傾ける。

「その日は確か、珍しく空気の澄んだ早朝だったと記憶しています。私の日課であった、奥様の好きな花を調達しに街へ出ていた時の話なのですが——」

「街に？ 貴方が？」

「ええ、二十年程前の事です。当時は私もまだこのお屋敷に来たばかりで、買い出しや掃除などの雑用を主に担当しておりました」

モーリスの現在の年齢は把握していないが、二十年も昔の事であれば、彼も今よりずっと若かった筈だ。彼の若い頃の姿には非常に興味が有り、叶うことなら見てみたかったとぼんやりと考えながらミルクを啜る。

「その街で私は、長い黒髪に赤い瞳が印象的な、若い女性と出会いました。シエルと名乗ったその女性は、エルお嬢様の様に非常に心優しいお方で、とても魅力的な女性だった事を今でもよく覚えております」

「——私の様に、つて……流石にその方に失礼だわ」

「私は事実を言った迄ですよ。——その女性はとも街に溶け込んでいて、一見街の人間と変わらない様に見えましたが、気になる事が一つ。彼女は自身と同じ階級の筈なのに、何故だか付まいも、話す言葉も、貴族のそれと変わりがなかったのです」
興味が湧く、と言うにはまだ段階が早い。だが、その話に妙な感情が沸き上がり、カップに落としていた視線を上げた。

「……それは、彼女が特別礼儀正しかったという訳では無くて？」

「勿論、私も最初はそう思いました。それに、転落貴族の一人かもしれぬとも、考えました。だけど、違った」

何故だか自然と、鼓動が早くなる。「違った？」復唱するように彼に尋ねると、彼が微笑みを湛えたまま小さく頷いた。

「転落貴族の類^{たぐい}だったとしても、彼女が特別礼儀作法を身に着けていた人物だったとしても、不自然な点が多すぎる。それは、私の勘も少々含まれていたかもしれ

ませんが、その「不自然さ」がどうしても拭いきれず、独自で彼女の素性を調べました」

「——素性を、調べる……」

思わずそれを口に出すと、彼が「褒められた行動では無いのは重々承知の上でしたが」と苦笑いを浮かべた。

「彼女は私に、シェリルと名乗った。もし彼女に何らかの秘密があるのなら、それも偽名だと思っていたのですが……、彼女のその名は本名で、そして有ろう事か、彼女は名家の令嬢だという事が分かりました」

どきりと、鼓動が跳ね上がる。

彼の口ぶりからするに、その女性はずっとモーリスと同じ様に街へ買い出しにでも出ていたのだろう。だが、貴族令嬢が街へ買い出しに、なんて事がある筈が無い。確かに、貴族の人間が自ら店に向く事が無いとは言いつても無いが、それは特例であり、貴族界では殆ど「あり得ない」事だ。令嬢である彼女が、何故街へ？

「——シェリル・キャヴェンディッシュ」

「——！」

突如、彼が口にした名前。それに、疑問が解けていく。

キャヴェンディッシュ家。それは、マンチエスターに大きなお屋敷を持つ名家だ。少し前に、書齋ライブラリーの隅に積まれていた古い新聞で、約二十年前にキャヴェンディッシュ家で起こった事件の記事を目にした。それは非常に印象に残っていて、興味深い話であった。

——当時十七歳だった令嬢、シエリル・キャヴェンディッシュが、ある晩突如姿を消し、行方不明になった。それは各新聞で大々的に報じられ、誘拐等の事件に巻き込まれたのでは無いかと警察も懸命に捜査を行ったが、結局彼女が見つかる事は無かった。

そしてその数年後、ロンドンの小さな街にある家屋で、男女の遺体が発見された。その女性はキャヴェンディッシュ家の令嬢では無いかと噂されていた様だが、遺体の損傷が激しく、更には亡くなってからかなりの時間が経過していた為、身元は判明しなかったのだとか。

全て、当時の新聞を読んだだけの知識でしかないが、当時相当世間を賑わせた事件だった様で、どの新聞にも様々な事が細かに書かれていた。

「お嬢様も、キャヴェンディッシュ家の事件はご存じでしょう」

「ええ勿論。書齋ライブラリーに当時の新聞が積まれていて、気になって読んだ事があるの。知識は浅いけれど、ある程度は把握しているわ」

「ああ、それは旦那様が集めていらつしやった物ですな。当時、社交界での良い話題になると、キャヴェンディッシュ家の事件の情報を多く求めていらつしやったので。この屋敷の書齋は広いですから、きっと処分を忘れてそのままにしてあったのでしょう」

「——社交界での話題……ね」

父らしい事だ、と嘲笑を交えた溜息を吐く。

他人の家の事件を、面白可笑しく話題にするのは好ましくない。キャヴェンディッシュ家の、当時の家庭環境は私には分からないが、それでも彼女の両親が彼女を探していた事は事実だ。

「それで？ その女性——シェリルさんとはその後どうなったの？」

無理矢理自身の気を反らす様に、話の続きを急かす。

「どうやら彼女は街の男性と恋仲になり、駆け落ちをしたそう。男児を授かり、幸せそうに暮らしていましたよ」

「——駆け落ち……？」

「ええ、彼女の口からキャヴェンディッシュ家の話が出る事はありませんでしたが、それでも、相手の男性を心から愛していると、駆け落ちした事は一切後悔していないと、笑顔で仰っていました」

「そう……」

——駆け落ち。それは、親や周囲に反対されているなどの事情により、愛し合っている男女が行方をくらませること。主に物語上で描かれる事が多い。

私の愛読書にも、男女の駆け落ちを題材にした物語が幾つかあった筈だ。

身分が違^{たが}えど、同じ人間である事には変わらない。そんな二人が、全てを捨てて結ばれる。私が心から羨み望む展開だが、現実世界ではあり得^えない^いと何処かで思い込んでいた。

その所為か、キャヴェンディッシュ家の令嬢の話には非常に興味がある。一体何処で知り合い、どの様に結ばれ、どの様に屋敷を抜け出したのか。

だがモーリスは、私がそれ以上の情報を求める前に「私が話せるのは此処までですよ」と早々に話を切り上げてしまった。

「その、彼女の子供はどうなったのかしら。令嬢の失踪から数年後、このロンドンで遺体が見つかったと記事で読んだけど、シエリルさんの遺体だと噂されていた

のでしょうか？ でも、そこに子供の遺体は無かった筈だわ」

どうにか、あと少しでも情報を掴めないかと食い下がる。

「それは、私には分かりかねます」

だがモーリスは、意味有り気に笑みを漏らすだけでそれ以上の事は言おうとしない。

きつと、彼ならもつと様々な情報を持っている筈だ。彼に知らない事は無いのではないかと思う程に、彼は博識である。

「お願い、他にも色々知っていることがあるなら教えて欲しいの」

「そう、言われましてもなあ」

困った様に笑ったモーリスが、ううむ、と小さく唸った。

「これはお嬢様のお求めの情報ではございませんが、もしその男児が今も何処かで生きているのなら、お嬢様の三つ年上の青年となっている事でしょう。きつと、彼女に似て端正な顔立ちをしているに違いない」

「何処かで……？ シェリルさんは？ あのご遺体は、本当にシェリルさんの物だったの？」

次から次へと湧き出す疑問と好奇心。

だが彼がその質問に答えてくれる事は無く、相変わらずの笑顔で私の手に持たれていた空のカップを取り上げた。

「さあ、お話は終わりです。早く眠らなければ、明日のレッスンに響いてしましますよ」

「待つて、待つてお願い、あと五分だけ」

小さな子供が駄々をこねている様だと、自分でも思う。寧ろ、小さな子供でも此処までの我儘は言わないだろう。みつともないと思いながらも、それでもまだ入眠の為に必要な眠気が足りず、押し込まれたベッドの中からモーリスの服の袖を掴んだ。

「……お願い」

ついつい柄にもなく甘えた素振りを見せてしまうのは、モーリスと居ると何故だか幼少期に戻った様に感じてしまうからだ。だからと言っては何だが、我儘を言っても許されるような気がしていた。

「仕方ありませんね。では、本当にあと五分だけですよ」

そんな私を見て、彼が呆れた様に笑う。

昨晚読んだ、命の宿ったドールを題材にした物語。その中に出てくる、
”パパ”

と呼ばれていた人も、今のモーリスの様に優しい人だった。

彼が私をこうして甘やかすのは、単に自分が仕える人物に逆らえないという事もあるかもしれない。だが今はそれでもいい。もう少しだけ、彼と話していたい。

モーリスがカップをナイトテーブルに置いて、木の椅子に座り直す。

「では、今度はお嬢様のお話をお聞かせ願えますか？」

「私の、話？」

「ええ、そうです。私ばかり話してはつまらないでしょう。そうですね、眠る時間を過ぎているのにも関わらず、寝室を抜け出し屋敷の探索をしていた罰、という事にしておきましょうか」

ふと、先程の食堂での事を思い出し、さっと顔から血の気が引いた。

彼は今でもその件について触れないが、きっと本心では、私が何故あんな事をしようとしたのか問い質したいのだろう。

なのに彼は、敢えて核心を突かない言葉を選び、更にはそれを冗談めいた口調で告げた。

きつと、私に逃げ道を作ってくれている。

言いたくない事は言わなくていいと、言いたいことは言っているのだと。そう言

つてくれている様で胸がズキリと痛んだ。

「――モーリスやメアリーは、私に沢山の事を教えてくれた。きっと、私は一人きりになっても生きていく事は出来るでしょう」

死を選んだ方が幸せだと思った。そう、彼に打ち明けてしまいたかった。だが、幼少期からずっと傍に居てくれた彼に心配を掛けたく無い気持ちの方が今は大きい。

だから私は彼の優しさに甘え、その中、間を取った。

「でもね、私には……名乗れる名前が無いの。エインズワースは私に与えられた名前であり、裏を返せば、私はそれ以外の名前を得る事は出来ない」

私の言葉を、彼は黙って聞いてくれた。

先を急かす事もせず、口を挟む事も無く、ただ優しい眼差しを私に向けてくれている。

「私が、エル・エインズワースで居る限り、私はこの家から逃れられない」

本来は、私がこうして彼に甘えることも許されることでは無い。使用人^{メイド}と令嬢は、どう足掻いても変えられない関係だと、先程思っただけなのに。

もし母が言うように、本当に彼が私を騙そうとしているのなら。もういつそ、こ

のまま永遠に騙し続けてはくれないか。私をこの場から引きずり墮として、彼等と対等の人間にしてはくれないか。

思わず瞳に滲んだ涙を、隠す様に彼から顔を背けた。

「――では」

今まで黙っていたモーリスが、徐に口を開いた。

「私の名を、お貸し致しよう」

私の耳に届いたのは、諭すような、優しく静かな声。

――その言葉を聞いた瞬間、私の耳が、もしくは頭が、おかしくなってしまったのかと思った。自分の都合の良いように、物事を書き換えてしまう程、精神に異常をきたしてしまったのかと思った。

思いもよらぬ言葉に、涙を隠す事も忘れぱつと彼の方へ顔を向ける。

「もし仮に、今後お嬢様がこの家を去る時が来たとしたら。その時は、私の姓を名乗れば良いのです」

「貴方の、姓……？」

「ええ、そうです。エル・バートン、と」

「……エル・バートン」

復唱するように、その名前を呟く。

たった姓一つだけなのに、呼び名が変わっただけなのに。その名前はとても温かかった。私に、希望を与えてくれていた様で、まだ、生きていいと言ってくれている様で、瞳に滲んだ涙が零れ落ちる。

「私は如何なる時も、お嬢様の味方で御座います。それにもしその名を名乗って頂ければ、私がこの屋敷を去った後も、お嬢様を見つける事ができるかもしれません」
「去る……？ 貴方、この屋敷を去る予定があるの……？」

「いいえ、もしもの話でございます」

彼の指先が、頬を伝う涙を拭う。そして変わらぬ優しい微笑みに、釣られて私も笑った。

「ふふ、エル・バートン……、とてもいい名前ね。まるで、貴方と家族にでもなつたみたいだわ」

「こんな老い耄れが家族では、お嬢様の御負担になってしまふでしょう」

「そんなことないわ！ 貴方が家族だとしたら、とても心強くて、安心できる」

「お嬢様の様に素敵な女性と家族だなんて、恐れ多い事で御座います」

私の言葉に、モーリスが声を上げて笑う。きつと、本気にしていないのだろう。

子供の戯言^{たわごと}だとも思っているのだろうか。

だがそんなモーリスにむつとしながらも、私の心は軽くなっていた。安堵からか、程良い眠気が訪れ、瞼が少しずつ重くなっていく。

「明日のアフタヌーンティーは、お嬢様のお気に召す茶葉を使用致しましょう。ですので、今晚はゆつくりとおやすみなさいませ、エルお嬢様」

「ええ、おやすみなさい。モーリス」

この心の安らぎは、いつまで続くのだろうか。明日になれば、またいつもの様に病的な不安に苛まれてしまうのだろうか。

そんな不安が、一瞬脳裏を過る。

だが鼻腔を擦る薔薇のキャンドルの香りに、その思考は徐々に溶かされ、意識は深い眠りの中へと落ちていった。

VI Dinner

エインズワース家の人間だけが使う事を許された晚餐室。

大きなテーブルの中心に置かれた花瓶と、活けられた色とりどりの花。背の高い豪華な燭台。並べられているのは、三人分の食事。

父は仕事で常に忙しく、普段は母と二人で食事をする事が多い。その為、家族揃っての食事は非常に珍しい。

だがそれは私にとって決して喜ばしい事では無く、寧ろ息の詰まる、拷問の様な時間だった。

特に会話が無く、無言で進められていく食事。恐怖心からかあまり食が進まず、もう食事の時間は残り僅かだというのに、皿には半分以上の料理が残ってしまっている。

——もう随分と前の事になるが、今日の様に三人で食事をした際、出された料理を全て食べきれなかった事があった。その後の事は、大体の察しが付くであろう。

それを見た父が晚餐室に料理人を呼びつけ、そして彼に私が食べ残した料理を浴びせ「娘の口に合わない料理人などこの家に要らない」と酷く叱責した。

幸いその料理人が解雇になる事は無かったが、彼は酷く心を痛め、結果この屋敷を去ってしまった。

その時彼が私に残した最後の言葉。

『貴族の御機嫌取りをする為に料理を学んだのでは無い』

それは今でも、私の心から消える事は無かった。

早く、食べなければ。時間内に全て食べきらなければ。また、料理人が叱責されてしまうかもしれない。時計の秒針の音が自身を急かし、少しずつ心音が上がっていく。

だがどれだけ料理を口に運ぼうとしても、緊張なのか恐怖心なのかどうしても躊躇^{ためら}ってしまい、結局口の中を含む事が出来ずフォークを皿の上に戻してしまう。この際、食が進んでいない事を父に悟られる前に、「体調が優れない」などと言って早めに退席してしまおうか。

——いや、それはなんの解決にもならない。

父の事だ。きっと何かと理由を付けて使用人を責めるだろう。もう、父から理不

尽に叱責される使用人を増やしたくない。

ワイングラスに注がれた水を飲み干し、込み上げる吐き気を何とか抑える。

「——エル」

突如父から声を掛けられ、思わず身体が大きく震えた。早鐘を打つ心臓を父に悟られない様表情を引き締め、顔を上げる。

「なぁに、お父様」

貴族の令嬢らしく、穏やかに、淑やかに、精一杯の笑顔顔を顔に作る。

食が進んでいない事を指摘されるか、それとも、食事のマナーが悪いとも言われるか。

私の瞳を見据える父の顔は無表情で、感情を読み取る事が出来ない。止まらない動悸に、そろそろ笑顔が崩れてしまいそうだ。

笑顔が崩れる前に、話を早く進める様にと首を傾げて見せる。

「スタインフェルド家の事は、お前も知っているな」

「——え？」

まるで想像していなかった話題に、思わず間拔けな声を出してしまう。
父の言ったスタインフェルド家とは、エインズワース家と肩を並べる程の名家だ。

だが、スタインフェルド家は多額の財産を隠し持っていると言われていて、その噂が真実であればエインズワース家よりも優等な家である。

「も、勿論、知っているわ。それが、どうかしたの……？」

思考を埋め尽くす嫌な予感。

恐らく、その予感の的中すると、本能が意地悪く告げる。

出来る事なら聞きたくない。だが、それは許されない。父が口を開くのを黙って見つめながら、耳を塞ぎたい衝動を何とか抑える。

「スタインフェルド家のご子息から、今朝手紙が届いた」

父が徐おもむろに、ジャケットの内ポケットから一通の手紙を取り出す。そして私に、

読めとでも言うようにテーブルの上にそれを落とした。

父の顔を一瞥いちくつし、その手紙に手を伸ばす。

「私は、悪い話では無いと思っている」

手紙を手にした私に、父がワインを飲みながら軽い口調で告げた。

充分すぎる程の高品質な紙に、スタインフェルド家の家紋が押された封蝋ふうろう。スタインフェルド家から出された正式な手紙に間違いは無い様だ。

すでに開封済みのその封筒から便箋を一枚抜き取り、ゆっくりと開く。

「……………」

予想は的中、とても言うべきだろうか。

一枚の便箋に書かれた文章。それを簡潔に言うならば、スタインフェルド家の嫡男^{ちやくなん}、キース・スタインフェルドからの婚約の申し出だった。

「お前にとつては、良い話だろう？」

父が一瞬だけ見せた、嘲笑にも似た笑み。その意味が分からず、首を傾げる。

「キース君はお前を大層気に入っている様でね。あの家は金遣いが荒い事で有名だが、それでも今の地位を維持出来ているという事は、それだけの財産があるという事だろう。お前も、欲しい物は何でも与えられる生活が出来る筈だ」

「……私、そんな生活を望んでいる訳じゃないわ」

反射的に、漏らしてしまった言葉。ハッと我に返り、慌てて手紙から顔を上げ父の顔に視線を合わせる。

「……ほう？　じゃあ、どんな生活を望んでいるんだ」

父は相変わらず無表情だ。だが、私の発言で目の色が変わった事ははっきりと分かった。

「言ってみろ」

バン、と強くテーブルに置かれたワイングラス。その拍子にグラスの中のワインが波打ち、白いテーブルクロスに飛び散った。

「……あ、の、……なんでもないの、ただ、その、あまり我儘わがままを言ってしまったてはキース様を困らせると思つて、その……エインズワース家の人間として、慎つつしましく暮らすべきだと思つただけよ」

口から零れた、出まかせの言葉。だが、我ながら上手い言い訳が出来たのではないかと自負する。

私の言葉を聞いた父が満足げな顔で微笑み、頷いた。

「ああ、そうか。嬉しいよ、やはりお前は、私の自慢の娘だ」
父の言葉に、ずきりと胸が痛む。

「心配する事は無い。キース君はとて面白い青年だよ。お前には勿体ない程の……ね」

「ええ……そうね」

彼——キース・スタインフェルドと顔を合わせたのは過去に一度だけだった筈だが、それだけで私の事を気に入ったりなどするだろうか。端正な顔立ちをした彼は女性からの人気も高く、社交場では女性に囲まれていた記憶がある。

本能的に感じる不自然さ。だがそれを追求する事は出来る筈も無く、私は父の言葉に微笑みを返す事しか出来なかった。

「スタインフェルド家とは交流を深めておきたかったんだ。キース君がお前を気に入ってくれて良かったよ。彼はお前が十八歳になったら正式に婚約したいと言っている。きっとお前の誕生日パーティーでも顔を合わせる事になるだろう。失礼の無いようにしなさい」

「——はい」

十八歳。それは、この国を生きる人間が成人と見なされる年齢。

私の十八歳の誕生日まで、あと二カ月。残された時間は短い。

きっと私は何も出来ないままこの二カ月を過ごし、スタインフェルド家に嫁ぐ事になるのだろう。

もう、感情なんて物を持つてはいけない。そんな思考が少しずつ自身の中に広がっていくのを感じながら、手紙を閉じ、封筒の中に戻した。

——「貴方は、幸せ」。

いつかの母が言った言葉。母も、エインズワース家に嫁いだ時今の私と同じ気持ちだったのだろうか。

母は今も顔色一つ変えず、話に関与するつもりも無い様で黙々と食事を口に運んでいる。私の婚約には、興味を一切示していない様だ。

——私は、幸せ。

心の中で、そう唱えてみる。だが、それをすればする程、心が石化していく様に重くなっていく。

「エル、どうしたんだ。食べないのかい？」

父の声。それが、やけに遠くで聞こえた様な気がした。

自分が自分でなくなってしまう様で、酷く気分が悪い。だが、その気分の悪ささえも、段々と私では無い人間の物の様に感じてくる。

「少し、婚約の話に驚いただけよ。大丈夫」

父に、再び笑顔を見せる。

「ただ、ごめんなさい。今日は先に失礼するわ」

皿には料理が残ったまま。この後、父が料理人を叱責するかどうかは私には分からない。

だが今の父は婚約の話で頭がいっぱいの様で、私が席を立つても咎める様な事はなかった。

「キース君に合う日の為にも、今から十分に休息を取っておくといい。睡眠と休息が、女性の美を保つ秘訣だと良く言われているだろう。お前も、今は自分の容姿を磨く事を最優先に考えなさい。——キース君の為に」

父の声を背で聞きながら、晚餐室の扉に手を掛ける。

私は今から何処へ戻るというのだろう。

寝室に戻り、少し早いが寝間着に着替え、ベッドに潜り込む。きつと、今晚も眠りにつくことは出来ない。だが、どう足掻いても陽は昇り、日付は過ぎていく。

私に、戻る場所などない。私に、休息をとれる場所はない。

私はもう、止まる事は出来ない。

何処にも、戻れない。

VII Nightcap tea

父から婚約の話を聞いて、二日が経過した。

あの晩食事をした直後、父は「仕事」という名目で外出をし、二日経過した今もまだ帰宅していない。

父は昔から仕事を理由に外泊する事が多く、今回の事も決して珍しい事では無い。寧ろ、父が家に居ない日は私や使用人が唯一羽を伸ばせる日であり、誰もが心待ちにしている時でもあった。

だが、母だけは父の外泊をどう考えているのか未だに分からない。

父が家を空ける度に真っ先に書齋^{ライブラリー}へ向かい、使用人に沢山の書籍を自室に運ばせたとしたら、「読書に集中したい」と言つて部屋に閉じ籠つたまま出てこなくなってしまう。

それは父が居ない恋しさを読書で紛らせているのか、それとも父が居る日は読書に集中できないのかは分からないが、誰が部屋を訪ねても返事は無く、日によつ

ては食事すらとらない時もあり、その都度使用人が頭を抱えていた。

「――奥様、今日は一度もお顔を見せてくれなかったんですよ」

二十三時半の寝室で、紅茶の準備をするメアリーが小さな溜息を吐く。

「それはいつもの事でしょう。大丈夫よ、お腹が空いたら出てくるわ」

そんなメアリーを諭す様^{さま}に声を掛け、ベッドに深く腰掛ける。

メアリーとのぎこちない関係は、あの日以降暫く続いたが、今ではそれもすっかり解^とけまたお茶会^{ティータイム}を共に出来る仲に戻っていた。

そして彼女の顔と腕の傷も、適切な治療を受けさせる事は出来なかったものの、今や殆ど目立たない程にまで回復している。

「そんな、奥様を動物みたいに……」

メアリーが呆れ顔で、丁寧な手つきでポットの中に茶葉を入れていく。

両親の監視下^{ナイトキヤップテイ}に置かれていないメアリーは普段よりも明るく見え、先程突発的に誘った夜のお茶会にも快く応じてくれた。今晚の会話も、使用人というより、一人の女性としている様な気分になれる程、口調も表情も柔らかい。

「お母様の事は、放っておいてあげた方がいいんじゃないかしら」

「そういう訳にはいかないのです。もし奥様のお身体に何か有れば、旦那様に叱ら

れてしまいます」

「そうだけど、お母様は想像している以上に頑固なのよ」

ポットの中に湯が注がれていくのを眺めながら、無意識的に溜息を吐く。

このまま父が帰ってこなければ、母が部屋から出てこなければ、私は、私達はこうして気楽に過ごす事が出来るのだろうか。

婚約だって、全て無かった事に出来るのだろうか。

唯一の楽しい時間の筈なのに、ふとした瞬間に脳裏を過る現実。

どうせ数日で父はこの家に戻り、母も部屋に引き籠るのを止め普段通りの生活に戻る。決して、全て無かった事にはならない。

「——お嬢様？　どうかなさいましたか？」

メアリーが、不安げに私の顔を覗き込む。

彼女は、まだ私の婚約の話を知らない。きっと、使用人は知る必要の無い事だからと、両親からも敢えて伝えられる事は無いのだろう。

このまま私が伝えず黙っていれば、私が正式に婚約した後人伝てに知る事になる。使用人ならそれが当然だろうが、彼女は私の大切な友人でもあった。婚約を無かった事に出来ないのなら、せめて彼女には私の口からその事実を伝えたい。

「あのね、メアリー」

彼女の顔が見られず、床の一点を見つめたままゆっくりと言葉を紡ぐ。

彼女は祝福をするだろうか、それとも悲しむだろうか。婚約が決まれば、早急に婚姻に向けて準備を始める。そうなれば彼女とこうしてお茶会ディレクティブを共にする事は出来なくなる上、私はキース様と共に新居へと移る事になる。そうすれば、彼女ともお別れだ。

せめてメアリーとモーリスだけでも、新たな家で使用人として招く事は出来ないかと父に交渉するつもりではあるが、それは父だけでなくキース様にも許可を得なくてはならない事柄だ。きっとスムーズに話が進む事は無い。

「——わ、私」

自然と、声が震える。

私はきつと、彼女が後者の反応を示すと思っているのだろう。

彼女を傷つけたくない。彼女を、この家に一人きりにさせたくない。

そんな気持ちでいっばいで、中々言葉にする事が出来ない。

「私ね」

深く俯き、強く目を瞑るつぶ。

「——婚約……する事に、なつたみたいなの」

蚊の鳴くような声で、漸く告げた言葉。だが、メアリーは何も言わなかった。代わりに聞こえたのは、ぱりん、と何かが割れる音。

瞳を開き、メアリーの方へと視線を向ける。

「——あ、……も、……申し訳、御座いません」

メアリーの足元には、先程まで彼女の手持たれていたティーカップが粉々になつて散らばつていた。

酷く動揺した様子の彼女が、ぎこちない動きでその場に座り込み、カップの破片を拾い集める。

その瞬間、フラッシュバックしたのは「あの日」の光景。

血塗れになつたメアリーと、恐ろしい父の顔。

「触らないで！」

思わず叫んだ声に、メアリーの手がぴたりと止まる。

「——私が、私が片付けるから……」

ベッドから腰を上げ、崩れ落ちる様に割れたカップの前に座り込む。そしてゆっくりと破片を拾い集めながら、どうにか脳裏に焼き付いたあの光景を消そうと必死

に思考を回していた。

「——お嬢様は、婚約を、お望みなのですか？」

だがメアリーの今にも泣きだしそうな声に、その問いに、思考が止まる。

父から婚約の話を聞いて、私は何を思った？ 何を望んだ？

婚約が無かった事になればいいとは、確かに思った。だが、一度でも婚約を拒んだらどうか。婚約などしたくないと、はっきり思っただらうか。

——思っていない筈だ。

その理由はたった一つ。ここで、婚約などしたくないと、明確に拒んでしまえば私はもう従順出来なくなってしまうからだ。

私は駆け落ちをする相手も居ない。心が弱い所為で、この屋敷を出る決心もつかない。

そんな私が、少しでも生き延びる為。それは、
“抗わない事” だった。

「——お父様が、望んでいるの」

顔を上げ、メアリーと視線を交わらせる。

そして彼女を安心させるように笑って、また “私は幸せだ” と心の中で唱える。
「そんな、そんなの、おかしいじゃないですか……」

彼女の手が、破片を拾い集める私の手を握った。

「私は、上流階級の人間は何不自由無く、幸せな暮らしを送っているのだと教わりました。ですが、ですが……今のお嬢様は……、幸せじゃ——」

「——メアリー」

彼女の言葉を遮り、名前を呼ぶ。

「仕方が無い事なの」

メアリーの手を解き、今度は私が彼女の手を強く握る。

「仕方、無いのよ。私は、この家の娘だから」

——今私は、彼女に上手く笑えていただろうか。彼女を安心させられただろうか。だが彼女の歪んだ表情で、残酷にもその答えを知る。

「——逃げて、しまいましたよう」

彼女の腕が、首元に回った。そのまま縋る様に抱きしめられ、彼女が苦しげな声で言葉を紡ぐ。

「私と二人で、何処か、遠い所へ」

私の首に回された腕に、僅かに力が籠った。

「ロンドンを離れて、遠い田舎で、二人で暮らしましょう。ヨークや、ドラムなんていかがでしょうか。ここからも遠く、人も少なく過ごしやすい」

「……メアリー」

「お嬢様は、一人で生きていける程の知識がある筈です。その為に、モーリスさん達から様々な事を教わったのでしょうか？ 私だって、まだ、まだこの家では雑用係ですが、使用人として生きています。二人でなら、生きていきます。ねえ、エルお嬢様」

彼女の言葉は、ただ純粹に嬉しかった。

本当に、彼女と二人で逃げてしまおうかとも思った。このまま、両親が居ない間に、誰にも気づかれぬ様に。

きっと、モーリスだって怒ったりしない。寧ろ彼なら、手助けだってしてくれそうだ。

——だが、そんな事してはいけない。

私の大切な、大切なメアリーを、私自身の人生に巻き込んではいけない。彼女は心優しい女性だ。きっと私を心配するあまりにこんな事を言い出したのだ

ろう。

彼女に甘えてはいけない。これは全て、私一人の問題だ。

「ありがとう、メアリー」

彼女の背を撫で、ゆっくりと身体を離す。

「嬉しいわ。でも、その気持ちだけで十分」

「——どうして……」

「私は大丈夫、大丈夫よ」

彼女の頬を、涙が伝う。いつも冷静で、どんな時でも強かった彼女が、こんな風に泣くなんて。

メアリーの涙を指で拭い、彼女と額を合わせる。

「大丈夫」

もう一度囁き、今度は私が彼女を抱きしめた。

——ああ愛しい、愛しい私のメアリー。どうか、泣かないで。

共に逃げようと、そう言ってくれただけで私の心は救われた。その言葉だけで、心は軽くなった。

大丈夫、私はこれからも貴族の一人として生きていける。心を、感情を殺す事だ

つて覚えた。

だけドメアリー、貴女だけは。

「——貴女だけは、いつまでも私の友人でいて頂戴」

VIII Deepening mystery

カーテンが全て閉め切られた薄暗い寝室。

今は、何時頃だろうか。昨晚から微睡^{まどろみ}んでは目覚めてを繰り返している為、体内時計が狂い時間感覚が麻痺してしまっている。

強制的に肺から吐き出される咳に喉を傷めながら、ゆっくりと身体を起こした。その拍子に、ぼとり、と膝の上に湿ったタオルが落ちる。使用人の誰かが、定期的に替えに来てくれているのだろう。それはまだひんやりとしていて、触れていると心地が良かった。

ベッドから降り、僅かに捲れたグリーンのベルベットカーテンの隙間から外を覗

く。

分厚い雲が空を覆い尽くし、街には激しい雨が降り注いでいる。ロンドンの天気
の悪さは相変わらずだ。

それよりも、今の時刻が知りたい。カーテンを大きく開き、壁時計が設置されて
いる方へと視線を投げた。

「――あら……？」

ずっと位置が変えられる事無く設置されていた壁時計が、何故だかどこにも見当
たらない。誰かが時計を外してしまったのだろうか。

考えられる事と言えば、この部屋の時計が狂ってしまい、修理をする為に誰かが
持ち出した事くらいだが、この屋敷には時計が狂ってしまい、修理をする為に誰かが
い時計を持つてきて設置するという事も出来た筈だ。

現時刻を知る事が出来ない不快感は凄まじい。それは不快感を超えて、不安を抱
く程だ。だが、纏わりつく鬱陶しい頭痛と倦怠感に、寝室を出て時刻を確認しに行
く気にはどうしてもなれなかった。

大きな溜息を吐き、再びベッドに潜り込む。

私は幼少期から、過度にストレスを感じた際必ず体調を崩す。決して微熱とは言

えない体温に、風邪によく似た症状。

ストレスが引き金になった心因性の体調不良だったとしても、やはり発熱はつらいものだ。

こうしている間にも、時間は過ぎていく。今の様に不安な期間を過ごす位なら、いつその事今すぐにでも正式に婚約し、婚姻までしてしまいたい。

そうすれば、私の不安はこれ以上大きくなる事は無く、余計な事を考える事も無くなるというのに。

頭の片隅に残って消えない、約三週間前の、晩の事。

メアリーから「共に逃げよう」と言われ、それを拒絶した事を、心の何処かで後悔していた。

あのまま彼女と屋敷を出る選択をしていれば、彼女自身も救われる未来があつたのかもしれない。

スタインフェルド家の新居に、メアリーやモーリスを連れていきたいと父に交渉しても、父がその要求に応じてくれない事はなんとなく予測できていた。彼女としては、この屋敷に一人になるよりも、私と何処か遠い場所へ逃げてしまった方が幸せだと思ったのかもしれない。

ロンドンを離れ、何処か遠くの街でメアリーと暮らしていく事をぼんやりと想像してみろ。

知らない街並みに、知らない土地。そこで新しく、二人で慎ましく暮らす。上手くいかない事も多いだろうが、彼女と二人なら、それはそれで幸せだと感じるのでは無いかと思えた。

だが、決死の思いで伝えてくれた彼女の言葉を、彼女の気持ち、拒絶した私が今更こんな事を思うだなんて、お門違いも甚だしい。酷い後悔と罪悪感、自己嫌悪に襲われ、枕に顔を押し付けた。

コンコン、と部屋に響いた、控えめなノックの音。使用人の誰かだろうと、枯れた声で返事をする。

「お加減は如何でしょうか」

ゆっくりと開いた扉の音と共に聞こえたのは、馴染み深い声。それは鈴を転がした様に美しく、耳に心地よく響く声だ。だが、今だけはその声を聞きたくなかった。枕から顔を上げ、扉の方へと視線を向ける。

「——メアリー」

私に微笑みを向ける彼女に、あの晩の面影は無い。今の彼女は、“メイド”の使用人^ドのメアリーだ。

彼女とは、あの晩以降会話を交わしていなかった。普段なら暇さえあれば談笑をしていたのに、三週間も会話を交わさなかっただなんて、今までの私達からすればとても信じられない事だった。

「大分、良くなったわ。ありがとう」

当たり触りの無い返答をし、彼女から目を反らす。

また再び、彼女との間に出てきてしまった壁。その壁を作っているのは彼女の方か、それとも私の方か。

「——キース様がお見えになりました」

変わらない声音で伝えられた言葉に、ドキリと鼓動が跳ねる。

「……キース様が？ どうして……？」

「お嬢様がお風邪を召されたと聞き、お見舞いにだそうで」

「……そう」

息を一つ吐き、ベッドからゆっくり身体を起こす。

何故こんな時期に此処へ来たのかと疑問に思ったが、未来の妻が体調を崩したと

聞いたから見舞いに来るのが常識というものであろう。

「では、ご挨拶に行かなければならないわね」

見舞いだと言うのに、何故私が重い身体を引き摺って挨拶に向かわねばならないのか。内心そう毒突きながら、ベッドの外側へ足を下す。

「ああ、いえ。お嬢様はそのままで」だが、メアリーが即座に私の行動を制した。「キース様が、お嬢様のお身体に障ると仰おこやつて……。今は旦那様と応接室にいらつしやいます」

「——お父様はそれでいいと？」

幾ら彼が問題無いと言つても、父本人が納得しなければ意味が無い。

世間体を一番に気にする父の事だ。きっとキース様のご厚意など受け取らず、私が応接室へ顔を出す事を望むだろう。

「ああ、それが……。旦那様もお嬢様は自室で休んでいて問題無いと……」

「——え？」

思わず、彼女の言葉を聞き返す。

「それは、お父様本人が？」

メアリー自身も父の対応には驚くものがあつたのか、曖昧に頷きながら複雑な表

情を浮かべた。

「他の皆は？ モーリスも、今朝此处へ来たきり見かけないけど」

「恐らく、応接室付近……かと」

「付近……？」

彼女の顔が、ほんの一瞬強張る。だがすぐに優しい笑みに戻り、彼女が私に深々と頭を下げた。

なんの真似かと身構えるが、続けて彼女が発した言葉にその意味を理解する。

「エルお嬢様、キース・スタインフェルド様とのご婚約おめでとうございます」

洗練された無駄のない動き。使用人の鑑^{かがみ}だ。そんな事を呑気に思いながら、彼女の姿を眺める。

正直、彼女の発言に然程衝撃は無かった。婚約が早まる事なんて、よくある話だ。珍しい事では無い。

——ああ、婚約が正式に決まってしまったのか。

今思う事は、ただそれだけだった。

「ありがとう、メアリー」

彼女に微笑みかけ、ベッドの外に下ろしていた足を再び布団の中へと入れ込む。

令嬢の婚約など、使用人が知る必要の無い事だと皆には知らされたいと思つていたが、彼女の口ぶりからするとどうやらそうでは無かつたらしい。こうして使用人にきちんと知らされるなら、あの晩メアリーに、自身の口から伝える必要は無かつたのではないかと思えてくる。

「わざわざ、それだけを言いに？」

視線を逸らしたまま、私のベッドの隣に立つメアリーに問いかける。

もし本当にそれだけを言いに來たのなら、彼女も相当質が悪い。もしやあの晩拒絶した事を、根に持っていたりするのだろうか。

「ああ、私が此処に來た理由は——」

メアリーが徐おもむろに、エプロンのポケットから何かを取り出した。それは掌てのひら二つ分ほどの大きさの額縁。

「お嬢様は約一ヶ月後、成人をお迎えになります。更にはご婚約が決まった事で、今以上にお忙しくなると思ひまして、少し早いですが」

彼女がその額縁の表を伏せた状態で、私の方へと怖ず怖ずと差し出した。

「十八歳のお誕生日、おめでとうございます」

私に向けられたのは、先程よりも優しい微笑み。

どうやら、彼女との間に出来た壁も、彼女が根に持つているのかもしれないという憶測も、全て私の勘違いだった様だ。安堵感から、自然と表情が緩む。

彼女から額縁を受け取り、ゆっくりと表に返した。

「ご迷惑は承知の上ですが、私からのささやかな贈り物プレゼントでございます」

額縁に入れられたのは、決して質の良くないオフホワイトの紙。だが、その紙にはお金に換えられない程の美しい絵が描かれていた。

品種の違う、様々な薔薇の中に佇む穏やかな表情を浮かべた女性。ダークブラウンのコンテ一色で描かれた物だが、その美しい作画から不思議と色付いて見えてくる。

そしてそこに描かれた女性。それは、紛れもなく――

「――私？」

絵から目を離さずに問うと、メアリーが「庭園にいらつしやる時のお嬢様が大変お美しかったので」と消え入りそうな声で言った。

自身の絵を描いて貰った事は、これが初めてでは無い。昔父が名の知れた画家を呼び、私の絵を描かせていた事があつた。やはり名の知れた画家だというだけあり、見栄えは最高の物で、当時の父は大層喜んでいた事を覚えている。

だが私は、そんな画家が描いた絵よりも、彼女が描いたこの絵の方がよほど美しく、魅力的に見えた。

「ありがとう、嬉しいわ」

絵を見つめたまま、想いのままにその言葉を口にする。たった一度でも、この絵から目を離してしまうのが惜しい位だ。そして、この感情を上手く言葉に出来ない事も悔やまれる。

「大切にするわね」

漸く絵から視線を外し、顔を上げメアリーに微笑みかける。する彼女が、僅かに安堵の表情を見せた。

彼女が絵を描く事を趣味にしているのは昔から知っていた。だが、今まで彼女は頑なにその絵を見せてくれる事は無かった。彼女はきつと、自分の描く絵に自信が無かったのだろう。

彼女のその表情が見られた事に、此方も釣られて安堵する。

「では、私はこれで。あまり長居してしまうと、奥様に怪しまれてしまいますので」
「ええ、ありがとう」

メアリーが寢室を出て行ったのを見送り、再び手元の絵に視線を落とす。私に贈

るなんて勿体ないと思つてしまう程、美しい絵だ。

もつと早く彼女の才能に気付いていれば、どうにかして彼女に良い画材を与える事が出来たというのに。これを趣味に留まらせてしまうのは非常に惜しい。彼女が自由に絵を学べる環境があれば、きつとかつて私の絵を描いた画家の様に才能を伸ばせるに違いない。

ふと、当時その画家に描いて貰った私の絵はどんなものだったかと疑問が浮かんだ。もう随分と昔の事だ。どれだけ記憶を巡らせても、その絵を思い出す事は出来ない。

確か、その絵は父の仕事部屋に飾られていた筈。今、父は応接室でキース様の相手をしている為暫く出てくる事は無いだろう。今なら、こっそりと仕事部屋に入つてその絵を見てくる事は可能だ。

メアリーから贈られた絵をナイトテーブルに立て、そつと音を立てずにベッドから降りる。

寝間着のまま屋敷内を動き回るのは気が引けるが、仕事部屋に絵を見に行くだけだ。少しだけなら問題無いだろう。シフォン生地の柔らかいガウンを羽織り、寝室の扉を開く。

扉から頭だけを外に出し、左右を見渡し人が居ない事を確認してから廊下へ出た。父の仕事部屋は、確か私の寝室から然程離れて居なかった筈だ。普段以上に静かな屋敷の中をゆつくりと歩きながら、目的地を目指す。

「——！」

ふと耳を衝いた、人の話し声。咄嗟に壁に背を付け、曲がり角の先に視線を向ける。

話していたのはこの家の使用人。約一年前に来たばかりの、まだ比較的新しい二人だ。

好奇心か、悪戯心か。息を潜め、二人の会話に耳を傾ける。

「——キース様、容姿も美しくて、紳士的で素敵な人ね。先程廊下ですれ違ったのだけど、丁寧に会釈してくださったの。私達使用人にも優しいなんて、貴族様の中にも心優しい方っていらつしやるのね……！」

「——ちよっと、それは聞き捨てならないわね。エインズワース家のご主人様だつて、とても心優しい方だと思ふけど？」

「——ええ？ 旦那様の事？」

「——違うわよ、エルお嬢様の事！ 令嬢なんて、どこの家も我儘で傲慢で、使用

人をゴミの様に扱う奴らばかり。前に勤めていた家の令嬢なんて特に酷くって、私が不注意で彼女のドレスを汚してしまった時なんて『死んで償いなさい』と言われたのよ！ほんと、シンデレラにでもなった気分だったわ」

「——確かに、うちのお嬢様は貴族様だとは思えない程心優しい方よね。彼女と話していると、身分を忘れてしまう程落ち着くの。まるで聖女様みたい」

「——そんな大袈裟な。でも、気持ちにはわかるわ。エルお嬢様の事だけは、心からお慕い出来るのよね。だから、キース様との正式なご婚約も心から祝福出来るわ。彼女には、幸せになつてもらいたいもの」

心がむずむずするような、温かみのある言葉に思わず笑みが漏れる。だが、これは全て盗み聞きだという事に気付き、一気にその嬉しさも罪悪感に塗りつぶされた。この角を曲がらなくとも、父の仕事部屋には行けた筈だ。少々遠回りになつてしまふが、別の道を使おう。

元来た道を戻ろうと、^{きびす}踵を返す。

「——そういえば私、キース様の良くない噂を聞いてしまつて」

使用人の言葉に、びたりと足が止まる。私を聖女と例えた使用人の声だ。これ以上聞くべきでは無いと本能的に思いながらも、元居た場所にこっそりと戻る。

「——良くない噂？ そんなもの、貴族様なら誰だつてあるんじゃない？」

「——ううん、私もその類の物だと思ふのだけど……。少しでもエルお嬢様の身に危険があるかもしれないと思うと、少し心配で……」

「——お嬢様の身に？ どういう事？」

「——私も、よく知っている訳では無いの。又聞きだから、多分本当の話では無いと思うけど……」

「——もったいぶってないで、早く話なさいよ」

早鐘を打つ心臓に、酷い震え。心音が脳に煩く響き、このままでは彼女達に気付かれてしまいそうだ。

私の身に危険が？ 一体どんな？ その噂はどこで聞いたの？ 信憑性はあるの？ 様々な疑問が浮かんでは消え、震えが更に酷くなる。

「——キース様ね……。特殊性癖があるみたいなの」

「——特殊性癖！？」

「——そう、それも……。加虐、性愛……。だとか」

「——それって……」

「——勿論、ただの噂だと思うの！ 実際お会いしたキース様、全然そんな事する

様な人に見えなかつたし！ だけど……美しい娼婦ばかりを高値で雇つては、後遺症が残る程の酷い性暴力を振るつて……噂が……。実際、そう話している娼婦の子達も多く居るのよ」

「——そんな……！ もしそれが本当なら……お嬢様を婚約者に迎えた理由……」

彼女達の会話を最後まで聞き終わる前に、逃げる様に來た道を引き返した。

やはり、聞くべきでは無かつた。あの時、足を止めなければよかつた。

様々な想いが頭痛を伴い頭の中を回る。

きつと今の私は、酷く恐怖を感じているのだろう。だが、それから逃げる事が出来ないのも理解している。

自身の心にこびりついた諦観^{ていかん}は拭えない。

「……………」

息も絶え絶え、足を止めた先は父の仕事部屋。寝室に戻ろうとしていたつもりが、色々と考え事をしていた所為か此処へ辿り着いてしまった。

正直、先程の使用人達の会話が頭を埋め尽くし絵画どころでは無いが、せつかく此処まで來たのならと、息をゆつくりと整えながら部屋のドアノブに手を掛ける。

幸い、仕事部屋に鍵は掛かっていなかった。すんなりと開いた扉の先から、僅かに甘いムスクの香りが漂ってくる。父が愛用している香水の香りだ。

ゆつくりと部屋に足を踏み入れ、後ろ手に扉を閉める。

父の仕事部屋は、私の寝室より一回り程大きい。

本がびつしりと埋め尽くされた、天井まで届く無数の棚。一目で高価だと分かる、ダマスク柄の壁紙。そして、赤いベルベットのカーテン。

デスクの上は書類や手紙で少々散らかっていて、デスク付近に置かれた簡易的なベッドは乱れている。確かこの部屋だけは、使用人が入る事を許可していなかった筈だ。重要な書類や、触れて欲しくない物が多くあるから、だとか。

徒に本棚にかかった埃を指でなぞり、汚れた指先に息を吹きかけ払う。

「――あ」

目に付いた、イーゼルに立てられたカンバス。美しい絵が描かれたそれに、思わず声を漏らす。

恐らくあれが、私の目当ての物だ。足早に近づき、腰を屈めてカンバスを覗く。

「……？」

カンバスに描かれているのは、まだ幼い少女。ふわふわとカールしたアッシュゴ

ールドの髪に、口元の左側に描かれた小さなほくろ。そして少女が身に纏っている服は、私が幼少期に気に入っていた、グリーンのベルベット素材のワンピースだ。それは限りなく、私に近い少女。

だが、その少女は私の様で、私では無い。

イエローブラウン。それが私の瞳の色だ。昔、メアリーが私の瞳を宝石のシトリンの様だと言ってくれた事があり、自分でも特別気に入っている。

だというのに、何故だかこのキャンバスに描かれた少女はエメラルドグリーンの瞳をしていた。

「——なんで……」

思わず、そのキャンバスを眺めながら独り言を漏らす。

その時、突如部屋の外から足音が聞こえた。その足音は有ろう事かこの部屋の前で止まり、ドアノブが回される。

咄嗟に隠れた先は、父のデスクの裏。入ってきた人物が父だったとしたら直ぐに気付かれてしまうが、今隠れられる場所といったら此処以外に無かった。息を潜め、デスク裏からそっと部屋に入ってきた人物の方に視線を向ける。

「……！」

入ってきた人物は、私の良く知った人物だった。その人物は迷うこと無くベッドの方へと足を進め、雑な手付きでブランケットを捲る。

そしてベッドの中から「ピアス」を手に取り、一度も振り返る事無く早々と部屋を出て行ってしまった。

再び訪れた静寂に、深く息を吐く。そしてデスクに手を突きながらゆつくりと立ち上がった。

「——メアリー……？」

扉を見つめながら、「その人物」の名を呟く。

何故彼女が、父の仕事部屋に。此处は確かに、使用人の立ち入りを禁止されている筈だ。

——彼女は、いつも小さなサファイアが付いたピアスを右耳にしていた。実母と片耳ずつ持っている大切なピアスだそうで、その話を私にしてくれた時はとても嬉しそうにしていた事を覚えている。

そして彼女が父のベッドの中から取ったのは、彼女が耳にしていた筈のサファイアのピアス。

先程、彼女が私の部屋に來た時にはそのピアスをしていなかった。彼女がその話

を聞かせてくれた時、寝坊してしまった日などは付けろのを忘れてしまうと云っていた為、てっきり今日も彼女は寝坊をしてしまったのだと思っていた。

何故、彼女のピアスが父のベッドの中にあつたのか。

思い浮かんでしまった最悪の思想は止まる事無く、扉を見つめたまま、暫くその場から動く事が出来なかった。

IX What was robbed

十八歳の誕生日、及び誕生日パーティーまで残り二週間。大切な日を控えているからか、今日からレッスン内容が大幅に変わり、社交ダンスとコミュニケーションのレッスンが一日に多く組み込まれる様になった。

一日に苦手な事ばかりしていると気が滅^め入^いってしまう。

そんな気分を少しでも晴らそうと、寝室の窓際にアームソファを置き、風に当たりながらお気に入りの本を読んでいた。

だが私の頭の中に根強く残るのは、使用人達メイドが話していたキース様の噂、父の仕事部屋の絵画、そしてメアリーのサファイアのピアス。それらが支配するように頭を回る所為で、息抜きの読書にすらまともに集中が出来ない。

溜息を吐き、ぱたりと本を閉じた。

開いた窓から流れ込む暖かな風が、ふわりと髪を揺らす。

あの絵画に描かれていた女性性は、確かに私だった。画家に絵を描いて貰ったのは事実であり、当時の記憶も臃おぼろげではあるがしっかりと残っている。

だがどうして、瞳の色だけが違ったのか。光の加減などで、その時の画家には私の瞳がグリーンに見えていたのだろうか。だとしても、その絵画を指摘する者は誰一人と居なかった。

再び溜息を吐き、ソファから腰を上げる。本をソファに置き、足を向けた先はベツドの隣のナイトテーブル。

メアリーから貰った絵は、毎晩見る事が出来る様にナイトテーブルの上に飾っていた。ベッドに腰かけ、テーブルに手を伸ばす。

「……………」

だが、その手はナイトテーブルに届く前に止まった。

——メアリーから貰った、あの絵が無い。

今朝までは、確かに此処に飾っていた筈だ。

勢いよくベッドから立ち上がり、床に膝を付いてナイトテーブルの引き出しを乱暴に全て開く。どの引き出しにもあの絵は入っていない。

今度は身体を倒し、床に頬を付けベッドの下を覗き込んでみる。こんな姿、両親に見つかれば「はしたない」と叱られてしまう事間違いない。だが今はそれよりも、彼女から貰った絵が消えてしまった事の方が重要だった。

床を這い、ベッドの下やテーブルの下を隅々まで探す。だがどれだけ探しても、絵は見つからない。

身体を起こし、沸き上がる不安に震える息を吐いた。

ドレスの裾が捲れるのも気に留めず素早く立ち上がり、寢室を飛び出す。

私の部屋に無断で入れるのは、両親と限られた使用人。だが使用人が入るのはベツドメイキングと掃除の時のみ。彼らが私の私物に無断で触れ、持ち出すなんて考えられない。となると、両親のどちらかだ。

きつく締めたコルセットが苦しく、思う様に呼吸が出来ない。走る度に酸素欠乏の所為か肺がズキズキと痛む。だがそれでも、足を止めずに廊下を駆ける。

辿り着いたのは、普段家族が集まる居間^{ベール}。

今にもその場に倒れてしまいそうな息切れと眩暈の中、最初に目に入ったのはブラウンのテーブルを囲む様に置かれたアームソファの一つに、腰掛け読書をする母の姿。母の視線は本に落ちたままで、息を切らせて居間に駆け込んできた私に見向きもしない。まるで、私が此処^{こゝ}に来る事を知っていたかの様だ。

そして次に視界に捉えたのは、暖炉の前に立ち尽くす父の姿。父の手に持たれているのは、私が探していた小さな額縁。

沸き上がる嫌な予感に、「……お父様」と息も絶え絶えその横顔に声を掛ける。

「随分と下手な絵だな。誰が描いた物だ」

静かな部屋に響く、父の低い声。

何故だか素直にメアリーが描いた物だと言えず、えっとそれは、などと曖昧に言い淀む。

「一シリングの価値すら無い様に見えるが……、これを描いた画家に幾ら払った？ 貧しい画家に集^たられて、お恵みでもしたのか？」

「——そんな、それは、違うの……お金なんて……そうじゃなくて……私の、大切な……」

整わない呼吸に、纏まらない言葉。それでも、無理矢理言葉を紡ぐ。

「お願い、お父様……それを、返して頂戴」

「絵を描かせたいなら、優秀な画家を雇おう」

「——違う、そうじゃ、なくて」

父がゆらりと顔を上げ、此方に視線を向ける。

「何が違うんだ。こんな物、お前に必要ないだろう」

「——だめ、だめよ。必要な、大切な物なの」

「おかしいな、エル。お前は遂に階級の低い人間に絆はだされてしまったのか？」

「……違っ——」

父の、額縁を持った手が僅かに動く。

「——待つて！」

無慈悲にも、残酷にも、冷酷にも。この状況を例えるならどの言葉が一番適切だろうか。

父の手によって暖炉の火の中に吸い込まれていく額縁は、一瞬ぱちぱちと火花を

散らしただけで無残にも跡形もなく消え去った。

見事的中した予感に、絶望だけが残りぺたりとその場に座り込む。

——十八歳のお誕生日、おめでとうございます。

——ご迷惑は承知の上ですが、私からのささやかな贈り物プレゼントでございます。

——庭園にいらつしやる時のお嬢様が大変お美しかったです。

メアリーの言葉が、走馬灯の様に脳内を駆け巡る。

何度彼女の間に壁を感じたとしても、最後には彼女は必ず私に笑ってくれた。私を想ってくれていた。

だからこそ、あの絵だけは婚姻しても絶対に肌身離さず持っていたいと思っていた。彼女を感じられる、唯一の物だから。

ふと遠目に見えた、原形を留めていない程に壊された時計。

少し前に、私の寝室から時計が無くなった事があった。その後直ぐに新しい時計を設置された為特別気に留めていなかったが、あれは確かに私の寝室に設置されていた物だ。

「——お父様、それ……」

アイビーを象^{かたど}った、ゴールドフレームの時計。秒針にはアイビーと同じグリーン
の宝石が埋め込まれていて、美しく愛らしい時計だと気に入っていた。

「ああ、これか」

私が時計を指している事に気付いた父が、まるで汚れ物に触れる様な手付きで壊
れた時計を持ち上げた。その拍子に、バラバラと歯車や秒針などの部品が零れ散ら
ばる。

「これは、モーリスが買った物だったんだよ」

「——モーリスが……？」

「ああそうだ。私に許可無く、彼の独断でね」

記憶を巡らせ、その時計が設置された時の事を思い返す。

確かに、父の言う通り私の寝室のその時計を設置したのはモーリスだった。だが
彼は、「旦那様から設置しておくように命じられた」と言っていた筈だ。

「全く、使用人の分際で私の娘に趣味の悪い時計をプレゼントするなんて。もっと
早く、気付くべきだったよ」

「——そ、そんな……」

「ああ、心配しなくともお前の寝室には新しい時計を設置しておいた。文字板にロベリアの花が描かれていただろう。お前が喜ぶと思つて、有名な画家にわざわざ描かせた物なんだよ」

「……」

父の言葉に、それ以上の言葉が出て来ない。

父は何故、此処まで使用人を目の敵にするのか。勿論他の屋敷でも、使用人に当たりが強い貴族は多い。だが、父のそれは度を越えている。

——もしや、父が目の敵にしているのは「使用人」では無いのではないか？

ふと思ひ浮かんだ思考に、背に冷汗が伝う。

「美しい花だろう？ 可愛いエルに良く似合う花だと思ふんだが、お前は氣に入つてくれなかつたのかい？」

「——い、いえ……」

酷く、声が震える。足も、手も、身体も、恐怖で震えが止まらない。

感情を、心を、殺す事も覚えた筈なのに。何故、何故こう大事な場面で、それが上手くできないのだろうか。

キース様の噂も不安要素の一つだが、ある意味、早く婚約が決まつて良かったの

かもしれない。

こんな父の元で生きる位なら、例え愛が無かったとしても別の家にさっさと嫁いでしまった方が余程マシだと思えた。

「——エル」

ソファの方から聞こえた母の落ち着いた声に、ほんの一瞬思考が其方^{そちら}へ向く。

一連の流れを見ていた母なら、父の行動を責める事は出来なくとも私に同情の一つ位してくれるのではないか。心の奥にまだ僅かに残った期待に、母の方へ顔を向けた。

「女性^{レディ}が床に膝を突くなんてはしたないわ。それに、これは貴女のためを思つての事なのよ」だがその期待は、案の定と言うべきか、無残にも打ち砕かれる。「エル、ほら立って」

はたりと本を閉じた母が、ソファから腰を上げた。そして私の傍まで歩を進め、私の腕を掴み引き上げる。

だが、酷い絶望感からか足に力が入らず、その場に立ち上がる事が出来ない。床の一点を見つめたまま、母の手を振り払う様に手を引いた。

「エル」

再度名前を呼ばれ、徐に母が私の顔に手を伸ばした。そして強い力で私の顎を掬い取り、視線を交わらせながらも一度、「エル」と名前を呼ぶ。

「エインズワース家に相応しい、聡明な娘。それが、貴女でしよう？」

顔に影のかかった母の顔。私に重圧を与える様なその声と言葉は、私を深い絶望へと追いやった。

「貴女はもうじき、スタインフェルド家に嫁ぐのよ。それがどういう事か、貴女なら分かるわよね」

にこりと、母が優しく笑う。

“もうそれ以上口を開くな”

それが、母の言葉に隠された本当の意味だという事を悟るのは然程難しい事では無かった。

——此処で母の手を振り払ったとしたら。父に暴言を吐いたとしたら。両親に、反抗をしたとしたら。

二人はどんな顔をするだろうか。どんな言葉を放つだろうか。行動に移す事が出来ない私には、それを想像する事は出来なかった。

X Birthday party

音の無い空間。

控室のドレッサーの前で、鏡に映る自分の姿を眺める。

胸元に散りばめられた無数のダイヤモンドに、何重にも重なるシルク素材のレース。何処かウエディングドレスを連想するドレスだが、このドレスを仕立てた職人曰く「天使」をイメージして作成したらしい。

確かにその職人が言うように、羽の様なデザインの刺繍が所々あしらわれ、背には一見翼はねの様にも見えるショートベールが縫い付けられている。どの角度から見ても美しい、最高級のドレスだ。

だがどれだけそのドレスが美しくとも、それを身に纏った自身が美しいとは思えなかった。

粗悪な茶葉で淹れた紅茶だろうと、高級なティーカップに注げば高価な物に見える様に、高価なドレスに沢山のダイヤモンドを身に付ければ、誰だって美しく気高

い女性になれる。

つまり、此処に立っているのが「私」でなくとも問題は無いという事だ。

社交界では、紅茶の味など重要視されない。大事なのは全て見た目である。求められるのは品位の高い令嬢。誰も、本当の私など興味が無い。

——私の事など、誰も見ていない。

小さな物音を立て、部屋の扉がゆっくりと開いた。

ノックも無しに部屋に入ってきたのは、今日私を此処まで着飾らせた張本人である父。

「エル、良く似合っているよ。このドレスを作らせて正解だった」

背後に回った父が、鏡越しに私の姿を見て満足気に笑った。そして私の肩を、氣味が悪い程優しく撫でる。

「もうパーティーの準備は整っている。皆、今日の主役ヒロインが来るのを楽しみに待っているよ」

囁くように告げられた言葉に、自然と早くなる鼓動。

誕生日パーティーというものは過去に何度も経験しているが、今日はキース様と

“婚約者”として初めて顔を合わせる場でもある。

私だって、全てに反抗したい訳では無い。これが政略結婚だったとしても、今後の人生もおいて一番の転機だ。出来る限り、夫となるキース様とは良好な関係を築いて行きたい。

極力彼を刺激しない様に、穏便に、事を済ませよう。キース様に今以上に気に入って貰えれば、父に叱られる事も、今後の生活も、悪い方向へとは進まない筈だ。そう心の中で何度も繰り返し返し、父に促されるまま控室を後にした。

父に連れられて歩く屋敷の廊下は普段と変わらない筈なのに、まるで別世界の様に思えた。

ヒールの高い靴は足に合わず、一歩進む度に足が悲鳴を上げる。普段よりきつく締められたコルセットは苦しいなんて言葉で言い表せるものでは無く、今にも倒れてしまいそうだった。

だがそれでも、背筋を伸ばし、表情を引き締め、父の後に続く。これが、今の私がすべき最低限の事だからだ。

辿り着いた、ホールに続く扉の前。扉を開かなくとも、中から聞こえる雑音にも似た人の声に大勢の人が集まっている事が分かる。

「エインズワース家の人間として、恥じない行動を心掛けなさい」

ホールの扉を開いた父が最後に告げた言葉。その言葉に重みを感じながら、小さく息を吐き、顔に笑顔を作った。

それは誰よりも気高いエインズワース家の娘、エル・エインズワースとしてのプライドでもあった。

＊

招待客への一通りの挨拶が済み、周りに気付かれない様小さく息を吐く。

十八歳になったのだからと勧められたワインは、高級な物だと聞いたが私の口に合う事は無かった。思わずそれを顔に出してしまった際は今までにない程の焦りを感じたが、周囲の殿方は「まだ幼さが残っていて愛らしい」と笑ってくれた。そのお陰か、今の所父の機嫌に変化は無い。

あと残されたのは、キース様への挨拶。他の招待客への挨拶とはまた別の緊張感

を感じながら、遠目に見える、金の髪が印象的な男性に歩み寄る。

「御無沙汰しております、キース・スタインフェルド様」

私を視界に捉えた彼にカーテシーを行い、優しく微笑み掛ける。

「ああ、君が僕の婚約者の、エル・エインズワースさんだね」

値踏みでもする様に見た彼が、紳士的だとも言える穏やかな笑みを浮かべた。

——君が？

彼が放った言葉に、僅かに違和感を抱く。父の話では、キース様の方が私を気に入って、婚約の申し出をしてきた、との事だった。実際私が読んだ手紙にも、それと同じ事が書かれていた筈だ。

だが今の彼の言葉を聞くに、彼は私の存在を認知していなかった様に思える。

やはりあの手紙は、キース様の本心では無く、両親から命じられて出した手紙だったのだろうか。彼も名家の嫡男であり、両親には逆らえない立場に居る筈だ。そう考えれば納得が出来る。

「本当に、天使の様に美しい人だね。君の様に美しい人が僕の奥さんになるだなんて、未だに信じられないよ」

「そんな、大袈裟ですわ。キース様こそ、とても端正なお顔立ちでいらつしやって

……、こうしてお話しているだけでも、周りの御令嬢に嫉妬されてしまいそう」

「ふふ、大袈裟なのは君も同じだね」

彼が笑い、私との距離を一步詰める。

想像していた以上に、彼は紳士的な人だ。使用人達の噂話が一瞬脳裏に浮かぶが、とても彼が噂通りの人間には見えない。

——だが、次に彼に問われた質問で、その思考にも亀裂が入る。

「君は、夫が妻に手を上げる事をどう思うかい？」

「——え……？」

思わず聞き返すが、その自身の声は酷く震えていた。

「そんなに怯えないでくれ。別に、君に手を上げようなんて思っちゃいないよ」唇が触れそうな程に私に顔を近づけた彼が、ふふ、と笑みを零す。

だがその笑みはとても紳士的な物では無く、何処か狂気を含んだ薄気味悪い笑みだった。

「——あ、……あ、の……」

「僕はね、何があつても妻は夫の言いなりになるべきだと思うんだ。夫の望む女になり、常に夫を支え、悦ばせ、そして時に暴力を振るわれても笑顔で耐え抜き、夫

の指示であれば別の男とも身体の関係を結ぶ——」

激しい動悸と共に、顔から血の気が引く。

がんがんと警報を鳴らす様に痛む頭に、目の前が真っ暗になる恐怖心を覚えた。

「おや？ 顔が真っ青だよ、大丈夫かい？」

私から顔を離れた彼が、私の顔に掛かった髪を払う。

私は今、どんな顔をしているだろうか。上手く、微笑みを保っていられているだろうか。

恐怖に支配された頭が「これ以上この男と共にいてはいけない」と叫ぶ。だが私は、彼と正式な婚約をし、数か月後には彼の妻になる。

決して、逃げられない。

「——キ、キース様ったら、ご冗談を」

彼の言葉を茶化す様に、無理に笑った。

出来れば、そのまま「冗談だよ」と言って欲しかった。抑^{から}揄^かっただけだと言って欲しかった。

だが、彼はたった一言「今は、冗談だと受け止めて貰っても構わないよ」と言って優しく笑った。

「——ご、ごめん、なさい。私、気分が優れなくて」

「僕が変な話をしてしまったからかな？」

「……いい、いえ、そんな事は。少し、人に酔ってしまったのかもしれない」

「ああ、今日は招待客が多いからねえ。バルコニーで少し風に当たったらどうかな？ だいぶ気分も楽になると思うよ」

今の彼は、出逢った時と変わらない紳士的なキース様だ。

だが、先程のあの狂気じみた薄気味悪い笑みが、今も頭の中に残って離れない。「ええ、そうします。それに、主役が居ない方がパーティーも盛り上がりやすいものね」

「ふふ、それには賛同できないけど。でも君の身体に何かあったら大変だ、ゆっくり休むと良い。君のお父様には僕から伝えておくよ」

「お気遣い感謝致します、キース様」

足早に彼から離れ、バルコニーを目指す。

正直酷い緊張から喉が渴いている為、何処かでドリンクを貰いたいところだが、今はそれよりも早く彼から離れたかった。

見つけたバルコニーに駆け寄り、普段以上に丁寧に磨かれたドアハンドルを乱暴

に掴み、扉を開く。

ふわりと吹いた風に、自身の髪が揺れる。

それに合わせてドレスの裾が弧を描く様に揺れ、火照った身体がゆつくりと冷めていくのを感じた。

後ろ手で扉を閉め、誰も居ないバルコニーで溜息を吐く。

彼——キース・スタインフェルドは、使用人^{メイド}達が噂していた通りの人間だ。先程の会話で確信を持った。

やはり、メアリーと共に逃げるべきだったかもしれない。例え愛が無かったとしても別の家に嫁いでしまった方がマシだなんて、決してそんな事は無かった。

バルコニーの柵に凭^{もた}れ掛かり、頭を抱える。

私は被害にあつた娼婦達と同じ様に、暴力を振るわれ続けるのだろうか。そして彼の望むまま、思いのままに扱われ、子を授かり、身体がボロボロになっても尚、彼の妻を続ける事になるのだろうか。

私が知らなかっただけで、世の中の貴族の家庭はどこも同じだったのかもしれない。私が生きてきた環境は、まだ幾らか幸せだったのかもしれない。

——この世界は、こんなにも狂っている。

今この瞬間に感じた、明確な絶望。あの日、あの晩、何故思い留まってしまったのだろう。モーリスに見つかっても、止められても、自身の首に短剣^{ダガ}を突き立ててしまえば良かった。

いや違う。もっと早く、早く、命を絶っておくべきだった。私の様な思考をしている人間は、この世の中で生きていく事は出来ない。

仮に自殺が禁忌^{タブ}だったとしても、それは神への反逆^{イナ}だったとしても、死を封印されても、私はもっと早く、この手で自分自身を葬^{はうむ}っておくべきだった。

今じゃもう、死ぬには遅すぎる。もう全てが、引き返せない場所まで来てしまった。

どうしたら。——どうしたら。

頭の中を埋め尽くす恐怖と絶望。今すぐにだって、此处から逃げ出したい。だけど、逃げ出せない。やり直せない。死ぬ事は許されない。

ほぼ狂乱状態であった私の耳には、もう周囲の音は聞こえていなかった。故に、バルコニーの扉が何者かによって開かれた事すらも気付かなかった。

「——何、してるんだ」

突如その場に響いた声に、びっくりと肩が揺れる。

その声は、父の物でも、キース様の物でも、使用人の物でもない。更には、先程挨拶に回った招待客の物とも違う。

では、一体誰の物だというのか。

恐怖に駆られたままゆつくりと振り返り、その人物の方へと視線を向けた。

XI Fascinating

頬を撫でる、柔らかな風。

振り返った先に居た一人の男性の姿に、私の思考は0になる。

正装をしているものの、スーツは着崩されていて結った髪も僅かに乱れている。先程挨拶に回った際、彼とは顔を合わせていない筈だ。それでも、招待客の顔はある程度把握している。

では、この人物は一体誰だろう。招待状を持っている人物であれば身内を一人のみ同伴させる事が可能だが、それでもこのパーティー内で一度も顔を合わせていな

いのは不自然である。

——だが。

自分でも不思議な位、今はそれ等の事がどうだって良かった。

見た者全てを恋に落としてしまいそうな程の、端正な顔立ち。まるで、精密な歩くドールの様。

ホールから聞こえる筈の人の声や、グラスがぶつかる音。それらは今の私の耳には届かず、変わりに聞こえるのは激しい心音。

魔法でも掛けられてしまった様に彼に心を奪われて、その場から動けなくなる。美しい絵画を見た時？

自分好みの物語に出会えた時？

ロンドンーと言われた女優の演技を見た時？

庭園に広がる薔薇の海を見た時？

——違う。今のこの感情は、過去のどの経験とも一致しない。

今まで生きてきた中で感じた事の無い高揚感に、何かを欲する様に神経が顫動する。

先程まで、頭の中は恐怖と絶望で埋め尽くされていたと言うのに。それも全て忘

れてしまう程、ただただ美しい彼に時を忘れて見惚れていた。

ふと我に返ったのは、彼と視線を交わらせて数秒経った頃。

人から問いかけられているのにも関わらず、何も答えずじつと見つめてしまった事に罪悪感を抱き、慌てて取り繕う様に言葉を発する。

「——ごめんなさい。少し、夜風に当たりたくて……。お邪魔だったかしら……」
思わず上擦つてしまった声に、一気に顔に熱が溜まる。

招待客に挨拶をする時も、キース様と顔を合わせた時とも違う緊張感に、鼓動は今までに無い程高鳴っていた。

彼が深く、私を見つめる。吸い込まれてしまいそうな、妖^{あや}しいローズレッドの瞳。

それは棘の多い何処か闇を含んだ赤薔薇の様であり、宝石のガーネットの様な神秘的な美しさを孕んでいる。

それに、美しいのはその瞳だけでは無い。瞳の色が良く映える、触り心地の良さ
そうな艶のある黒髪。いつまでも見ていられる、その端正な顔立ち。高身長でス
タイルも良く、肌の色もとても白い。

天使の様だと例えるのも悪くは無いが、彼はどちらかといえば、人を虜にする魔
力を持った悪魔の方だろうか。視線を交わらせているだけで、今にも魂を奪われて

しまいそう。

彼が私を見つめたまま何も言葉を発していないという事に気付いたのは、彼に問い掛けてから一分程が経ってからだった。自身を我に返らせたのは、ホールから聞こえたグラスの割れる音。

どうやら招待客の一人が泥酔したあまりに転倒し、持っていたワイングラスを落としてしまったらしい。タイル状にグラスが張られたバルコニーの扉越しに、ホールで数人の使用人が慌ただしく駆けまわっている姿が見える。

——無言は、肯定と同じ。

彼が私の問いかけに何も答えないという事は、つまり私が邪魔だという事だ。寧ろ、私を氣遣つて敢えてその言葉を使わないで居てくれたのかもしれない。

今まで、人に邪魔だと言われた事は何度もある。それこそ、もつと酷い言葉で罵られた事もあった。なのに今は、ほんの少し顔を合わせただけの彼に拒絶される事がとても苦しい。

先程とは違う、酷い動悸。 “傷付く” なんて言葉では、今の気持ちは言い表せない。

今迄こんな些細な事で泣くなんて事は無かったのに、今じゃ少し気を抜けば、両

の瞳から涙が零れてしまいそうだった。

「……では、私はこれで失礼します」

それを誤魔化す様に、柵から離れ足早に扉の方へと向かう。

本当は、彼をもう少し見ていたかった。どうせ、私はこの後地獄の様な空間に戻らなくてはいけないのだから、せめて今だけは全てから解放され、彼とほんの少しでも会話をしてみたかった。彼に感じていた、言葉にし難い何かの正体も、解き明かしてみたかった。

何故、邪魔か、などと聞いてしまったのだろう。そんな事聞かなければ、彼と会話をする機会を作れたかもしれないのに。

全てを忘れられたのも束の間、残酷にも現実には私を絶望へと引き戻す。

ああ、この後再びキース様と顔を合わせなくてはならない。彼は既に恐怖の対象でしか無く、出来る事ならもう二度と顔を合わせたくなかった。だが、婚約が正式に決まってしまった以上それは避けられない事だ。婚約を無かった事にしたいと言ったとしても、どうせ聞き入れて貰えないのだろう。

今更メアリーと二人で遠くへ、だなんて流石に虫が良すぎる。キース様の事をモーリスに相談したら、彼はなんというだろうか。だが、これ以上モーリスに心配を

掛けたくないのも事実だ。

そんな事をただただ悶々と考えながら、彼の隣をすり抜ける。

「――邪魔だなんて、言つてないだろ」

耳元で聞こえた、甘さを含んだ低い声。そして自身の腕を掴んで引き止める、大きく温かな手。

悶々とした思考が一気に吹き飛び、このまま壊れてしまうのではないかと思う程心臓は早鐘を打つ。

ゆっくりと振り返り、その美しい顔立ちに再び目を遣った。

彼の表情は変わらず、何を考えているかは全く分からない。だが、彼に拒絶されている訳では無い事は分かった。

たったそれだけなのに、愚かな程に舞い上がってしまう。それを顔に出さない様必死に抑え、震える口で言葉を紡ぐ。

「――では、お言葉に甘えてもう少しだけ……」

足を止め彼に向けたのは、私が嫌と言う程レッスンで教わってきた淑やかで美しい微笑み。他の招待客に向けた笑顔と同じ物だ。

だが、彼に触れられた腕に意識が向いてしまい、その微笑みも上手く保てない。

熱を帯びる手の感触は甘く、このままもつと、触れていて欲しいなんて思ってしまう。出来る事なら腕だけじゃなく、もつと奥深くまで。そんなはしたない思考に侵されてしまう程に、それは快楽的で心地が良かった。

だがその期待も虚しく、彼の手から力が抜けると腕が離される。

いつまでも初対面の女性の腕を掴んでいる男性など居ないだろう。それはマナー違反でもあり、下劣な行為とすら言える事だ。彼が手を離すのも、当然である。

そう思いながらも、それでも手の熱が引いていく感覚に寂しさを禁じ得なかった。ホール側に背を向け、柵に両腕を置き凭れ掛かる彼をほんの数秒だけ眺める。

彼のスーツは決して粗末な物では無いが、貴族の人間が身に着ける物と比べれば多少劣る。それに、高価なアクセサリや宝石なども一切つけておらず、髪を結っている細いリボンも高級な素材の物では無かった。

それ等を見るに、彼は恐らく上流階級の人間では無い。

人を値踏みしてしまう行為は嫌いだが、今は彼に何よりも興味を惹かれている為、少しくらいの観察は許して欲しい。

人一人分のスペースを空け、彼と同じ様にホールを背にして柵に凭れ掛かった。時々吹く冷たい風は、私の頬の熱を覚ますのには丁度良い。ついでに、私の高鳴

る心音も少し静めてはくれないか。このままでは、隣の彼に聞こえてしまいそうだ。私達の間に、特別会話は無い。不思議と居心地が悪い訳では無かったが、だからと言ってこのままでもいいという訳でも無い。やはり多少の気まずさというものは存在する。

思い返してみれば、使用人以外で階級の異なる人間と関わった事は過去に無かった。私にとって階級などどうだって良い事柄ではあったが、やはり少々話題にも困ってしまう。

——彼と、会話がしたい。彼の声を、もっと聞いてみたい。

そんな欲は溢れて止まらないのに、これと言った話題が見つからない。

このままでは、ただ無駄に時間を過ごすだけで彼の事を何も分からず終わってしまう。それだけではどうしても避けかった。何とかして、話題を見つけなければ。

——それが、徐々に焦りに変わり始めた頃合い。突如、隣からぱたりと小さな物音がした。

物音に反応し、そちらに視線を向けてしまう事は十分に失礼な事だと理解している。だが、彼への興味と関心が勝り、咄嗟に彼の方へと顔を向けた。

「……」

彼の口に咥えられていたのは、細い紙煙草。貴族が好むパイプ煙草や葉巻とは違う、あまり目にした事の無い物だ。確か階級の低い人間は、安価な紙煙草を好む人が多いと昔何かで読んだ記憶がある。

「――あの」

考えるよりも先に、口が動いていた。

だが口に出した瞬間、彼の煙草を話題にするのは早計だったと悟る。

煙草は男性の嗜好品であり、女性が好むには「はしたない」「品が無い」と言われる物だ。煙草に興味を示す女なんて、誰だって幻滅対象になるだろう。

それに、仮に煙草を会話の題材にしたとして、煙草を吸った経験の無い私が何処まで話を広げられるだろうか？

『あまり目にしない物だけど、何処の銘柄かしら？』

こんなもの、完全に貴族の嫌味でしかない。

「――此処は禁煙です。ホールを出て、右に曲がった廊下の突き当りに喫煙室があるので、どうぞそちらへ……」

咄嗟に捻りだした言葉は、自分でも幻滅する程素っ気ない言葉。本当に、自分は愚かな人間だと痛感する。これでは、此処から出ていけと言っている様なものでは

無いか。

私が言いたかったのはそんな事じゃない。此処が禁煙である事は事実だが、ホール内で堂々とパイプ煙草を手にしている招待客だって確かに存在した。そんな規則あつてないようなものだ。

彼が僅かに困惑の表情を浮かべ、私の顔に視線を移した。どうにも居た堪れなくなり、彼の視線から逃れる様に顔を背ける。

啞えた煙草を手に取り、シガレットケースを開いた彼を見るに、このまま彼が喫煙所の方へと場を変えてしまう事は明白だ。

どうか、それを阻止したい。いや、阻止しなければ。

「——ああ、でも」

何を言うかすら考えついていないのに、思わず言葉を放ってしまった事に我ながら驚く。

あれだけコミュニケーションのレッスンを受けたというのに、あれだけ招待客から下劣な言葉を掛けられても笑顔で適切な受け答えが出来たというのに、彼相手になるとそれがどうも上手くない。

「その一本だけなら、見なかった事にします……」

か細く、後半につれて小さくなる自身の声。必死に頭を捻った結果、出した言葉は非常に稚拙で間抜けなものだった。それに酷く恥を感じ、顔に熱が溜まっていく。私の顔をまじまじと見つめる彼の表情は、相変わらず変わらない。思考は読めないままだ。

だがそれでも、煙草をシガレットケースに戻す彼の手は止まっていた。

「――両親には、内緒にしてくださいね」

暫しの沈黙が痛く、誤魔化す様に言葉を付け加えて微笑む。

これで彼を引き止める事は出来ただろうか。

僅かに期待は膨らむが、それと同時に脳裏を過つたのは、彼が私と此処に居る事を望んでいるかどうか、だった。

彼が私と同じように、会話を交わしたいと思っているとは思ってゐるとは思えない。ただ、バルコニーで煙草を吸おうと思ったが先客が居て、そしてその先客がこのパーティーの主役である令嬢だったから、失礼の無い様に引き止めた。たったそれだけだったのかもしれない。

もしそうだったとしたら、舞い上がってしまった自分が馬鹿みたいだ。膨らむ憶測に心は重くなり、不安で満ちていく。

「……ああ、悪いな」

彼の返答は、たった一言。そして再び煙草を口に咥え、慣れた手つきでマッチを擦り、火を移す。

「……」

何故、彼は此処に留まるのか？ 彼の横顔を深く見つめるが、真意は分からない。

——だが。

これはきつと、拒絶じゃない。彼が何を思っているのかは分からないが、少なくともこの状況を不快には思っていない。もし拒絶する心があるのなら、そのまま喫煙室へ向かってしまう筈だ。

——そう、期待してもいいだろうか？

勿論、先程私を引き止めた理由と同じ可能性だつてあるが、それよりも、今は彼を此処に引き止める事が出来た事が何よりも嬉しい。深く安堵しながらも、込み上げる嬉しさを表に出さない様必死に抑え込み、冷静を装う。

再び、彼と私の間に訪れる沈黙。

煙草の先から立つ細い煙は、何処かミステリアスな雰囲気のを更に魅力的に見せる。

私は、どうして彼に惹かれたのだろう。

確かに、その端正な顔立ちやスタイル、耳に心地よく届く低い声などの容姿に惹かれたのは事実だ。だが、彼と同じ様に容姿の美しい男性は今までに何度も、何人も見てきた。

つまり、惹かれた理由は容姿が全てじゃない。

それだけじゃない何かを、私は今彼に感じている。

——物心ついた時には既に感じていた、僅かな違和感。そして、いつからか感じる様になった酷い息苦しさ。

息苦しさは今までに何度も感じてきた事だが、違和感の方は今まで特別視はしてこなかった。

ただ、私には何かが足りない。私という一人の人間を完成させる為のピースが全て揃っていない。それが何かを探そうと、真相に辿り着こうと、私は必死に長年掛けて書齋の本を読み漁った。

だが結局、私はその違和感の正体を見つける事は出来なかった。そして次第にその違和感は私の“一部”となり、最早違和感を抱く事は無くなっていた。

なのに、彼を見ていると私の中の何か、が必死にその違和感を主張しようと叫ぶ。

足りないピースを埋める為の物が此処にあると、そう言うかの様に心が疼く。私の中に記憶された、膨大な知識と物語。その知識を漁っても、今の私の感情と一致する物は見つからない。彼への感情の名前も、分らない。

だが、目の前にいる彼こそが、私に足りないピースなのでは無いかと、違和感を埋める存在なのでは無いかと、本能的に感じ始めていた。

時間制限は、煙草一本分。

この限られた時間で、彼を知りたい。彼の全てを知りたい。彼に、また逢いたい。それが罪だとしても、そんな事どうだっていい。彼をこのまま手放したくない。彼を、"たった一度顔を合わせただけの人物" にしてしまいたくない。してはいけない。

溢れて止まらない欲望。だが、それでも彼を知る為の話題は浮かばない。こうしている間にも煙草は焼け進み、残された時間は少しずつ減っていく。

そんな時、何も無い暗闇の様な思考の中にぽとりと一つの種が落とされた。それは、私自身あまり好まない話題である。だが、今の私にはそれしか浮かばない様に思えた。

これが、吉と出るか凶と出るかは分からない。殆ど、賭けである。

物は試しでと、それを話題として口に出してみる事にした。

「あの、失礼ですが、お仕事は何を？」

——その場に響いた、自身で想像していたよりも、ずっと大きな声。

出来る事なら、彼には淑やかで美しい私を見せていたかった。品のある私で、彼と会話を楽しみたかった。

だが欲だけが先走り、思わず声を張り上げてしまった。

私の顔をじっと見つめる彼の視線に、火が出そうな程顔に熱が溜まっていく。

——ああ、穴があつたら入りたい。恥ずかしい。はしたない真似をしてしまった。

彼に呆れられてしまったかもしれない。品の無い女だと思われたかもしれない。汚い声だと思われたかもしれない。

素直に謝罪するべきか、咳払いで誤魔化すべきか、ただ黙って彼の言葉を待つのか。どれが正しいのか分からない。もう私の思考は崩壊寸前である。

「……人、助け」

だが、そんな私の心配を他所に口を開いたのは彼の方だった。

「——人助け……」

思わず彼の言葉を復唱し、止まりかけた思考で必死にその言葉の意味を考える。

——まともに、答えられていない。

これを聞いた人物が私以外に居たとしたら、きっとそう思う事だろう。

もしかすると、階級が低い故にしっかりとした職に就けていないのかもしれない。だが彼の服装を見る限りそれはあり得ないに等しい。彼は低い階級の中でも、比較的良好暮らしをしている筈だ。

答えたくなかったのか。答えられなかったのか。それとも単に押搦からかわれたのか。そう思うのが妥当だろうが、悲惨な事に今の私の頭は少しばかりおかしくなってしまうているらしい。

答えたくなくても、押搦からかわれていたとしても、彼が私の問いに答えてくれた事が堪らなく嬉しい。嬉しくて仕方がない。

流石の彼もその返答には何か思う事があつたのか、今のはちよつと……などと言ひ淀んでいるが、そんな言葉も耳に入らない程に、嬉しい。かつてない程に、甘心かんしんで満たされる。

もう溢れた感情を抑える事が出来ず、自身の立場も階級も忘れ、顔いっぱい笑顔を浮かべた。

「素敵なお仕事をなさっているのね……！ そんな方とお話が出来て光栄だわ」

彼が本当に、“人助け”とやらをしているのかは知らない。だが、それは然程重要な事では無かった。

彼と話をしたかった。彼が紡ぐ言葉を聞きたかった。その願いが叶った事は最早、甘心を超して悦楽である。

「——なんだ、」

彼が私の顔を見つめながら、ぽつりと言葉を漏らした。

「ちゃんと、笑えるんだな」

それは、つい漏らしてしまった独り言の様な言葉だった。

だが私の舞い上がった思考は、その言葉でびたりと止まる。

ちゃんと、笑える？ 私は、ずっと笑っていた。彼と出逢った時も、キース様と顔を合わせた時も、招待客に挨拶に回った時も、父にも、母にも、使用人にも。

「——笑える……？ 私は先程からずっと……」

だから、そのままそれを口にした。

私は笑えている筈だ。コミュニケーションのレッスンを請け負ってくれた先生も、笑顔が素敵だと褒めてくれた。上品で、令嬢に相応しい笑みだと。

なのに何故、彼はそんな事を？ 笑顔とは一体何なのか。もしか、緊張のあまり

彼にだけ上手く笑顔を見せられていなかったのか。

ぐちゃぐちゃと絡まっていく思考の中、彼が言葉が続ける。

「あんなの、唯の愛想笑いだろ」

——愛想笑い。

そんな言葉、私は教わっていない。令嬢でいるなら、常に笑顔を絶やさない事。笑顔で居れば、それだけでその場が和むと。誰もが喜ぶと。そう、教わってきた。「そんな無理に作った笑顔よりも、今の方がよっぽど——」

更に続けられた彼の言葉。その先を聞き逃すまいと、食入る様に彼の顔を見つめる。

だが、彼はその先の言葉を言っではくれなかった。

「——なんでもない」

そう一言告げただけで早々に顔を背けられてしまい、私の心には疑問だけが残る。今の方がよっぽど……？ その後に彼は何を続けようとしたのだろうか。失礼に当たると思っ、その言葉を飲み込んだのか。

そんな事、しなくてよかった。そのまま私にその言葉を聞かせて欲しかった。

——思い返してみれば。

私は心から、笑った事はあつただろうか。確かに何も知らない幼少期は、些細な事で笑っていたのかもしれない。だが物心ついて、何かの違和感に気付いた時。

私はそれから、正しい感情を持って笑った事は、あつただろうか。

これ以上考えたらだめだ。そんな事、分かっている。だけど、もう手遅れだ。私は常に、何かに怯えていた。病的な不安に苛まれていた。

モリスから新しい名前を与えられても、メアリーと楽しいお茶会を過テイタイムごしても、癒されるのはほんの一瞬。その病的な不安の原因は、この屋敷だけでは無かったのかもしれない。

両親から離れば、遠くへ逃げてしまえば、解消されるものでは無かったのかもしれない。

なぜなら、もし本当にそれで解消されるのなら、自殺に走る前に、疾とうに逃げる選択をしていた筈だから。

彼は間違いない、私が探し続けていた足りないピースだ。それは、絶対的な確信に変わる。

私は彼を探していた。心の何処かで、“彼”の存在を待っていた。

「——そろそろ時間だ。少しの間だが、話せて楽しかったよ」

だが彼のその一言で、一気に現実へ引き戻される。彼の指の間に挟まれた煙草は、残り半分ほど。

時間切れだというには早すぎる。

駄目だ、今此処で彼と離れてしまったら、彼と別れてしまったら。待っていた存在に、探していたピースに、漸く出会えたのに。

「じゃあな」

ひらりと手を振った彼が、私に背を向けた。

待つて。

待つて。

私を置いて行かないで。

彼を離したくない、離れたくない、もっと一緒に居たい。

次合う約束を。いや違う、それではだめ。その日まで待てない。今すぐ。今すぐに、彼と共に。

これは、そう、運命だ。彼との出会いを言葉にするなら デステイニー “運命”。

だがもうなんでもいい。考える前に、彼を引き止めないと。

「……待つて」

縋る様に、彼のジャケットの背を両手で掴む。

「行かないで」

手も、声も、身体も震えている。その理由は、分からない。

「……此処にはもう、居たくないの」

振り返った彼の目を真っ直ぐに見つめ、懇願する様に思いを伝える。

彼は、今何を思っているのか。私を、はしたない女だと、思っただろうか。それとも、どんな言葉で拒絶するか考えているのだろうか。

「……貴方と、一緒に行きたい。私も連れて行って」

拒絶される。そう考えるだけで気が触れてしまいそうな程に恐怖を感じる。

だが、言葉は止まらない。

「——お前、正気か」

私にそう一言告げた彼も、酷く動揺している様に見えた。

それも当然だ。共に行きたいと言われて、彼が素直に手を取ってしまう人だとは思えない。

そんな中途半端な事をする人じゃない。

——だけど。

「冗談なんかで、こんな事言ったりしないわ」

正気か正気じゃないかで言われれば、その答えは分からない。だが冗談ではない。半端な気持ちでは無い。

私が彼と共に行きたいと思った気持ちには無い。

「……俺は、お前が思っている様な人間じゃない。外に出たいだけなら他を当たれ」
あつさりと、払い退けられる手。

胸にナイフでも突き立てられたのかと思う程に、胸がズキズキと痛む。だが想像以上に私は往生際が悪い人間だった様だ。

まだ、まだ引き下がれない。引き下がるには、まだ早い。

「……貴方以外の人に、こんな事言ったりしない。それに、私は貴方がどんな人だ
って構わないわ」

仮に彼が、人から金を騙し取る様な人でも。性格が、酷く歪んでいたとしても。仮に——殺人犯だったとしても。

私は、それを全て受け入れられる自信があった。

「……貴方と生きたい」

命乞いにも似た言葉。彼の瞳を見つめ、囁く。

これが正しいか、間違っているかだなんて分からない。それでも、私は彼に賭けたい。

「——仕方ねえな」

自嘲する様に笑った彼が、焼けて短くなった煙草を柵の外へ投げ捨てた。そしてそのままバルコニーの柵に足を掛け、外側へと身を乗り出す。

「それなりの覚悟があるなら来い」

下の芝生に飛び降りた彼が、此方に手を差し出した。

——まるで、物語の中の王子様の様だ。

彼の今の姿にそんな呑気な事を考えながら、私も同じように柵に足を掛けた。ふわりと風が舞い、ドレスの裾が弧を描く様に舞う。

これからの事は分からない。彼と、上手く生きていける保証もない。

だが握った彼の手は、私の心を安心させるかの様に、優しい温もりを孕んでいた。

XII Outside the bird cage

夜が更け、街の灯りが一つ、また一つと消えていく。

正確な時間は分らないものの、屋敷の外に出て彼此かれこれ一時間程が経過しただろう。馬車で外に出た事はあつたが、自分の足で街を歩くのはこれが初めてだ。街の事は全くと云つていい程分らず、この一時間歩き続けた事で屋敷からどの程度離れたかは一切の見当が付かない。

そんな私が今できるのは、目の前の男——セドリック・アンドールと名乗った彼に黙つて付いて行く事だけだった。

本来なら、屋敷を離れ、得体の知れない男に付いて行くだなんて有るまじき行為だろう。小さな子供ですら、知らない人に付いて行つてはいけないという知識位ある筈だ。

だが今の私がしている事は、それその物である。ふと冷静になった時に、自分とはとんでもない事をしでかしてしまったのでは無いかと頭を抱えなくなる衝動に駆

られた。

私の誕生日パーティーは、そろそろ終盤に差し掛かる頃だろう。帰路に付く招待客も出てくる時間帯だ。

私が居なくなつた事に、もう誰かしら気付いているだろうか。それとも、誰も気付かないまま終わりを迎えるのだろうか。招待客への挨拶は全て終えているものの、それでも何かやり残した事があつたのではないかと一抹の不安を拭えずにいた。

——もう、屋敷に戻る事は無いというのに。

細く長い路地裏を抜け、辿り着いたのは広い一本道。

閉鎖的空間から解放され、小さく息を吐く。

「——足、痛くないか」

ずっと私の前を歩いていた彼が急に足を止め、ぎこちない動きで振り返つた。自身を見つめるその瞳には心配の色が宿っており、まだ何か他にも言いたげな顔をしている。

短時間だが、彼を見ていて分かつた事が幾つかあつた。どうやら、彼は酷い口下手な様で、表情を表に出すタイプでは無いらしい。

今もその表情は変わらないが、それでも私を氣遣つてくれている事が犇々^{ひしひし}と伝わ

つてきて、鼓動が高鳴る程の嬉しさを感じた。

もう「愛想笑い」では無い笑みを彼に向け、小さく頷く。

——だが実際、足が痛くないと言えば嘘になる。

爪先が圧迫される痛みから始まり、招待客への挨拶をしている時点で、もう痛みは限界に達していた。

本来であれば、もう足の痛みで動けない筈だ。しかし不思議な事に、今迄逃げる事に夢中で一切足の痛みを感じていなかった。

そして今、彼に問われた事で突如思い出したかの様に足が痛みを訴え始める。

だが現在、最も重要視しなくてはならないのは足では無い。身体をきつく締めたコルセットの方だ。

今の世の中では、「細いウエストは女性のステイタス」とまで言われる程ウエストの細さが重要視されている為、社交パーティー等の人目に触れる際はこれでもかという程コルセットをきつく締めあげられていた。

今日のパーティーは私が主役という事もあってか、普段以上にきつく締められている気がする。自身のウエストに触れてみるが、最早人間の正常なウエストだとは思えない細さになっていた。

息を吸う度に、ミシミシと骨が軋む音が聞こえてきそうな程だ。一体、今の私の内臓はどんな形をしているのだろう。想像するだけでゾツとする。

十中八九健康被害が生じるであろう文化だ。誰かが早く変えてくれる事を願う。早急にコルセットを外すべきだと本能的に感じるが、彼に付いて行つた先で十分な着替えがあるとも思えない。

——さて、どうしたものか。

元々食事の管理やレッスンなどで細い体型を維持していた為、特別コルセットで身体を締めなくてもこのドレスを再び着用する事は出来るだろう。それに、ドレス自体ウエストに余裕があるデザインの為、然程苦勞もしなさそうだ。

だがその為には、着替えをするスペースというものが必要になる。こうして出逢つて数時間の彼と屋敷を抜け出してしまった時点でこれ以上のことは無いが、やはり初対面の男性の前で肌を晒す行為は女性として躊躇ためらわれるものがあつた。

そんな中、その事柄を何処か他人事のように思ってしまったている自分が居た。

未だ屋敷を出た実感が無いのか、それとも「それ自体」が自分の中で然程重要な問題では無いか。

頭の中では様々な問題がぐるぐると廻り続けているというのに、その問題一つ一

つに頭を使う事が出来ない。まるで、感情と思考が剥離してしまった様だ。決して軽々しく物事が考えられる状況では無いというのに、「まあどうにかなるだろう」なんて全ての状況を樂觀的に考えてしまう。

本来ならば、今の状況はしつかりと現実として受け入れなくてはならない。

だが、恐怖の中を生きてきた所為で、急に現れた安堵感に自分自身が追い付いていないというのも事実だった。

隣の彼に気付かれない様こつそりと溜息を吐き、俯いていた顔を上げる。

——ふと、遠目に見えたふらふらと動く黒い物体。

暗闇の中目を凝らしてみると、それはどうやら大きなローブにすっぽりと身体を包んだ人の様だった。フードが目深に被られている為顔は見えず、その足取りも覚束なく危なっかしい。まるで絵に描いた様な不審な人物だ。

昔父から、「街には危険な人間が沢山居る」と聞いた事があった。それを理由にあまり屋敷から出して貰えなかったのだが、もしや目の前の人物が父の言っていた危険な人物というものなのだろうか。

胸の中に滲んで広がっていく恐怖心に、セドリックとの距離を詰める。

「前、見てないと危ないぞ」

彼はその人物を然程気に留めていないのか、声に変化は感じられない。

やはり街には危険な人物が多く、目の前の人物も物珍しい物では無いのだろうか。それとも、彼が単に周囲に関心が無いだけなのか。

彼を見るに後者の様な気もするが、それでも私にとつてはこの目で初めて見る得体の知れない人物であり、気に留めない方が難しい話だった。その人物を凝視しながら、彼と共に歩を進める。

その人物との距離が縮み、あと数歩で擦れ違ふという距離。突如、強い突風が私達とその人物の間を吹き抜けた。

私のドレスの裾が大きく舞うのとほぼ同時に、その人物の深く被ったフードが外れる。

——緩やかにカールした赤毛に、宝石を連想するローズピンクの瞳。

そこに現れたのは、誰もが目を奪われる程の美しい女性だった。その大人びた顔つきから、自身やセドリックよりも年上の女性だという事が分かるが、張りのある白い肌が老いを一切感じさせず、まるで幼い少女の様にも見えてしまう。

だが、私が感じたのはそれだけでは無かった。

見知らぬ人物の筈なのに、何処かで見た事のあるような既視感^{デジャヴ}。これ程の美貌の

持ち主であれば一度見れば忘れられないような気もするが、抱いたのは既視感のみでさかのぼ遡ったどの記憶とも一致しない。

それよりも今は、その既視感よりも心配すべき事がある。それは、彼女のそのふらふらとした足取りと、まるで化粧でもしているかの様にも見える程、真っ赤に泣き腫らした目元だ。表情は何処か虚ろで、意識がはつきりとしているのかすら危うい。このまま馬車の一台でも通れば、正面衝突してしまいそうだ。

その女性を凝視しながら、声を掛けるべきかと頭を悩ませる。

だが正直、今の私は人様の心配など出来る状況には無かった。それに、声を掛けた所で彼女を救ってあげられる訳でも無く、ただセドリックに迷惑を掛けてしまうだけになる。

彼女には申し訳無いが、このまま見なかった事にするしか無いだろう。良心が痛みながらも、焦点の合っていない様にも見えるその瞳を見据える。

「――！」

彼女の濡れた瞳が、突如此方に向けられた。いや、正確に言えばセドリックの方、だろうか。

彼を視界に捉えたその女性の瞳が、一瞬驚いた様に見開かれる。

彼を見て、女性は何を思ったのか。先程のぼんやりとした表情は何処へやら、彼女は慌てた様子でフードを被りなおし、逃げる様に道の反対側へと駆けて行った。今のは、一体何だったのだろう。起こった事が理解できず、去っていく彼女の背をただただ眺める。

そんな中でも、やはり自身の中に色濃く残るのは彼女の美貌と既視感。

「——綺麗な人ね」

意識的か無意識的か、自分でも分らぬままそれを口にする。すると僅かに、セドリックが反応したのが分かった。

——彼もあの女性を見て、私と同じ事を思ったのだろうか。

あれだけ美しい人であれば、誰だつて目を惹かれるのは当然だ。同性の私ですら、惹かれた程なのだから。

だが何故だか、それを考えると不快感の様な妙な感情が沸々と沸き上がってくるのを感じた。怒りにも似た、不安にも似た、妙な感情。

人が人をどう思おうが、それはその人の自由であり、それを他者がとやかく言う筋合いは無い。そう、分かっている筈なのに、彼の瞳に誰の事も映したくないと、そんな独占欲が頭を回る。

まるで、幼い子供がお気に入りのおもちやを他人に取られない様に、宝箱の奥底に仕舞い込む様な。誰かに盗られるくらいなら、とそれを自らの手で壊してしまう様な。そんな、稚拙な感情だ。

今まで、誰かにこんな風に思った事は無かった。メアリーが愛らしい反応を見せてくれれば、それを他の使用人達にも見せたいと思い、モーリスが私に優しく接してくれれば、他の人にも同じように優しい言葉を掛けて欲しいと思った。決して、何かを独占したいと思った事は無かったのに。

まだ出逢ったばかりの男性に独占欲を抱いてしまうだなんて、これでは本当に小さな子供の様では無いか。どうかその感情を振り払おうと、先程あの女性に感じた“既視感”に考えをシフトする。

「――あの女性、著名人だったりするのかしら」

つい漏らした私の言葉に、彼が先程同様小さな反応を示した後、怪訝な視線を此方に向けた。

まるで理由を問う様な彼の表情に、「何処かで見た事がある様な気がするの」と述べる。

あれ程美しい人であれば、何処かの劇団等から声が掛かってもおかしくない。背

も女性にしては高い方で、きつと踊りや演技などをさせればとても映えるだろう。そんな理由で著名人だと判断するのは安直だと分かっているが、どうしてもその既視感を拭う事が出来なかった。

「……気の所為じゃないのか」

「そう言われれば、そうかもしれないのだけど……」

私の煮え切らない返事に、彼が眉を顰める。

記憶を隅から隅まで巡らせ、先程の女性と一致する顔を探す。

社交パーティーの参加者？ —— いや、違う。

昔遠くで一度だけ目にした事のある、王室の人間か？ —— それも、違う。

どれだけ考えてみても、彼女の顔はどの記憶とも一致しない。それどころか、考えれば考える程その「答え」から遠ざかっている様に思えた。

—— そういえば。

幼少期に、父に大きな公演に連れて行かれた事があった。有名な女優と歌姫の舞台だったと記憶しているが、その時の女優の名前は何だっただろうか。

ロンドン一有名で、尚且つとても美しい人達だった。彼女達の名前は、この歳になっても忘れる事は無かったのに、今の様に重要な場面でその名前が出て来ない。

「……ううん」

屋敷をあまり出た事が無く、更には社交パーティーで顔を合わせた人間では無いとすれば、思い当たるのはその公演しかない。心倣^{こころな}しか、当時の女優は少し彼女に似ている様に思えた。

だが鬢^{かすら}を着用している俳優が多く、その女優の顔も臃^{おぼろ}げではつきりと覚えていない。それにそんな有名な女優が、この時間の街を歩いている筈が無いだろう。

「——やっぱり、思い出せそうに無いわ。貴方の言う様に、気の所為だったのかも出来ないわね」

いつまでも考えていたって仕方がない。それに、彼女の素性を解き明かした所で今の私に大きく関わる問題でも無かった。ただ、その既視感が晴れるだけの話だ。それにもし、彼女がその時の女優だったとしても、何故此処に居たのかだなんてそれこそ彼女に直接聞かなければ分からない。

呟く様にそう言って、彼の顔を見上げた。

——そこでやっと、*“ある事”*に気付く。

彼の腕に、絡ませた自身の腕。ぴったりと密着させた身体。

私は知らず知らずのうちに、大変な事をしでかしてしまっていたらしい。

傍から見て、私達は今どの様に見えるのだろうか。若い恋人同士に見えているか、それとも、眉目^{びもく}秀麗^{しゅうれい}な男性とそれに執拗^{しつごう}に言い寄る下品な女に見えているのか。

一体いつから、どのタイミングで、私は彼にこんな事をしてしまっていたのだろうか。

はしたない事この上ない自身の行動に、顔から血の気が引いていく。だがそれと同時に、温かな彼の腕と密着させた身体に、心臓が張り裂けそうな程の鼓動の高鳴りを感じていた。

——このまま、離したくない。彼にもう少し、触れていたい。

このまま気付かないふりをして、彼の腕に寄り掛かっけていてもいいだろうか。そもそも、彼だつて本当に嫌であれば振りほどく筈だ。事実、先程バルコニーで一度彼に手を振り払われている。

だが今の彼は、私の行動を特別気に留めていない様で、嫌そうな素振りも見せない。つまり、拒絶するつもりは無いという事だろうか。

辿り着いた思考に、更に鼓動が高鳴り胸の中が期待で満ちていく。だが、すぐさまその思考を塗り替えるのは新たに表れた不安。

私は先程、バルコニーで拒絶する彼に執拗に迫ってしまった。彼が私を此処に連れてきたのは、ただこれ以上私に何を言っても無駄だと思ったからだという可能性もある。

それとも、彼はこの様に女性に絡みつかれる事に慣れているのだろうか。彼ほど美しい容姿をしていれば、当然女性だって寄ってくるだろう。

そう考えれば、今私の腕を振りほどかないのも納得がいく。

——何故、私を屋敷から連れ出してくれたの？

思わず、口にしそうになってしまった言葉。開きかけた口を閉じ、その言葉を飲み込む。

もし此处で、「何を言っても無駄だったから」「どれだけ拒絶しても言う事を聞かなかったから」「どうでもよかったから」なんて言葉を彼の口から聞いてしまえば、私は二度と立ち直れなくなるだろう。

——余計な事を、言うべきでは無い。

それが、今の私が行きついた答えだった。

極力、彼の迷惑にならない様に生きよう。なるべく彼の負担にならない様に。なるべく気配を消す様に。

あの屋敷に居るよりも、あの狂った男の元に嫁ぐよりも、余程恵まれた生き方なのだから。

私が彼の腕から手を離すのと、彼が足を止めたのはほぼ同時だった。彼が慣れた手つきで、ひっそりと佇^{たたず}む一軒家の鍵を解錠する。

見る限り、此処は彼の自宅の様だ。派手でも無く地味でもなく、大きい訳でも無く小さい訳でも無い、平凡な民家。だが、持ち家があるという時点で、彼は相当良い暮らしをしている事が伺える。

昔、労働者階級の間人は借家暮らしが普通だとモーリスから聞いた事があった。中流階級ともなれば持ち家は一般的の様だが、彼は恐らくそこまでの階級を持ち合わせていないだろう。

明らかな、階級に見合っていない暮らし。彼は先程、自身の仕事を「人助け」と言ったが、もしや非合法的な仕事であったりするのだろうか。

だがそんな思考は、すぐに頭の中から消え去る。

彼の仕事が合法だろうが非合法だろうが、「貴族の令嬢を屋敷から連れ去った」、それだけで彼は重罪だ。

もし仮に、昔モーリスが私に話したキャヴェンディッシュ家の令嬢の様に、警察

込みで懸命な捜査が行われたとしたら。

私達は、あの令嬢の様に屋敷から遠く離れた場所へ逃げていない。となると、見つかる可能性も充分に高い。

警察に保護された私は誘拐の被害者となり、彼は加害者になる。そして、どれだけ私が彼の無実を叫んでもそれは誰にも届かない。

「——今更なのだけど」

そんな考えに、無意識的に出た言葉。

「——私、此処にお邪魔しても問題無いかしら……？」

バルコニーに居た時の私は、とにかく必死だった。彼ともっと一緒に居たいという思いだけで、ただ後先考えずに彼を引き止めた。「貴方と生きたい」と訴えた。

だが、それはつまり彼を危険に晒すという事。この世の中は、貴族の言う事は絶対。警察ですら、貴族の言葉に翻弄はんろうされてしまう世の中だ。

それに、私が不安に思っているのはそれだけでは無い。此処に辿り着くまでは然程深く考えていなかったが、これからは彼の自宅で、彼と一つ屋根の下で暮らす事になる。それも、私がかつて暮らしていた屋敷の様な大きな家でなく、何処に居ても気配を感じる程の近さで。

彼のテリトリーに私が入るといふ事を、彼は問題ないと本当に思っているのだろうか。

「——家が小せえって言ってるのか」

家の扉をゆっくり開きながら、彼がぼつりと返答する。

——まさか、その様に受け取られるとは思わなかった。

会話において相手への配慮は必要不可欠だと散々レッスンで教わったというのに。配慮に欠けた発言をしてしまった事に酷い罪悪感を抱きながら、慌てて「言う事では無くて」と否定の言葉を口にする。

その瞬間、彼の顔に僅かに浮かんた優しい笑み。

驚く程早く顔を背けられてしまった所為でその笑顔はもう見えないが、確かに彼は笑っていた。

「問題があるなら、最初から此処に連れてきたりなんかしてねえよ」

大きく開かれた扉の前、笑顔だった筈の顔には無表情が戻ってしまったている。だが代わりに、彼の大きな手が私の頭をくしゃりと撫でた。その拍子に結った髪が崩れ、はらりと数本毛束が落ちる。

——心臓が、止まるかと思った。

安堵感と共に自身を満たす高揚。彼の触れた場所が熱を帯び、それが火傷してしまいそうな程熱くて、でも嬉しくて、くらくらと眩暈がする。

彼の手が、するりと髪から頬へと滑り落ちた。頬を撫でる彼の指先は優しく、私の瞳を深く見つめる彼の瞳は熱を孕んでいる。それが堪らなく愛おしくて、その熱を孕んだ瞳を深く見つめ返した。

こんな事をされてしまつては、期待してしまう。彼も、私と同じ様に思っている。私と、同じ気持ちだと。

「――受け入れてくれて、嬉しいわ」

だからわざと、こんな鎌^{かま}を掛ける様な事をしてしまうのだろう。

自身の顔にふにやりと浮かんだだらしない笑みを隠さず、私の頬に触れる彼の掌に自らの手を重ねる。そしてその温かい手に頬擦りをし、ただただ甘い熱を深く味わう。

彼の掌から伝わる心音。それが僅かに早くなったのを感じ取り、彼も私と同じ気持ちなのでは無いかと期待が膨らむ。

やはり、私にとつて彼は特別な人だ。こう触れているだけで、世界がどうでも良くなってしまう程幸福感で満たされる。そして、先程迄ぐるぐると廻り続けていた

不安が嘘の様に解けていくのを感じた。

彼に抱いたこの気持ちは何？

安心感？ それとも信頼？

でもそれは、モーリスにも感じていた物だ。彼はモーリスとは違う。

では、この感情は――？

その考えを遮る様に、ぱつと彼の手が私の頬から離れた。

「――今日はもう、遅いから。早く中に入れ」

ぎこちない動き。僅かに赤くなった彼の頬。その姿にどきりと鼓動が跳ね上がるが、直ぐさま小さな異変に気付く。

それは、一般的に見れば気の所為か、もしくは気付かない位の僅かなものだ。だが私の瞳には、その異変がはっきりと映っていた。

何かを睨む様な鋭い瞳。そこに映っているのは、憎悪にも悲しみにも似た不思議な感情。

扉の前に立ったままの彼は相変わらず表情が読めないが、心^{こころ}做^なしかその顔色は悪く見えた。

私の行動で、何か嫌な事でも思い出させてしまったのだろうか。

不安が募り、彼の顔を覗き込む。

「——セドリック？」

囁き掛ける様に彼の名を呼ぶと、驚いた様にその肩が小さく揺れた。そして心ここに有らずといった顔を此方に向け、私と視線を交わらせる。

その瞳には、もう先程の様な感情は見えない。だが、動揺しているのは確かな様だった。

「——なんでも、ない」

私から逃げる様に顔を背けた彼が、先程とは打って変わった弱々しい声を漏らした。その声音に、彼にも人に言えない何かがあるのだろうと瞬時に悟る。

彼の過去を、詮索するつもりは無い。知りたくないと言えば嘘になるが、私だって、出来る事なら屋敷での生活は彼に知られたくない。

彼の人柄を見るに、きっと彼は自身の過去を安易に人に話す方では無いだろう。それに、誰しも人には言えない様な過去くらいあるものだ。それを武勇伝の様に語る人も多いが、隠そうとするのが普通であろう。

もし私が屋敷での生活を話したいと思う日が来たら、彼も、自身の過去を私に話したいと思う日が来れば。知るのはその時でいいと今は思った。

彼が徐おもむろに私の背に触れ、大きく開いた扉の中へと押し込んだ。部屋の主よりも

先に足を踏み入れてしまった事に罪悪感を抱きながらも、無意識的に部屋を見渡す。必要最低限の物しか置かれていない部屋の中。きつと、この様な部屋を殺風景というのだろう。物語の中でよく見かける言葉で、正直どの様なものかあまり想像が出来ていなかったが、この部屋の内装を見て妙に納得してしまった。

男性の一人暮らしともなれば、この様な内装が当たり前なのだろう。だが、その内装の所為か私のドレスの派手さが目立ってしまい、恥ずかしく思う程に居心地の悪い空間が生み出される。

部屋の中心まで歩を進めたセドリックのシルエットを目で追いながら、一人思考を巡らせる。

私は今日、此処へ来てしまつて良かったのだろうか。私の手を取つたのは紛れも無い彼だが、それでも一度は拒絶した。それを、無理に迫ってしまったのは事実だ。それがどうしても、頭の中から消えない。

呼吸が苦しい程きつく締め上げられたコルセットをドレスの上から摩り、小さく溜息を吐く。

がたりとテーブルの方から聞こえた物音。マッチが擦られる音が聞こえ、その瞬

間灯った強いオレンジ色の光が暗闇に慣れた瞳を刺す。

屋敷で使用していた物よりも小さな、蠟燭一本だけが乗せられた燭台にその火は映され、縦に長く伸びる様に灯る火が部屋を照らした。

彼が全身に疲労を滲ませた様子で、脱いだジャケットとウェストコートをチェストの上に抛り投げる。そして部屋の奥、壁際にぽつりと置かれたベッドに身を投げる様に腰を下ろし、私に視線を投げた。

「——いつまでそこに居るつもりだ」

突然掛けられた声に、思わずびくりと肩を揺らす。

特別中を案内された訳でも無かった為、せめて迷惑にならない様にと壁際を選んだつもりだったが、彼にとつてはそれが不可解だった様だ。私を見据える視線が痛く、ぐるぐると思考を回しながらもいそいそとベッドに座る彼の方へと足を向ける。

だが、とある事に気づき、その足を止めた。

「……あの」

突然人の家に押し掛けておいて、こんな問いをするのは非常識甚だしい。だが、どうしてもそれを問わずにはいられなかった。

「——私と貴方は、今晚何処で眠るの……？」

見る限り、この部屋にベッドは一つだけ。それも、成人男性一人が眠れば埋まってしまう様な小さなシングルベッドだ。

勿論、床で寝ると言われればそれに従うつもりではいたが、家具の位置を見ても眠るスペースは無い様に思える。それとも、雨風を凌^{しの}げる場所に居るのだから、どんなに狭い床でも我慢しろとでも言われるのだろうか。

だが彼は、さも当然かのように座っていたベッドを叩いた。

「此処にベッドがあるんだから、此処しか無いだろ」

まるで私の発言が異常だとしても言うような、彼の怪訝な表情。

その言葉に、思考が止まる。

確かに、私も彼も細身である為、多少窮屈でも眠る事は出来るだろう。

だが、私達は仮にも男女であり、男女が一つのベッドで眠るなんて事があって良いのだろうか。腕や手に触れただけでも鼓動は高鳴り、触れた場所は火傷してしまいそうな程熱を帯びるというのに、こんなに小さなベッドで共に眠るなんて。私の心臓が持ちそうにない。想像しただけで、顔に熱が溜まっていく。

だが、そもそもお互いの素性もよく知らない状態で駆け落ち同然の事をしてしまった時点で、その常識は通用しない。此処は彼の言葉通り、同じベッドで眠るしか

ないのだろうか。

その瞬間脳裏を駆け巡るのは、自身の寝相や寝顔について。眠っている自分を、自分で確認する事は不可能だ。その為、私は自身の寝相が良いのか悪いのかは分からない。

屋敷に居た頃は、三人程であれば余裕をもって眠れる大きなベッドで、一人で眠っていた。同然ベッドから転落した事も無ければ、妙な行動を起こした事も無い。——と、思う。

この小さなベッドで、寝返りも十分に打てない程の狭さで、もし万が一私が眠っている間に彼に危害を加えてしまったら？ ベッドから転落してしまったら？それに、見るに堪えない寝顔を見せてしまったら？

それこそ、幻滅されてもおかしくない案件だ。

「何が気に入らないのか知らねえけど、不満なら明日にしてくれ」

私の思考を再び止めたのは、彼のため息交じりの一言。彼がごろりとベッドに横たわり、私に背を向ける様に寝返りを打つ。

心底面倒くさそうなその声音。先程の考えが嘘の様に引いていき、変わりにズキズキと胸を締め付ける。

「不満なんかじゃないわ……。そうではなくて……」

否定の言葉を口にするが、彼は私に背を向けたまま。自身の声も次第に小さくなり、最後まで言葉を述べる前に止まった。

ただ私は、彼とベッドとを共にする事に女性として恥じらいを抱いていただけで、決して不満に思っていた訳では無い。床で眠るのも覚悟の上だった。

だが、彼の口から発せられた、その突き放すような言葉に酷く胸が痛む。

彼にとっては、女性とベッドを共にする事は大した事では無いのかもしれない。過去に何度も、様々な女性と夜を共にしてきた可能性だってある。いや、彼の年齢で、更には彼ほどの美貌の持ち主であれば、女性経験が豊富だったとしても不思議ではない。

再び、ずきりと痛む胸。

何故、こんなに苦しいのか。先程の、あのローブを身に纏った美しい女性を見かけた時も同じように思った。

彼が、女性の美貌に惹かれている。過去に女性との関係もある。そう考えるだけで、胸が張り裂けそうな程に苦しい。

確か、この感情には名前があつた筈。頭の中に詰め込んだ知識の中から、その名

前を探そうと必死に思考を回す。

だが、今現在その感情に苛さいなまれているからなのか、中々その感情の名前を探し出せない。

名前が分かれば、感情の理由が分かれば、少しは楽になれる筈なのに。どれだけ頭を悩ませて、それ等の正体は分からないままだった。

——彼がベッドに潜り込み、十分程が経過しただろうか。

ベッドの中の彼からは規則正しい呼吸音が聞こえてきていて、その身体も動きを止めたまま。もう眠ってしまったのだろうか。

時計が指すのは二十三時過ぎ。もう、ベッドに入らなくてはいけない時間だ。このまま悩んでいる事に、意味など無い。私も早く、眠らなければ。今日は特に、慣れない靴やドレス、更には招待客への挨拶で疲れている。

彼が眠っているのなら、今ならきつく締めたコルセットを外せるのではないか。本来なら脱衣所等を借りたい所だが、家主が眠ってしまった為それも難しい。

音を立てない様そつと自身の足を締め付けていた靴を脱ぎ、今度はドレスに手を掛ける。複雑な仕組みをしているドレスだが、このドレスを着付けてくれたメアリ

ーがドレスの仕組みを丁寧に教えてくれた為、不慣れではあるが一人で着脱する事が出来そうだ。腰で結ばれたリボンを解き、背のホックを一つずつ外していく。ひんやりとした空気が、素肌を撫でる。

明日から、どう生きていけば良いのだろう。彼と、上手く共に生きていく事は出来るのだろうか。

屋敷に居た頃はいつ死んでも良いと、寧ろ早く死んでしまえたら楽になれるのにとすら思っていたのに、自由を知った途端まだ生きていたいと心が叫び出す。

息を吸う度に、身体が痛む。もうそろそろ限界の様だ。視野が迫る様な眩暈を覚え、手足に僅かな痺れを感じ始める。

早くコルセットを緩めたいのに、限界が近く指先が上手く動かない。普段ならある程度堪えられただろうが、今日は長く歩いたからか身体への負担を深く感じていた。

やっとの思いでドレスを身体から離れた時、ベッドの方から聞こえた僅かな物音。嫌な予感を察知した頃にはもう遅かった。

「——な、なんで、服」

困惑の滲んだ声。

——ああ、やっぱり。脱衣所を借りるべきだったかもしれない。

なんて冷静に考えつつも、咄嗟にドレスを胸に抱き声の方へと視線を向ける。

「……ごめんなさい、下着が少し、苦しくて」

絡まる視線。その動揺した表情は、彼と出逢って初めて見る顔だった。

女性の肌を見慣れていないのだろうか。だが今の私は、それに期待を抱ける程余裕を持ち合わせていない。

「もう眠ったのかと思って……」

そう言葉を付け加えると、彼の視線が私のお腹——コルセットに止まった。その顔から動揺は消え、少々不安げな面持ちに変わる。

「苦しいなら、今すぐに外した方がいい」

私への配慮か、それともまだ彼に平常心が戻っていなかったのか、私から顔を背け壁側を向く。

「服だって、一晩位なら無くても我慢出来るだろ」

「——そう、けど……」

確かに彼が言うように、服など無くたって眠る事は出来る。寧ろ、コルセットを外した所でこのドレスが窮屈な事には変わりなく、服を着ない方が余程身体の疲れ

を取る事が出来るだろう。

それに、このドレスはボリウムを出す為生地を何枚も重ねて作られている。一つのベッドで眠るには邪魔になるのは明確だ。

屋敷を抜け出してしまった時点で、これ以上の僭越せんえつは無い。心にこびりついた、石化した不安がボロボロと零れ落ちていく。

燭台に灯る火に息を吹きかけ、部屋の間かりを落とした。

一瞬で訪れる暗闇。目が慣れないまま、ドレスを床に落としコルセットの背の紐を解いていく。

——私はもう、貴族じゃない。令嬢じゃない。

——人の目を、気にする必要だってない。

下着を全て外し、床に落とす。

本来なら、きつく締めたコルセットさえ緩められれば良かった。だが、今はもうあの屋敷で手にした物は、糸くず一本すら身に付けたくなかった。

裸足のままゆっくりと彼の方へと近づき、そっとベッドに腰かける。

今後、私が居なくなつた事が騒ぎになったりするのだろうか。新聞に載って、警察も私の行方を捜して、いつか、あの屋敷に連れ戻されてしまう事になるのだろうか。

か。

ベッドの中へ潜り込み、そんな事を他人事の様に考える。

——理由を問われれば、答えられない。ただの勘、としか言いようがない。

両親は、キャヴェンディッシュ家の様に私の行方を探す事はしない様な気がした。きつと父は最初から私の存在を無かった事にし、母は変わらず読書に明け暮れる。エインズワース家では、そんな日々が繰り返されていくような気がした。

私が願うのは一つだけ。優しい使用人達に危害が及ばない事。屋敷を勝手に抜け出しておいて、そんな事を願うだなんて勘違いも甚だしいと自分でも分っているが、どうしてもそれだけは心の中から消えなかった。

背に彼の体温を感じながら、ゆっくりと瞳を閉じる。

ベッドは屋敷の物と比べ物にならない程硬い。だがそれと同様、比べ物にならない程温かった。

XIII Live in a dream

その晩、悪い夢を見た。

大切な使用人が、両親に傷つけられている夢だ。あの日のメアリーの様に。

それを見て、私は何も出来なかった。救う事も、抗う事も出来ず、ただ一人、蹲うづくまつて時間が過ぎるのを待っていた。今すぐにこの場所から逃げ出したいと、こんな身分捨ててしまいたいと、そう願いながら。

そしていつの間にか、私の周りには誰も居なくなっていた。真っ暗で何も見えず、私はただ恐怖の気配に怯えていた。

そんな中、ゆらりと動いた人の影。その影が、私に手を差し出す。それが誰の影か、誰の手か、認識する事は出来なかったが、何故だか私の瞳にはとても温かい物に見えていた。

目を覚ました先。目の前には、見知らぬ天井が広がっていた。

暫くその天井を見つめながら、思考を巡らせる。

昨晩は、私の十八歳の誕生日パーティーを行っていた。そして婚約者であるキース様と会話を交わし、彼は使用人達が噂していた通りの人間だという事を確信した。その後バルコニーで一人、絶望に明け暮れていた所までは確かな記憶だ。

だが、それからの記憶が非常に曖昧である。

不思議な男性とバルコニーで出逢い、自分でも解き明かす事の出来ない感情を覚えた。そして一時の激情に駆られ、彼と共に屋敷を抜け出してしまった。

まるで夢の中の出来事のようにふわふわとしていて、何一つ実感が湧かない。だが私が今此処に居るという事は、それ等全て事実であり、これが現実なのだろう。

頭を抱えたくなる衝動に駆られながらもゆっくりと身体を起こし、辺りを見渡す隣に、彼の姿は無い。何処かへ出かけてしまったのだろうか。

八時半を指す時計を見つめながら、ぼんやりと寝起きの頭で今迄の事を思い出す。屋敷での起床時間は八時。優しい使用人がカーテンを開けながら起こしてくれて、よく眠れたか、疲れは取れたか、などと^{おぼろ}ういしの言葉をくれる。そしてアーリー・モ―ニングティーで、寝起きの頭を覚醒させる。

使用人から一日のレッスンの予定を聞くのはその時だ。今日も変化の無い一日が

始まるのだと、使用人の声に耳を傾けながら絶望に浸る。

紅茶が終われば、次は身支度。寝室に備え付けられたドレッサーの前で、使用人が丁寧髪を整えてくれる。使用人は必ずその日のドレスに合った髪型にしてくれる為、今日はどんな髪型になるのだろうか、どんな髪飾りを付けて貰えるのだろうか、毎朝密かに楽しみにしていた。

そして用意されたドレスに着替えば、今度は朝食だ。寝室を出て、使用人と共に居間へ向かう。

朝食は家族揃ってとる事が一般的だが、エインズワース家では一日三食の食事に父が同席する事は殆ど無かった。その為、朝食も母と二人きり。特別会話を交わす事無く、お互い無干渉を貫き朝食の時間を過ごす。

朝食が終われば、母も私も思い思いの時間を過ごし、午後になれば私は屋敷を訪ねてくる家庭教師からレッスンを受ける。

それが、私の日常。

此処には、優しく起こしてくれる使用人も、アーリー・モーニングティーも、凝った朝食も無い。

だがそれと同時に、毎朝感じていた「変化の無い一日を繰り返す絶望」も無かつ

た。手にした自由に、心が軽くなるのを感じながら徐々に冴えてきた頭で再び部屋を見渡す。

「――！」

僅かに引かれた椅子の上に、丁寧に畳んで置かれているのは昨晚私が脱ぎ捨てたドレスと下着。

早朝に起きて片付ければ良いと思っていたが、朝は彼の方が早かった様だ。

こんな事になるなら、眠る前にきちんと畳んでおけば良かった。彼はどんな思いで私の衣類を畳んでいたのだろうと考えると、羞恥でどうにかなくなってしまいそうだった。今度こそ衝動に堪えられず、両手で頭を抱える。

ふと、家の外から人の話し声が聞こえてきた。片方は聞き覚えのある声、もう片方は知らない女性の声だ。徐々に近づいてくるその声に、身体を隠す様にブランケットを胸に抱く。

そして僅かに身構えた瞬間、玄関扉がゆっくりと開かれた。

「ああ、起きてたのか」

扉から顔を覗かせたのは、手に大きな紙袋を抱えたセドリック。それともう一人

「ねえ、セディが惚れた子ってどこ？ 中に居るの？」

——女性特有の媚態びたいが一切無い、若い女性。声は比較的高い方で、自分よりは年上だろうが、その軽やかな口調に、子供の様な、少女の様な物を連想する。

「——別に惚れてねえよ。というか、勝手に入ってくるな」

にこにこした笑顔を顔に貼り付けた彼女は、セドリックの辛辣な言葉にも一切動じず軽い足取りで部屋の中を歩き廻る。

「へえ、此処がセディの家かあ。今まで来たいって言っても中々連れて来てくれなかったんだもんなあ」

「お前、自分が家に招いて貰える人間だと本当に思ってたのか」

「いやあ、ゴリ押しすれば根負けして連れて来てもらえろと思ってたんだけど」

「——やっぱり連れてくるべきじゃなかったかもしれない……」

セドリックが、昨晚とはまた違った疲労感を顔に滲ませる。そんな彼の姿を見て、その女性は楽しそうに笑った。

「惚れてないなんて言ってるけど、その服を熱心を選んだのは誰だったかな？」
女性の指先が、セドリックが抱えている紙袋へと向けられる。彼の表情は変わらない物の、彼女のその言葉に彼の動きが一瞬止まった。

「……」

彼は、彼女の言葉に肯定も否定もしない。だが、その顔には確実に苛立ちが宿っていた。

二人は、仲が悪いのだろうか。だが、仲が悪いという割には空気が殺伐（さつぱつ）としている訳でも無く、どちらかと言えば穏やかな方だ。それに、会話もとても自然に見える。

二人の様な関係を、本の中で見た事があった。確かその物語では、「腐れ縁」と呼ばれていた筈だ。それは、幼少期からの仲であったり、仕事仲間であったり、離れたくても離れられない好ましくない関係の事を指す言葉だったと記憶している。今の二人の様子を見ると、その言葉がとても濃く当てはまる様な気がした。そんな中、私が感じるのとは疎外感。一人蚊帳（かや）の外に居る様な感覚に苛まれる。二人の関係が腐れ縁という物なのであれば、付き合いはそれなりに長そうだ。恋人——では無いのだろうか、きっと本音をぶつけ合える仲なのだろう。

もやもやとした黒い感情が湧き出すのを感じ、その感情を追い払う様に咄嗟に彼女に声を掛けた。

「——あ、あの、貴方は？」

私の声に、女性の視線が此方に向く。

——しまった。

その言葉を口にして直ぐに、初対面の相手との会話でまず最初にすべき事は自己紹介だという事を思い出した。彼女がこの家に入ってきた際、まるで私を知っている様な口ぶりだったが、素性を問い質したいのは私では無く彼女の方であろう。

すぐさま、訂正しなければと口を開く。だが、それよりも先に口を開いたのは目の前の彼女の方だった。

「ああ、ごめんね。突然で、びっくりしたよね」

先程は少女の様だと思わせた彼女の口調。それが一変し、穏やかで優しい声音に変わる。

「私はマーシャ・レイノルズ。貴女の話は……、まあ、それなりにセディから聞いている」

少々濁された最後の言葉に、彼が自ら彼女——マーシャに話したのではなく、彼女がセドリックに問い詰めたのだろうと察しが付く。無意識的に浮かんでしまった苦笑いに、マーシャも私と同じ表情を浮かべた。

「貴女が生きていた世界と、私達が生きている世界は違う。と言っても、私達も正

しい階級を持ち合わせている訳でも無いんだけど。でも、これから色々苦労する事もあるだろうし、私も貴女の力になれる事はある筈だからさ、気軽に頼ってよ」

「……ありがとう。——レイノルズ、さん」

彼女の口ぶりからするに、私が屋敷を抜け出した元貴族令嬢だという事は知っている様だ。

彼女の「正しい階級を持ち合わせていない」という言葉に引つ掛かりを覚えるが、それは今の私も同じである。

名乗って貰った方がいいが、敬称に悩み無難に名字で呼んでみると、彼女が先程と同じかるやかな口調で「マーシャでいいよ」と即座に反応した。

「——服、色々とマーシャに用意させた。サイズは……多分大丈夫だと思うんだが」私とマーシャの間に割って入る様に口を出したセドリックが、大きな紙袋を私の膝の上に置いた。それを落とさない様に両手で抱え、紙袋の中を覗く。

紙袋の中には、彼の言う通り衣類が詰め込まれていた。覗いただけではどれ程入っているか分からないが、その紙袋の重さからして相当な量の衣類を用意してくれた事が分かる。

お礼を言わなければ、と顔を上げるが、もう目の前に彼の姿は無い。辺りを見渡

し彼の姿を探すと、私達からだいぶ離れた先の椅子に深く腰掛け、眉間に皺を寄せていた。

今の彼は機嫌があまりよろしく無い様で、とても話し掛けづらいオーラを放っている。声でも掛ければ、きつく睨みつけられてしまいそうだ。だが、それでもお礼はしっかりと伝えなければ、と口を開いた。

——が、又もや私よりも先にマーシャが口を開く。

「このドレスね、全部セディが選んだ物なのよ。確かに用意したのはあいつの言う通り私だけど、貴女に似合う服を熱心を選んでた」

彼には聞かれたくない話なのだろうか。私にずいと顔を寄せて、声を潜めるマーシャからは何か強い感情が伝わってくる。

「貴女、どうやってセディを惚れさせたの？ 顔が良いから女は昔から良く寄ってくるんだけど、どうしてか全く興味を示さなくて……。何事も適当なセディが此処まで服に拘るなんてね。あんなセディ初めて——……」

彼女の言葉が、最後まで告げられる前に意図せず止まる。その言葉を止めさせたのは、他でも無いセドリックだ。

先程迄私達から離れた場所に座っていたセドリックが、いつの間にかマーシャの

背後に立ち鬼の形相で彼女の首根っこを掴んでいた。

「……お前、何を余計な事言ってるんだ」

彼の声に滲んだ、苛立ちとは違う明確な怒り。ピリ、と辺りの空気に緊張感が走る。

「えー、だって私もこの子と仲良くなりしたい」

だがマーシャは、彼の怒りも緊張感を孕んだ空気も然程気にしていない様子で、その口調は変わらずかろやかだ。

「うるさい。そもそも、長居していいなんて言っただつてもりは無い。さっさと帰れ」
「分かった分かった、もう何も言わないから、セデイ、離してよ」

彼の怒りは静まらず、マーシャの首根っこを掴んだまま玄關までずるずると引きずっていく。何が何でも彼女を追い出すつもりの様だ。

抵抗はしない物の、不満そうに口を尖らせるマーシャは小さな子供の様で、思わずその姿に笑みを漏らす。

だがそれと同時に、再びもやもやと黒い感情が湧き出すのを感じた。

セドリツクは、私に向ける物とは違う、もつと自然な表情をマーシャに見せている。彼は元々表情が乏^{とほ}しい人だという事は昨晚から察しはついていたが、マーシャ

を相手にするとそれも少し違う様だった。

はつきりとした二人の関係性は、まだ分からない。恋人で無い事は明らかだが、友人なのか、仕事仲間なのか、さりげなくマーシヤに問おうと思っていたが機会を逃してしまった。

「――俺が戻ってくる迄に、適当に着替えておけ」

未だマーシヤの首根っこを掴んだままのセドリックが、それだけを告げ乱暴に玄関扉を閉めた。

再び訪れる沈黙。誰も居ない家の中。紙袋を胸に抱え、大きく溜息を吐く。

彼のあの様子からするに暫くは戻ってこないだろうが、いつまでもこのままで居る訳にはいかない。それに、着替えの途中で彼と鉢合わせてしまったら最悪だ。

早く、着替えてしまおう。紙袋の中から服を一着一着取り出し、ベッドの上に広げていく。

フリルの付いた愛らしいブラウス、落ち着いたデザインで肌触りの良いスカート。ゆつたりと楽に着られそうな上品なドレスに、更には着心地の良さそうな寝間着まで揃えられていた。

全体的に、私が昨晚身に纏っていたドレスと同じホワイトを基調としていて、セ

ドリックが選んだというマーシャの言葉が現実味を帯びていく。

だが、その衣類の中に一つだけテイストの違うドレスが混じっていた。

赤と黒を基調とした、セパレート風のドレス。それは何処かセドリックの艶やかな黒髪とローズレッドの瞳を連想し、自然と鼓動が早くなつていくのを感じる。

まるで、彼の色に染まる事の出来る魔法のドレスの様だ。たかが衣類一着に何を舞い上がっているんだと自責しながらも、高まる鼓動を抑える事が出来ない。

いそいそとその他の衣類を丁寧紙袋の中へと仕舞い込み、ベッドから降りる。冷静になつて考えてみると、初対面の男性と同じベッドで、更には糸纏わぬ姿で眠るなんてどうかしている。遅れて来た羞恥心に顔を火照らせながらも、手早く椅子の上に畳まれていた下着を身に着けた。

屋敷で与えられた物を身に着けたくない気持ちには、昨晚も今も変わる事は無い。だが、用意して貰った衣類の中に下着は無く、どれだけその気持ちが強かろうと下着を身に着けずに衣類を纏う訳にはいかなかった。

コルセットを苦しくない程度に締め上げ、怖ず怖ずとベッドの上に広げて置いたドレスに手を伸ばす。

指先に触れた、柔らかな生地。それは、屋敷に居た頃に身に着けていたドレスと

大差の無い触り心地だ。

ドレスの肩部分を両手で持ち、掲げる様にして広げる。

作りもしっかりとしていて、決して粗悪な物では無い。それどころか糸一本の解れも無く、高品質なドレスだという事が一目で分かる。

私は、この国の階級制度の頂^{いたadaki}である、上流階級に位置する人間だった。使用する物は全て最高級品。何不自由の無い生活をしていた——筈だ。そんな私が身に着けていたドレスと、素材や作りが非常に良く似たドレス。

頭に、幾つかの疑問点が浮かんだ。そして、先程のマーシャの言葉。

——私達も正しい階級を持ち合わせている訳でも無いんだけど。

階級とは、生まれと共に手にする絶対的制度。それこそ、自身に与えられた名前以上に重要であり、何があるうと生涯背負って行くべき物だ。そんな世の中で、正しい階級を持ち合わせていない人間など存在するのだろうか。

彼が階級に見合った暮らしをしていない事は、出逢った時から気が付いていた。中流階級ともなれば持ち家があるのは一般的であり、高品質な衣類やアクセサリーを身に着ける事も可能だが、この家の殺風景な内装を見ていればその可能性も限りなく低い。

それに、彼からは「家族」の存在が全くと言って良い程感じられなかった。彼程の若さであれば、両親が健在であつてもおかしくない。だが、共に暮らして居ない所を見るに両親は不在、もしくは死去しているのだらう。そんな中、彼には家があり、高品質なドレスを私に用意出来る程金銭的に余裕がある。

昨晩は、彼の仕事が合法だらうと非合法だらうと関係が無い。私を屋敷から連れ出した時点で彼は罪人になつてしまう。と思考がシフトしてしまつたが、一晚経つて考えてみると、それ等は確実に普通じやない事柄だつた。

幾ら考えてもキリが無い事は分かつている。彼本人に、階級やこの暮らしの実態を聞くつもりも無い。私は彼がどんな人間であつても構わないと、その覚悟の上屋敷を抜け出したのだから。

だが、それでも気になつてしまうのが人という物。

ドレスに袖を通してながら、昨晩のバルコニーでの会話を思い出す。

バルコニーで交わした会話は然程多くない。お互いの素性が分かるような会話も、当然交わしていない。

そんな中、唯一彼の口から聞いた事と言えば、「人助け」の仕事をしているという事だ。

「——人、助け」

静かな部屋に一人、その言葉を零す。

人助けという言葉は非常に曖昧だ。知恵を貸す事も人助け、人間の暗殺だって、見方によつては人助け。

彼がその曖昧な言葉を選んだという事は、後者寄りの仕事である可能性が高い。
公おおやけに出来ない仕事といったところだろうか。

その公に出来ない仕事というのは、この世の中の事を殆ど知らない私にはまるで見当がつかない。それこそ、頭に浮かぶのは殺人や強盗位だ。

物語の中では極悪非道だと言われる人物を沢山見てきたが、それはあくまで物語上での話。それ等が実在しているのかも分らず、その知識は参考にすらならない。それに、マーシャの存在も大きい。彼女も、私に用意された物と同じ様な高品質な服を身に纏っていた。

彼等の仕事内容が分からない今じゃ憶測すらまともに浮かばないが、この衣類の入手経路が合法だと言い切れない事は確かだと言つていいだろう。

だが不思議と、彼等が罪人であつたとしても私の気持ちちが揺れる事は無かつた。勿論、罪を犯して良い理由など何処にも無く、背負う罪など無い方が良いに決ま

っている。だがそれでも、この世の中には法律で裁かれない悪事が蔓延^{はびこ}っている事は事実だった。

両親の、使用人への態度や暴行。自身が生まれ育った家で起こった事だって悪事の一つであろう。

法律など、あつてないような物だ。彼の仕事が仮に法に触れる物だったとしても、それが「人助け」になるのであれば悪事だとは言えない。

本当に人の救いになるのであれば、私は何だって構わなかった。

衣類を粗方身に着け終え、小さく息を吐く。

ただ服を着るだけの行為に、少々——いやかなり時間が掛かってしまった。今までは使用人^{メイド}に手伝って貰っていた為短時間で済んでいたが、一人になるだけでこうも時間が掛かるものだろうか。羞恥と情けなさに頭を痛めながらも、最後に残ったリボンを手に取る。

そのリボンはセドリックの瞳と同じ色で、裾には美しい薔薇の刺繍^{ほどこ}が施されていた。今迄に身に着けた事の無い色やデザインに深く惹かれ、甘心の溜息を吐く。

バランス良く結ぶ為にも、出来れば鏡を見ながらリボンを身に着けたい。何

処かに鏡は無いかと周囲を見渡すが、当然と言うべきか居間リビングとされるこの場所に鏡は見当たらなかった。

脱衣所を探したい所ではあるが、家主不在の中勝手に許可も取らず家の中を歩き回るのはマナー違反だ。どうしたものかと、リボンタイ片手に頭を悩ませる。

不意に背後から聞こえた、ドアノブが回される音。その音に鼓動が跳ね上がり、勢い良く振り返る。

「……お、おかえりなさい」

言葉は、これで合っていただろうか。そんな事を頭に、ぎこちなくも彼に声を掛ける。だが、扉を開いた体勢のまま、呆氣に取られた様に固まってしまった彼から返答は無く、その瞳は私に向けられたまま動かない。

——何処か、おかしい所でもあっただろうか。

服は問題なく身に付けられている筈だ。それに、髪だって手櫛ではあるものの、きちんと整えた。リボンタイは未だ結べていないが、今の私に大きな問題は無い筈。それとも、「おかえりなさい」と言ってしまった事が失礼だったのだろうか。頭の中を様々な事がぐるぐると回り、酷く困惑する。

そんな今も、彼の視線は私に釘付けた。鼓動が高鳴るを通り越して、最早動悸が

する。

「……ふ、服、ありがとう。わざわざ、選んでくれて」

長い沈黙に耐え切れず、必死に頭を回した結果口に出したのは、先程マーシャに遮られてしまつて言えなかった言葉。

その言葉に漸く我に返つたのか、彼が私からふいと顔を逸らし、短く「マーシャに用意させただけだ」と返答した。

逸らされてしまつた為良く見えないが、彼の頬は心做しこころなか赤く染まつている様に見える。彼が何故先程私の姿を見て固まつてしまつたのかは分からないが、私に問題があつた訳では無かつたのだと分かり思わず安堵の溜息を漏らした。

「マーシャは、貴方が念入りに選んでくれたと言つていたけれど？」

「——あいつ、余計な事を……」

彼が溜息交じりに呟き、今度は私に背を向けてしまつた。

「お前が着てたドレスに似たものを選んで持ってきただけだ。他意は無い」

怒り口調にも感じられる程、彼の言葉や声は素っ気無い。先程見えたあの赤い顔は、見間違えたのだのだろうか。じわりとインクが滲み広がっていく様な不安を覚え、思わず彼の方へと歩み寄る。

私よりも、頭一つ分以上高い背。男性らしい、広い背中。彼は男性の中ではかなり細身の方で、女装をすれば女性にだって見えるのでは無いかという程、華奢な体つきをしている。

だが、こうして改めて彼の姿を見てみれば自身とは大きく違い、やはり彼は男性なのだと再確認させられる様だった。

——感じたそれを、上手く言葉には出来ない。更には、明確な物ですら無い。

今の彼は何処かふわふわとしていて、とても不安定に見える。言葉にするなら、根無し草の様、だろうか。

このまま捕まえておかなければ、そのうち私を置いて遠い所へ行ってしまう。そんな、焦燥感にも似た不安に駆られ、思わず彼の背に掌を触れさせた。

綺麗に皺が伸ばされたシャツ越しに、彼の体温を感じる。そしてそのまま、ペツトが飼い主に甘える様に、額をぐりぐりと彼の背に押し付けた。

「——なんだよ」

彼の声は、相変わらず冷たい。

「別に」

そんな彼になんと声を掛ければいいのか分からず、私も素っ気ない言葉で返答す

る。

一晚経った今でも、彼に抱くこの気持ちが何か分らなかった。彼を見ていると鼓動が高鳴り、彼に触れているだけで触れた場所が熱を帯びる。だが心の何処かではそれがとても切なくて、常に私を苛む様に不安が付き纏う。

そしてマーシャの様に、セドリックと親しい間柄の女性を見た時に沸き上がる妙な感情。それは黒く重量感があり、苛立ちや焦りにも、不安や悲しみにも似た妙な感情だ。その名前が分かれば、私の気持ちは晴れるのだろうか。

考えてみれば、昨晩からずっとこんな事ばかり考えている気がする。ずっと、名前の無い感情に苦しみ続け、それに悩んでは、結局同じ結論に至る。『こんな事、いつまでも考えていても仕方がない』と。

「——私、貴方の事好きよ」

不意に、口を衝いた言葉。

その言葉を口にしたのは他でも無い自分自身だというのに、なんで突然そんな事を言ってしまったのかと、自身が一番驚いた。

頂点にまで達した鼓動に、一気に顔に熱が溜まっていく。

——好き。

その言葉は、決して特別な物では無い。紅茶が好き、美しい花が好き、愛らしいデザインのドレスが好き、それと、同じだ。

——同じ、筈だ。

「——出逢ってたった一晩しか経ってない男に、そんな事軽々しく言うもんじゃねえよ」

ぽつりと、彼が呟く様に漏らした言葉。そして、とても切なげな声。

それは私に言っている様で、何処か独り言の様に感じられた。

「……セドリック」

彼の名前を呼ぶと同時に、彼が私から距離を取る様に離れた。彼の背に触れていた手は彷徨い、宙に取り残される。

——ダメだ、このままでは。彼の心は離れていく一方で、私に繋ぎ留めておくことは出来ない。

そもそも、気持ちがあるとは一体どういう状況を指すのだろうか。彼の心は、彼の気持ちは、最初から私にあったのだろうか？

どれだけ考えても分からない、答えが出ない。考えれば考える程、頭の中は絡まってくる。

「仕事があるから」

玄関扉のドアノブに、彼の手が掛かる。

——待って。行かないで。

そう言いたくても、彼に手を伸ばしても、此処で彼を引き止めるのが正しいのか
が分からず、何も言葉が出てこない。

未だ嘗て無い程の焦燥感に、呼吸が浅くなる。胸がずきりと痛み、様々な思考が
回ると同時に、目も回る。

だが、自身の瞳に映ったある物に、不思議な位綺麗にその不安が解けていくのを
感じた。

それは、去り際に見せた彼の表情。

照れ隠しでもするかのように眉間に皺の寄ったその顔は、熟れた林檎の様に真っ赤
に染まっていた。

XIV Visitor

屋敷を出て三日。

やはり性別の壁と言うものがあるのか、セドリックとの暮らしは未だ慣れない。気まずい空気が流れたり、気を遣い合ったりといった事も多い。

まだ出逢って日が浅い男女が、一つ屋根の下で暮らしているのだ。普通に考えてみれば、気まずいのは当然だろう。その暮らしがストレスになり、逃げ出したいと感じてもおかしくない位だ。

だが、屋敷で暮らしていた間私を苛み続けていた病的な不安や絶望感、注察妄想などは嘘の様に消え去り、今はそんな気まずささえ気にならない程に、この生活に幸福感と安堵を感じていた。

そしてたったの三日間だが、セドリックと共に暮らしてみても分かった事がある。それは、私が両親の目を盗み、こっそりと身に付けた料理や掃除、洗濯等の所謂家事の必要性だ。

私が身に着けたそれ等の教養は決して充分なものでは無く、使用人も居ない家で一人暮らしをしていた彼に敵うものでは無い。それこそ、役に立つどころか足手纏いになるだけだとばかり思っていた。

だが、どうやら彼は必要最低限の家事は出来るものの、それ等の殆どを得意とせず、普段から全くと言っていい程やってこなかったそうだ。

食事は常に外食。それが出来ない日には食事を摂らない選択をし、更には掃除を極力しなくて済む様に、家を汚さぬ生活を心掛けていた程なのとか。

そんな彼に、多少の家事が出来るかと告げた時は心底驚かれた。

勿論、最初から全てを信じて貰えた訳では無い。当然と言うには憚^{はば}られるものだが、貴族令嬢が家事を心得ているなど普通では考えられない事だろう。彼も私を、一人では何も出来ないお嬢様だと思っていた様で、最初は私の言葉もただの見栄だと思われていたらしい。

だが限られた材料で軽食を作って見せたところ、私の言葉を信じるだけで無く、好反応まで見せてくれた。

それは彼の想像以上の出来栄えだったらしく、その日から彼に家の事を任せて貰えるようになり、現在家事全般は私が担当している。

家事とは、決して簡単な物では無いのだろう。この世の中に“家事使用人”という職業が存在している時点で、少なからず誰しもが的確に熟^{こな}せる物では無い筈だ。だが言わずもがな、この世の中の貴族達は家事が熟せる熟せない以前に、身分に合った贅沢な暮らしをするが故に使用人を雇う。所謂、貴族達が豪語する“上流階級の人間のみが許される優雅な生活”というものだ。

それが誰もが羨望する暮らしではあるが、約十八年間その暮らしをしてきた私からしてみれば、“一日家事に追われ走り回っている生活”の方が余程^{しやう}性に合っていて、人生としても有意義だと思えた。

そんな事を言ったら、下層階級の人達に怒られてしまうだろうか。彼等が、想像を絶する苦労の中で日々生きているという事は私も知っている。彼等からすれば、たった一日だけでも貴族の暮らしを味わってみたいと思うのだろう。

だが今は、有意義であるか無いか、自分の性^{しょう}に合っているか、などでは無く、ただセドリックの役に立つことがしたいという願望が最も強かった。それはこの家に置いて貰っているせめてものお礼であり、彼のお荷物にならない様に、という意味も籠^{こも}っているが、彼の視界に少しでも映っていられる様に今は一つでも多く彼に尽くしたい。

今の私と彼は、「他人」でしか無い。同じ屋根の下で暮らそうと、どれだけ言葉を交わそうと、私達の関係を「他人」以外の言葉で語る事は出来ない。

——余計な事を、言うべきでは無い。

——極力、彼の迷惑にならない様に生きよう。

その決意は今も揺らぐ事はないが、彼に抱いた名前の分からない感情はこの三日で驚く程肥大し、図々しくも彼と他人以上の関係になりたいと望んでしまった。

もしそれが叶うのであれば、主人と使用人の様な主従関係だったとしても構わない。そう、今は思っている。

彼を仕事に送り出し、家事を全て終わらせた十四時半。

遣るべき事が尽きてしまった今、その退屈さから一人テーブルに突っ伏し、今日何度目になるか分からない深い溜息を吐いていた。

貴族が暮らす屋敷の様に大きな家であれば、一日に熟すべき家事の量も多く、こゝうも退屈を味わう事は無かったのだろう。

私が生まれ育った屋敷でもそうだった。九人の使用人が一日休み無く働き続けても、仕事が終わるのはいつも夜遅く。勿論、屋敷での業務は家事だけで無く主の身

の回りの世話迄含まれているが、それでも家事の量は圧倒的に多い。

この家の大きさに不満を持っている訳では当然無く、屋敷での暮らしに比べれば幸せではあるが、やはり「退屈」な時間を過ごす事は少しばかり辛かった。

では、探索がてら街へ散歩に出掛ければ良いのでは無いか。街で暮らしていくにあたって、より多くの物を知っておくべきだ。

今の私を見る者が居るとすれば、きっとそう提案する事だろう。

だが残念な事に、今の私はこの家から出る事が出来なかった。

その理由は言わずもがな、私が屋敷を抜け出してから三日しか経過していないからである。

セドリックの話によると、今のところはまだ新聞に行方不明や誘拐等を仄めかす記事は掲載されていないらしい。だが、相手は上流階級の人間だ。最も考慮すべき事は、娘の居場所よりも世間体。

令嬢が消えただなんて事が記事になれば、社交界でも噂になる。事実、キヤヴェンディッシュ家の令嬢が消えた際、父は社交界での良い話題になると言つて書齋に山濟みになる程新聞を集めていた。

そんな父の事だ。決して私の失踪を、新聞の記事になんてさせないだろう。

新聞社を買収し、情報を隠蔽。そして独自に警察を雇い、私の失踪を世間に知らせない様徹底的に街を調べ尽くすか。もしくは、私そっくりの替え玉を用意し、新しい「エル・エインズワース」を造り上げるか。それとも、病死や事故死扱いにして私の存在その物を抹消するか。

どちらにせよ、父の行動が読めない今は下手に動くべきではない。この街を知りたい気持ちは山々だが、セドリックと話し合った結果、外出はある程度期間が空いてからにするべきだという話に至った。

——だがやはり、退屈である。

朝食で使用した皿は既に洗い終え、丁寧に水気を拭き取り食器棚に片付けた。洗濯も早朝のうちに終え、全て干し終わった。窓拭きも、ベッドメイキングも、部屋の掃除も、全て終えた。どれだけ考えてみても、もう家事は残っていない。それこそ、今の私が出来た事は時計と睨み合う位だ。

こんな時に、本の一冊でもあれば幾らか退屈を凌^{しの}げたのだろう。屋敷暮らしの時も、退屈な時はいつも書斎ライブラリーに籠^{こも}っていた。

何か、退屈を凌げる物は無いだろうか。部屋の壁に沿う様に置かれた大きな棚に、視線を向けてみる。

だが、その棚は空っぽ。何故わざわざこれ程大きな棚を設置したのだろうと思う程に、そこには何も置かれていない。

期待するだけ無駄だった、と再び溜息を吐いた。

テーブルに突っ伏したまま、足をぶらつかせ時計を睨む。セドリックが仕事を終え、帰ってくるのは大体十七時から十八時。どれだけ忙しくとも、十九時を過ぎる事は殆ど無い。

指を使い、現時刻から彼が帰宅するまでの時間を数える。早くてあと二時間半。遅くて、三時間半。

彼が帰ってくるまでの残り時間を、変わらず退屈なまま過ごしていたら間違いない気がおかしくなってしまう。少し、外でも眺めていたら気が紛れるだろうか。

席を立ち、陽の光が差し込む窓際にふらりと近付いた。

皮肉にも、今日は珍しく天気が良い。絶好の散歩日和だ。窓から見える街路は、普段より人で賑わっている様にも見える。

今日の様な日に、セドリックと共に街を歩いたら。此処に來た晩の様に腕を組んで、店を見て回って、笑い合えたら。そんな妄想に耽り一人笑みを漏らす。

「——ん……？」

だが、瞬時にその妄想が「普通じゃない」事に気付き、顔に浮かんだ笑みが消えた。

男女が腕を組んで、街を歩く。それは、恋人関係、もしくは夫婦関係にある者達が行う行為であり、他人である私達が出来る筈が無い。当然、主人と使用人の関係だったとしてもそうだ。

何を考えているのだろう。たかが屋敷から連れ出してくれた位で、浮かれてしまつて。

彼は私を迷惑に思っているのかもしれないのに。私を面倒だと思っているのかもしれないのに。

彼と私が、そんな仲になれる筈が無い。彼が私を、女性として愛してくれる筈が無い。

分かり切っていた事だが、改めてそう思うと胸がズキリと痛んだ。

だがそこで、更にその考え自体も普通じゃない事に気付く。

恋人？ 誰が？ 私と、セドリツクが？

私は確かに、彼と「他人以上の関係」になりたいと望んだ。だが、決して恋人になりたいと望んだ訳では無い。女性として、愛して欲しいと願った訳でも無い。

ただ、他人に言える関係であつた方が、生活していく上で都合だと思つただけ。

——そうでしょう？

自分自身に問い掛けてみるが、当然返事はない。

彼に抱いたこの気持ちも、胸の高鳴りも、知らない。意味など分からない。そんなもの、分かる筈が無い。

くらりと眩暈がして、その場に蹲^{うつま}る様に座り込んだ。壁に額を付け、気持ちが悪い程に高鳴る胸を手で強く押さえる。

知らないからこそ、分からないものだからこそ、私は男女を描いた物語を好んでいた。知らない感情を、第三者目線だとしても知る事が出来るのは楽しかった。

その感情を理解する事こそ出来なかったが、恋に狂い、妬み、苦しみ、そして深く愛し合う者達を愛おしく思い、長年かけて眺める様に文字を辿^{たど}って行つた。

それは私に無いもの。私が持ち合わせて居ないもの。だからこそ、知りたい。知るのが楽しい。

そうだった、筈なのに。

今は自分のこの感情を、解き明かすのが怖い。

彼と出逢つた日、此処へ来た晩は、こんな事思いもしなかったのに。ただ、彼を

見ていると胸が高鳴り、胸の中が幸福感で満たされる。それだけだった筈なのに。ゴツ、と自身の額を壁に叩き付け、ううんと小さな唸り声を上げる。

こんなの自分じゃない。早く目を覚まさなければ。このままでは、自分が自分ではなくなってしまう。自分が消えてしまう。

知らない感情に飲み込まれて、またあの悪夢の様な不安感に苛まれてしまう。再び吐いた溜息は、自分でも何故だか分からない程酷く震えていた。

そんな自身の思考を止める様に響き渡ったのは、ドアノッカーが叩かれる音。一瞬自身の聞き間違いかとも思ったが、どうやらこの家に誰かが訪ねてきたのは事実の様だ。玄関扉の外から、僅かに人の気配がする。

ぴり、と僅かに緊張感が走った。

毎朝仕事に行く前に、セドリックからきつく言われていた事を思い出す。

誰かが家を訪ねて来ても、決して扉を開けてはいけない。この家に人が訪ねてくる事は殆ど無い為、訪問者が居たとしたら、それは私を探している人物だと思え、と。

先程の胸の高鳴りとは大きく違う、恐怖や緊張感が齎^{もたら}す激しい動悸。冷汗が流れ、背を濡らす。

まだ此処へ来て、たったの三日だ。そして私は、この家を一步も出ていない。因^よつて、この家に私が居ると特定するのは極めて難しい。

それこそ、密告者が居ない限り――

ふと、頭に浮かんだ一人の人物。

三日前、セドリックと共にこの家に来た女性。名前は確か、マーシャ・レイノルズと言っただろうか。

彼女は、私が元貴族の人間だと言う事を知っている口ぶりをしていた。それに、気になるのは彼女が私に告げた一言。

――どうやってセディを惚れさせたの？

その言葉が、ぐるぐると頭の中を回る。

彼女が仮に、セドリックに好意を寄せていたのだとしたら。私を疎^{うと}ましく、邪魔に思っていたのだとしたら。

彼女たちは普通じゃない。故に、私の家の事だって、容易^{たやす}く調べられる腕を持つていたっておかしくはない。

あの日彼女が私に掛けてくれた優しい言葉は、嘘には見えなかった。出来る事なら、こんな事考えたくは無い。

だがセドリックと距離の近い彼女なら？
その可能性を捨てきる事は出来なかった。

——もし、扉の外に立っている人物が私の父だったら。

使用人にした様に、私に手を上げるかもしれない。もう二度と逃げ出さない様にと、地下室に閉じ込められてしまうかもしれない。

昔、父が折檻せつかんと称しょうして使用人を地下室に閉じ込めた時、父は笑って「暗闇の中に人間を七十二時間閉じ込めておくと、精神が崩壊するらしい」と母に話していた。まるで、見物だとも言うように。

その使用人が、その後どうなったかは知らない。地下室の場所は両親以外誰も知らず、閉じ込められた使用人もそれ以降姿を見て居なかった。

もし、彼女があの時本当に精神を壊してしまっていたのだとしたら。命を落とすていたのだとしたら。

私も、彼女と同じことを、されたとしたら。

暗闇に、何日も、何日も、精神が壊れるまで、命を落とす迄、閉じ込められたら。呼吸が浅くなり、手足が震えだす。

——怖い。

震えは手足から全身へと広がり、気が触れそうな恐怖に脳が支配される。

自身が声を上げてしまわぬ様に、両手で強く口を塞いだ。外に居る人物に、自分の存在を気付かれてはいけない。

呼吸を止め、目を強く瞑^{つぶ}り、ただ只管^{ひたすら}に時が過ぎるのを待つ。

「——こんにちは」

突如玄関扉の外から聞こえてきた声に、鼓動が跳ね上がった。それはやけに聞き覚えのある、媚態の無い軽やかな口調。

「——私、この前会ったマーシャだけど、今大丈夫？」

*

腕に抱いた数冊の本を、一冊ずつタイトルを確認しながら棚に片付けていく。

これは、此処を訪ねて来た女性——マーシャが、退屈凌ぎになれば、と言って持ってきてくれた物だ。

余った時間は、あるだけ全て読書に充ててしまいう程読書が好きな私にとって、この様に退屈凌ぎとして本を選んでもらえたのは非常に有難い。それに、彼女が持つ

てきた本は屋敷の書齋ライブラリーにも無かった本で、また新しい世界を知る事が出来るのだと思うと、足取りも軽くなる程嬉しく感じた。棚に並べ終えた本の背表紙を指でなぞりながら、ふふ、と笑みを零す。

だが、それ等の本に一つだけ疑問が浮かんた。

棚に並べた本は、全て恋愛を題材にした小説。私は恋愛小説を特別好んでいた為決して苦では無いのだが、この世には沢山のジャンルの本がある。それこそ、推理小説やゴシック小説等は特別人気が高く、退屈凌ぎと言うならばそれ等のジャンルを交えるのが普通であろう。

なのに何故、これ程迄見事に全て恋愛小説なのか。

その本を選んだ張本人は、現在キッチンで鼻歌を歌いながらお茶会テイタイムの準備をしている。随分と機嫌が良い様だ。

これは、純粹にマーシャの趣味なのか。それとも、「セドリックを愛しているのは私だ」という意志表示なのか。

だが意思表示としては、随分と回りくどいやり方だ。本当にその様な意思表示をするならば、もっと他に方法があっただろう。

それに、まだマーシャが本当にセドリックに特別な感情を抱いているかどうかも

定^{さだ}かでは無い。

此処は、色々と複雑に考えるよりも “ただ恋愛小説が彼女の趣味だった” と捉えておく方が賢明だろうか。

マーシャに聞こえない様小さく溜息を吐き、本を並べた棚からふらりと離れた。本の次に手に取ったのは、テーブルに置かれていた、口がしっかりと閉じられた紙袋。

それも、マーシャが持つてきてくれた物だ。どちらかと言えば、本よりもこっちが本命である。

もし今日、マーシャがこれを持つてきていていなかったら、今日、マーシャが此処を訪れて居なかったら。数日後には、セドリックにこの話をしなければならなかった。そんな未来を想像し、ぶわりと一気に顔に熱が溜まる。

紙袋を胸に強く抱いたままチェストに駆け寄り、そつと扉を開く。チェストの中に丁寧^{ていねい}に仕舞われているのは、私の服と、セドリックの服。当然私専用のチェストでは無く、セドリックと共用で使わせて貰^{もら}っている物だ。

此処に、“これ”を仕舞っておくのは危険すぎる。もし疑問に思った彼がこれを開けてしまえば、見た彼も気まずい思いをする事間違いないだろう。

そつとチェストの扉を閉め、そのまま辺りを見渡す。

何処かに、これを隠せる場所は無いだろうか。安全で、彼の目にも触れない様な場所。

そこで目に付いたのは、ベッドの下、僅かな隙間。汚れやすい場所だが、毎日念入りに掃除している為紙袋の中身に支障は出ないだろう。

ベッドに近づき、床に膝を突いてその隙間に紙袋を押し込む。

目を凝らしてみれば、此処に何かが押し込まれている事は分かる。だが、彼がわざわざベッドの下を確認するとは思えない。

ちゃんと片付けられる場所が見つかるまでの間だけだ。膝を抱え、小さく息を吐いた。

「——そんな所で何してるの？」

唐突に、至近距離で聞こえたマーシャの声。

その声に鼓動が跳ね上がり、思わず声にならない悲鳴を上げその場に尻餅をついた。

「あは、可愛いねえ、女の子だねえ」

にやにやと笑うマーシャの視線が、ベッドの下と私の顔を行き来する。彼女は一

体、何処から見ていたのか。

そんな彼女の言葉に反論したくても、動悸が邪魔をして喉奥から言葉が出てこない。

「別にそんな所に隠さなくたって、『下着』位誰だって身に着ける物だよ？ セディだつて、その辺の理解はしてくれると思うんだけどなあ」

「そ、そんな……」

——そんな事、分かっている。

その言葉は、顔に上る熱の所為で最後まで言い終わる前に止まった。

紙袋の中身は、女性にとつて必要不可欠な物。彼女の言つた通り、数着の下着だ。

男性であれば、多少足りなくてもどうにか誤魔化す事は出来るだろう。だが女性にとつてそれは難しい。

彼があの日私に用意してくれたのは、ドレスなどの衣類のみ。男性であれば尚の事、下着まで考えつかないのは当然だ。ドレスなどの衣類を用意してくれただけでも十分に嬉しい。

だが正直に言つてしまえば少々——いやかなり、自身の中での下着の悩みは大きかった。

いつかは話さなくてはならない事。このままずっと、一着のみで生活していく事は出来ない。セドリックに打ち明けようと決心して仕事から帰ってきた彼と顔を合わせるが、やはり彼の顔を見ると勝つのは羞恥心。そして何も言う事が出来ず、そのまま三日も経過してしまった。

此処へ来た日の翌日、脱ぎ捨てた下着やドレスを彼に畳ませておいて今更恥じらうなどおかしい話だ。それでも、やはり自ら彼に下着の話など出来る筈も無かった。故に、仮にマーシヤに何か意図があつたとしても、これ等の物を持つてきてくれた事には感謝してもしきれない。

「まあお茶会テイタイムでもしながらさ、ゆっくりお話しよ？」

未だ床に尻餅を付いたままの私に、彼女が手を差し伸べる。その顔にはもう、先程のにやにやとした下劣な笑みは無く、代わりに優しい微笑みが浮かべられていた。怖ず怖ずとその手を握り、引き上げられるままにその場に立ち上がる。

テーブルの上には、白い湯気の立ち昇る紅茶と、楕円の皿に並べられたビスケットが置かれていた。

質素ではある物の、三日ぶりに口にする紅茶に自然と心が弾む。

「あつ、そういうば！」

席に着いた途端、彼女が何かを思い出したかの様にぱつと顔を上げた。

「名前、まだ聞いてなかったね。聞いていい？」

変わらぬ軽やかな口調でそう言つて、彼女の手が皿に並ぶビスケットに伸びる。

——私の、名前。

彼女はあの日、なんの躊躇^{ためち}いも無くフルネームを教えてくれた。それに、自己紹介をする時はフルネームを名乗るのがマナーだ。

私が元貴族の人間だという事を知っているであろうマーシャになら、なんの躊躇^{ためち}いも無く教えられる筈。なのに、自身の口から名前は疎^{おろ}か、言葉の一つも出てこない。

恐怖か嫌悪感か、自分でも分らない。ただその名前を口にする事に、酷い抵抗感があつた。

そんな自身の気持ちを知つてか知らずか、彼女がビスケットを頬張りながら徐^{おもむろ}に言葉を続ける。

「ファーストネームだけで大丈夫だよ。ほら、これから付き合つていく上で呼び名が無いと不便でしょ？」

口の中のビスケットをごくりと飲み込み、彼女が子供の様にふふ、と笑つた。

貴族社会では、出会った相手のフルネームを把握するのは常識だ。だが、階級の違う彼らにとつての常識は違うのかもしれない。

それに、貴族令嬢が屋敷を抜け出すなんて普通で考えれば異常である。キャヴェンディッシュ家の令嬢失踪事件だって、あれ程新聞で話題になった位だ。

私が屋敷を抜け出し、セドリックと共に此処へ来た事に、余程の理由があつたのだと汲んでくれたのだろうか。その言葉も、ファミリーネームを口にさせない様に、思い出させない様にといった彼女なりの配慮だったのかもしれない。

「……エル、です」

なんだか彼女の顔を見る事が出来ず、紅茶の水面を見つめ呟くように言った。

「エルちゃんかあ、可愛い名前だね」

マーシヤは変わらない口調でそう言つて笑い、バスケットをもう一枚口へと運ぶ。彼女は先程からずっと、妙に上機嫌だ。初めて会つた時から彼女は表情豊かで、常に笑っている様な人だという印象はあつたが、今日は一段と機嫌がよく見える。そんなマーシヤをみて、彼女は何故今日此処を訪ねてきたのだろうと疑問が湧き上がる。

扉を開けた時の彼女の第一声は、「三時だし、アフタヌーンティーでもしよう」だ

った。断る理由も無く、更には彼女に聞きたい事もあった為家の中へと招き入れたが、ただ親睦を深めるだけだと言うには少々不自然である。

実際退屈凌ぎの為の本や、自身では用意をする事が出来なかった下着を持ってきてくれたのは事実だが、彼女の口ぶりからするにそれは「お茶会ティータイムのついで」という様に見えた。

彼女が今日此処を訪ねてきたのは、本当にただお茶会ティータイムを共にする為だけだったのだろうか。

親睦を深めるのにお茶会ティータイムは絶好ではあるが、何故だか彼女を見ているとそれ以外に理由がある様に思える。

考えを整理する為にも、良い紅茶の香りを放っているティーカップを手を取った。「ところでエルちゃん、歳幾つ？ 大人びて見えるけど、私達と同じ位かな」

「……えっと、十八よ」

「えっ！ 想像してたより若い！ でも、一応成人はしてるんだね」

「成人」という一言に、思わずびくりと肩が揺れる。

考えてみれば、貴族令嬢が屋敷を抜け出し、街の男と共に暮らしている事が周囲に知られるのも問題だが、仮に私が未成年であつたら尚の事問題だ。それこそ本当

に、「誘拐」になつてしまふかもしれない。

もしや、彼女はそれ等の事を危惧しているのだろうか。セドリックに好意を寄せていなかったとしても、親しい間柄だと言うことは見て取れる。

それに、彼女達の仕事が仮に法に触れるものなのであれば、警察との接触は絶対にしたくないだろう。もし私が彼女の立場であれば、私の様な危険人物はすぐさま排除対象として見る筈だ。

だがその思考は、後に続けられた彼女の言葉で掻き消された。

「エルちゃんと、お洒落なB.A.R.とか行ったら楽しそうだなあ。私結構お酒は強い方なんですけど、エルちゃんはどう？」

「……お酒は、まだ得意では無くて」

「さんねーん。でも、確かにお酒あんまり得意じゃなさそうなイメージはあったかも」

ふふふ、と彼女が楽しそうに、嬉しそうに笑う。

「……二人の、お歳は？」

紅茶を口に含み、緊張で乾いた口内を潤わせてから一言尋ねる。

セドリックもマーシャも、二十代半ば位だと予想しているが、彼女が私に言った

ように、私の想像よりも若いなんて事があつたりするだろうか。人の年齢とは分からないものだ。可能性だけで言うの大いに有り得る。

「二人……って事は私とセディ？ あれ、セディからそういう話聞いてない？」

「……ええ、まだ此処へ来て三日しか経過してないし、彼も私もあまり自ら語る方では無いから……」

「そっかあ。私とセディは二十一だよ。誕生日が四ヶ月違うから若干セディの方が上だけど、同い年！」

思った通り、とでも言うべきか。二人は私の想像よりもだいぶ若い。

決して二人が老けているという訳では無く、顔つきだけで見れば妥当な年齢ではあるだろう。だが二人はやけに落ち着いた、大人びた人達に見え、自身と三つしか歳が変わらないという事には驚いた。

——そういえば。

仲の良かった使用人のメアリーも、彼らと同じだった。

顔付きだけを見れば、私の一つ年上だと言う事に疑問は無い。だがメアリーはやけに大人びた思考と雰囲気を持ち、更には博識で、使用人の中でも特別物覚えも良かった。あんな事がありながらも、両親から比較的気に入られていた方だ。

今、メアリーは屋敷でどう過ごしているだろうか。私が居なくとも、いつもと変わらぬ日々を送っているのだろうか。

私が居なくなった事で、メアリーを含めた使用人が叱責されていないと良いのだけど。

「——ところでエルちゃんさ」

変わらぬ口調で話始めたマーシャの声に、私の思考が断ち切られる。

ティーカップに口を付けたまま彼女に視線を向けると、私と視線を交わらせた彼女が柔らかに微笑んだ。

「私達がどんな人物か、気になってるんでしょ」

「——！」

私に歳を聞いた時や、酒の話をした時と、怖い程変わらない声音で突如投げ込まれた爆弾。口の中にゆっくりと含んでいた紅茶を、思わず全て吹き出してしまいそうになる。

何とか口の中の紅茶を飲み込み、自身の動揺を悟られまいと表情を引き締めティーカップをソーサーに置いた。だがその際、想像していた以上に強くカップを置いてしまった様で、ソーサーとカップがぶつかり合いガチャンと大きな音を立ててし

まった。

「ふふ、そんな動揺しなくてもいいよ。別に、相手の事が気になるのは悪い事じゃないし」

「動揺なんて、してないわ」

心臓が早鐘を打つ。彼女は随分と鋭く、勘が働く人の様だ。

彼女の、猫の様に縦長の瞳孔が私を射抜くように見つめる。——いや、蛇の様なと例える方がしっくり来るだろうか。

獲物を狙う蛇の様な、優雅に尻尾を振る猫の様な、今の彼女はどちらともつかない様な異様さを放っている。

確かに、二人がどんな人物か気になっていた。仕事の事も、階級の事も、二人の関係も。それを何処と無く訪ねようと思っていたのに、まさかこんなにも早く見抜かれてしまうとは。

もう下手に言い訳した所で通用しないだろう。心を落ち着かせようと再び紅茶を口を含み、今度は音を立てないようそっとカップをソーサーに置いた。

「——貴女の言う通りよ。貴女達の事はとても、気になっていた。でも、自分の素性を探られるのは誰だつて気分のいいものでは無いはずよ。だから、話したくない

事は話さなくて良いと……私は思っていたのだけど」

紅茶の水面を見つめながら、ポツリとそれを口にする。

気遣わしい事をあげればキリがない。言ってしまうえば、二人の仕事や関係以外にも、自身が纏っているドレスの入手経路や、セドリックが何故私の誕生日パーティーに居たのかだってそうだ。

だがそれを聞くという事は、同時に私の過去も話さなくてはいけなくなる。知られて困る様な事ではないが、出来ることならもう、家の事は思い出したくなかった。

——あんな残酷な事は、もう。

「——人、殺し」

その場に響いた、マーシヤの暗い声。

彼女のその言葉に、冷たい手で心臓を強く掴まれる様な、全身から血の気が引いていく様な感覚に襲われる。

「私達は人から暗殺の依頼を受けて、沢山の人を殺して大金を貰って、更には普通に店に盗みに入ったりもして——」

猫の様に、蛇の様に。カーディナルレッドの瞳の奥の縦長瞳孔が、私を深く捉えて離さない。そして噛み付かれてしまったかの様に、その瞳から目を離す事も出来

ない。

「——貴女に用意したそのドレスも、全部盗品」

彼女の細い指が、私の服を指す。

その言葉が全て本当なら、今まで感じていた違和感の辻褄は全て合致する。

依頼を受けていたのなら、捉えようによつては人助け。階級に見合わない暮らしをしているのだって、上質な服を身に着けているのだって、全ては仕事故の物で、更には盗品だったのであれば疑問は解ける。

「これを聞いた貴女はどうする？ 屋敷に帰る？」

きつい口調とも、穏やかな口調ともとれる彼女の声。静かな部屋にやけにそれが大きく響いて、動悸を加速させる様だった。

人を殺した人間——所謂殺人者。そんな人と同じ屋根の下で暮らしているなんて、考えるだけでもゾツとする。それに仕事にしているという事は、殺人だって慣れているのだろう。私だって、彼の機嫌を損ねればいつ殺されるか分からないという事だ。

ではどうする？ 屋敷に戻るか？

まだ此処へ来て、たったの三日しか経過していない。

両親に、「外を自分の足で歩いてみたかった」などと言つてちゃんと謝れば赦して貰えるのでは無いか。

そんな思考が脳裡に浮かぶ。

だが、私が出した答えはYesでもNoでも無かった。

「——私も、そのお仕事のお手伝いが出来る様に頑張るわ」

この言葉が、今の私の全てだ。

自分でも、馬鹿げていると思う。殺人の仕事を肯定するなんて、況してや「手伝う」なんて。

だが、この服の入手経路が合法じゃないことや、彼等が悪い仕事——殺人や強盜等をしているのでは無いかだなんてもうとつくに考えていた事だ。

勿論、ただの憶測と、本人の口から聞かされるのでは重さが違う。やはり、聞いた瞬間は恐怖を感じ、屋敷へ戻る事も考えた。

だが、それでもセドリックと今以上に「他人」になつてしまうのは耐えられなかった。

それに、屋敷に戻ったところでどうなるかなんて分かりきっている。もう、この身を削つてあの屋敷に居る事も、愛しても居ない相手の玩具になるつもりも無い。

私は自由になれた。これがその代償なのであれば、私は喜んでそれを受け入れよう。

「——え、待って、本気？」

流石のマーシャも驚いたのか、先程迄の軽やかな口調はどこへやら、緊迫感の滲む声を上げた。

きつと彼女も、私がどういう反応をするかまでは想像出来ていただろうが、手伝うと言われるだなんて思いもなかったのだろう。

「ええ、本気よ。——と言っても、私に出来るのは貴女方のアリバイ作り位かしら。私じゃ、隠れ蓑みのにすらなれないわね」

冷えた指先を温めるべく、ティーカップを両手で包み込む。だが指先にじわりと熱を感じるだけで、中々温まりそうに無い。

昔、恐怖を感じたり、緊張状態に陥ると手足が冷たくなると何かの本で読んだことがある。やはり、少なからず白い自分を黒く染める事に抵抗感を抱いているのだろうか。

自身は一度、自死を選ぼうとした人間だ。首筋に触れた剣先の冷たさは、今でも鮮明に思い出す事が出来る。

人間死ぬ気になれば何だって出来るものだ。あの日死ぬ筈だった私が今此処に生きてるのは、全てセドリックと出逢う為だったのならば。

自身が罪人になる覚悟が決まるのも、そう遠くないと思えた。

そんな事を悶々と考えていると、何がおかしかったのか、突如目の前のマーシャが吹き出す様に笑った。ぎよつとしながらも彼女に視線を向けると、彼女は必至に笑いを堪えようとしているのか両手で顔を覆っている。だがその肩は震えていて、笑いが堪えきれないのは一目瞭然だ。

「……あの、何か」

決死の覚悟で彼等の仕事を受け入れようとしたのに、こんな風に笑われてしまつては気分が悪い。沸々と苛立ちが沸き上がるのと同時に、彼女が顔を上げた。

「ごめんごめん。深い意味は無いんだよ」

「そこまで笑つておいて、『深い意味は無い』は通用しないと思うのだけど。そんなに仕事を手伝うと言った事がおかしかった？」

「違うよ、そうじゃないの。ごめんって、そんなに怒らないで」

ふう、と息を吐き、ビスケットばかり食べていたマーシャが漸く紅茶に手を付けた。勢い良く紅茶を喉奥へ流し込んでいく姿を見るに、もうその紅茶は大分ぬるく

なってしまうているのだろう。

だが彼女はそれを特に気にも留めていない様子で、ティーカップをソーサーに戻し再び、ふふ、と笑った。

「セディが貴女を連れて来たの、なんか納得しちゃった」

「……？」

「ほら、この前も言ったでしょ。あいつ、容姿だけは抜群に良いから女は余る位寄ってくるんだけど、なんでか全く興味を示さなくて。なのに突然女の子拾って来たって言うからどんな子なのかと思ったら……まさかこんなに強かな子だったとはね」

「——貴女が思っている程、強かでは無いと思うけれど……」

やはり彼女は、何処か普通とずれている人の様だ。これだけ話をしたというのに、まだ彼女の本性が分からない。

呆れながらも、ティーカップの中に僅かに残った紅茶を飲み干してしまおうとカップに口を付けた。

「——ごめん、今の話全部嘘」

丁度、口の中に紅茶を含んだ瞬間。

再び爆弾発言ともとれる彼女の言葉に、今度こそ耐え切れず酷く咽ひげてしまった。
「——う、うそ……!？」

僅かに気管に入ってしまった紅茶で声を枯らしながらも、彼女に問い返す。

「暗殺の依頼も、強盗も、その服が盗品つてのも、全部嘘。冗談」

「ちよつと待つて! 冗談で済まされる事じゃないわ!」

仮に彼女が私を疎うとましく思っていたのだとしても、セドリックとの仲を引き裂きたかったのだとしても、そんな冗談で相手を擲なげかい、混乱させるだなんて間違っている。やり方が汚い、なんて言葉では片付けられない。

苛立ちを通り越した怒りに、思わず手に持っていたティーカップをソーサーに叩き付けた。

「うん、そうだね。でも、これは全部セディの為でもあったんだ」

衝撃で割れたティーカップにも、騒音にも動じず、彼女は穏やかな口調で言葉を続ける。

「貴女も貴族社会に居たなら分かると思うけど、貴族を敵に回すのは私達にとっても危険リスクが高いんだよ。貴女にとっては自分の両親への反抗だったとしても、下手すればそれでセディが誘拐犯に仕立て上げられてしまう」

「……」

彼女の声は変わらず穏やかだが、その瞳はとても真剣で、決して私を擲擧つている訳では無い事は分かった。

それに、彼女の言っている事は正論だ。セドリックが誘拐犯に仕立て上げられてしまう事は私自身も危惧した事であり、暫くは籠城生活をするべきだという話に至ったのも、元を辿ればそれ等を憂慮しての事だった。

彼女が嘘を言った理由。それを確かめもせずに、一方的に「セドリックの仲を引き裂く為」や、「私を疎ましく思っていたから」なんて思い込んでしまった自分を恥ずかしく思う。それに、こんな風にティーカップまで叩き割ってしまうなんて、手に握ったままだったカップの取っ手を、割れて分離したカップの中に落としか口をきつく結んだ。

「——でも、貴女が半端な覚悟で此処に來たつて訳じゃない事は分かった」

マーシャが私を真つ直ぐに見据え、柔らかに笑う。

「嘘付いちゃったお詫び……つてのも変だけど、本当の事は教えてあげないとね。エルちゃんも、このままじゃ気が済まないでしょ」

正直、彼等は殺人等の法にもモラルにも反する仕事をしているという事を、真実

だと思い受け入れたばかりだ。これから真実を告げられると言われても、中々ピンと来ない。

だがそれでも、今を逃したらきつともう聞く事は出来ないのだろうと、それとなく分かった。

今の私は、それを聞きたいとも知りたくないとも口に出して言う事は出来ない。その代わりとして、彼女の瞳を真つ直ぐに見据えた。

すると彼女が私の想いを察してくれたのか、顔に笑みを作り小さく頷いて見せた。

「――『ブローカー』」って言って、分かるかな」

「……言葉は知っているけれど、具体的に何をする人なのかまでは……」

「馴染み無い言葉だもんねえ。ブローカーは、物を売りたい人と、物を買いたい人の仲介をする人の事。私もセディも、十七……位の時からかな。ブローカーを仕事にして生きてる」

彼女のその説明に、僅かに疑問が残る。

売買の仲介。それは、極一般的に行われている事であり、然程特別な事では無いだろう。思い返してみれば、私が好きだった書籍の中にもそれを仕事にしている人物がいた。

だがブローカーとは、それ程に安定した収入を得られるのだろうか。

「あはは、納得いつてないって顔してるね」

「あつ、いや……」

表情に出てしまっていたのか、慌てて彼女から顔を逸らす。

「まあその、私もセディから余計な事は言うなつて言われてるからこれ以上の事は言えないんだけど。でもエルちゃんに用意したその服の入手経路は違法じゃないし、人殺しも強盗もしてない事は確かだよ」

「……そう」

一度は受け入れた事だとは言え、やはりそんな事実は無いに越したことは無い。彼等が罪人では無いという事が分かり、ほつと息を吐く。

だがすぐに脳裏を過つたのは、彼女の言葉の一部。

「——その話、私にしても大丈夫だったの？」

彼が「余計な事を言うな」とマーシャに伝えていたのであれば、きっとその仕事は私に知られたくなかった事柄なのだろう。それが合法的な仕事なのであればわざわざ隠す事でも無いと思うが、それでも彼の意思に反する形で知ってしまったのは不本意だ。

「——ううん、この程度ならセディも怒らないと思うけど……。でも、私がこの事を言ったのは、セディには内緒にしておいて欲しいかなあ」

「——勿論、言わないけれど……」

「ああ、あと街の人達にもね。これから色々落ち着いたら街に出る事も増えてくると思うけど、街の人にセディの仕事を聞かれても知らないって言うか、もしくは商人とでも言つて誤魔化しておいて欲しい」

彼女のその言葉に、曖昧に頷く。

ブローカーは、決して問題のある仕事では無い筈だ。法に触れる仕事でも無かつた筈。なのに何故、彼等はそれ程迄に仕事を隠すのだろう。

ふと、脳裡に浮かんだその理由。それはただの憶測でしか無いが、もし真実なのであれば今迄感じた違和感全ての納得がいく。

「それって——」

セドリックの意思に反すると、分かっているながらも咄嗟に“それ”を尋ねようと口を開いた。

だがその言葉は、マーシャの鋭い瞳によって止められる。

——それって、もしかして法に触れる取引なの？

マーシヤの細められた瞳が「それ以上聞くな」と言っている様で、言う筈だったその言葉を飲み込んだ。

「もうこんな時間。随分と話し込んだじゃったね」

彼女の言葉で我に返り、時計に視線を向ける。時計が指している時刻は十六時半。彼女が此処を訪ねて来てから、もう二時間が経とうとしていた。

「ティーカップ、ごめんね。怪我はない？」

「——ええ、大丈夫。私が悪いの、ごめんなさい」

「いや、原因を作ったのは私だから。セディには私から謝っておくね」

マーシヤが私の前から、割れたティーカップが乗せられたソーサーを取った。そして空の紙袋に割れたカップ類を押し込み、席を立つ。

「これは、私が処分しておくから」

「——お手を煩^{わづら}わせてしまつて……ごめんなさい……」

「いいんだよ、全部私が招いた事だし。エルちゃんはまだ謝らないで」

慌てて椅子から立ち上がり、玄関の方へと向かうマーシヤの背を追いかける。

「今日は、色々と困らせちゃつてごめんね。でも誤解しないで、初めて会った時に

言った『仲良くなりしたい』は本音だから。それに、エルちゃんの力になれる事もあ
るって言った事も」

玄関扉の前、振り返ったマーシャが優しく笑う。それはいつかのメアリーが見せ
てくれた表情を連想する笑顔で、胸が僅かに痛んだ。

「嘘は、もうつかない。これからは全部本当の事を言うよ。難しいと思うけど、私
の事はあまり疑わないで、信じて欲しい」

「——ええ、勿論。疑うつもりは無いわ」

「そう。分かって貰えてよかった。それと、セディの事も信じてやって。あいつ、
嘘ついたりとか出来る程器用な人間じゃないから。それにセディは特に分かりやす
いし、注意して見てたら性格とかも色々掴めてくるんじゃないかな」

「——そうかしら」

マーシャがゆつくりと、玄関扉を開いた。

冬に比べて日が長くなってきた物の、まだこの時期は、十六時半を過ぎると薄暗
くなってくる。

「ごめんなさい、送っていく事が出来なくて」

「何言ってるの。エルちゃんに夜道歩かせる方が心配だよ。エルちゃんは可愛いん

だから、直ぐ男に食べられちゃいそう」

「そんな事無いわ。貴女……マーシヤの方がよっぽど綺麗な顔をしているもの」

「あは、女の子からそんな事言われたの初めてだなあ」

家の外へ出た彼女が再び振り返り、私の頭をポンと撫でた。それは優しく、温かく、とても安心できる手だった。

「次合うときは、ちゃんと“友達”として会おうね」

「ええ、是非」

マーシヤと手を振り合い、此处を去っていくその背をぼんやりと見つめる。

彼女の発言に振り回され、怒ったり動揺したり、散々な二時間だった。だが、心につつかえていた違和感はずっと落ち、気持ちには不思議とすっきりしていた。

彼女とこれから、良い交友関係を築けていけるだろうか。マーシヤは一見、裏を感じさせる様な雰囲気纏っている人だが、とても話しやすく、素直な人の様にも見えた。

思い返してみれば、先程私に嘘を言った時も彼女の表情は硬く、何処か話し方もぎこちなかった様に感じる。

それは自身の素性を明かした事による緊張感だと思っていたが、もしかすると彼

女は嘘を吐くのが苦手な人なのかもしれない。

「——あ！」

突如マーシャが声を上げ、勢い良く振り返った。

遠目に見える彼女の顔には、私がベッドの下に下着を隠しているのを発見した時と同じ、にやにやとした笑みが浮かんでいる。

「——言い忘れてたけど、私とセディはただの幼馴染！ただの家族みたいな存在で、一緒に居てドキドキもしないし、況^ましてや恋心なんて一切抱いてないから！」

彼女の声が、住宅街に響き渡る。幸い周囲に人は居ないが、まるで私の気持ちを見透かされている様に感じ、一気に顔に熱が上った。

「——だから、私とセディの関係は心配しなくていいよ！二人の事、応援してるから！」

それだけ言うと、彼女は満足げな顔で手を大きく頭上で振った。

——恋心。応援。

今の私には、彼女の言葉が上手く理解できない。

彼女は何か重要な所を勘違いしているのでは無いか。私とセドリックは、決してそういう関係では無い。

そして私のこの感情は、“応援”される物では無い筈だ。

彼女のその言葉が、今日一番に自身の心を乱す。だが、何故此处まで心が乱れるのか、何故此处まで顔に熱が上るのか、鼓動は高鳴るのか、分からないまま。

そのまま私は玄関先で蹲り、マーシヤの背を見えなくなる迄見つめ続けていた。

XV What you see in this eye

視覚を刺激する色鮮やかなパラソルに、嗅覚を満たす料理や花の香り。

フードの隙間から見える景色は全てが物珍しく、まるで物語の中を覗き込んでいる様だ。

——屋敷を出て約一週間。マーシヤとセドリックが、足が付かない程度に警察や社交界に探りを入れてくれていたらしく、一週間経った今でも私の存在は搜索されていない事が分かった。

勿論、それは表面上だけでの話だ。水面下で搜索が行われているのだとしたら、

此方は知る由も無い。

だが幾ら貴族でも、全く表に出さずに一人の人間を探し出すというのは難しい。セドリックと話し合った結果、一週間の籠城に、搜索の気配が無い今なら、多少外出する位は問題ないのでは無いかという結論に至った。

彼等がどうやってそれ等を調べたのかは、非常に気になる所ではある。だが、マ―シャとあの話をして以降、彼等の事は深く考えない様にしていた。

彼等がどんな人間であれ、私の気持ちは揺るがない。それだけは確かだ。それに、セドリック本人が素性を明かしたくないと思っているのなら尚の事。

私が考えるべき事はそんな事では無い。そう自分に言い聞かせ、今はただセドリックとどう関係を築いて行くかだけに専念する事にした。

——そう言った経緯を経て、私は今、セドリックと共に街へと来ている。

いつ何処で誰が見ているか分からない恐怖心を抱えながらも、珍しい物で溢れかえったこの街の景色には深く心惹かれていた。

私が嘗て文字^{かつ}だけではしか見る事の出来なかつた世界を、今確かにこの目で見てゐるのだ。自然と足取りは軽くなり、高揚感で満たされていく。

「——ちゃんと前見て歩けよ」

自身の少し前を歩いてきたセドリックが足を止め、此方に視線を向けながら不愛想に呟いた。街の景色に夢中になっている間に、彼との間に随分と距離が出来てしまっていた様だ。

家を出る前、彼からなるべく離れるなど言われていたのに、これでは私が不用心な女だと思われてしまう。フードが外れない様に手で押さえ、慌てて彼の方へと駆け寄った。

だが、足を踏み出し丁度三步目。石畳に僅かに出来た凹凸に爪先が引っ掛かり、自身でも理解が追いつく前に身体が前に傾いた。

「あっ——」

声を上げたのは私だったか、それとも彼の方だったか。

視線の先は石畳。理解が追いついた頃にはもう既に、体勢を立て直せない所まで傾いてしまっていた。

走った拍子に転ぶなんて、そんな事が笑って許されるのは小さな子供位だ。情けない姿を見せ、セドリックに呆れられたくない。

だがそんな思い虚しく、身体は吸い込まれる様に石畳へと倒れていく。

人間とは、予想外の事が起ると非常に無力になる。転ぶと頭では分かっているのに、脳からの指令が鈍り思う様に身体が動かない。

因よって、今の私が出来た事と言えば、咄嗟に両腕を前に出す事と、衝撃に備え瞳を強く瞑る事だけだった。

——ぼふ、と強張った身体に受ける衝撃。

それは想像以上に温かく、石畳にしては柔らかい。痛みは無く、不思議な感触だ。恐る恐る、ゆっくりと瞳を開く。

「……？」

目の前は一面白い布。自身を包み込む温かなそれが何か分からず、そのまま数回瞬またきを繰り返す。

「——だから、前見て歩いて言っただろ」

頭上から聞こえた、呆れ交じりの低い声。

「子供じゃないんだ。気を付けろ」

前に突き出したままだった腕を、するりと撫でる何か。撫でられた場所に残った感触が、じわりと熱を帯びる。

つい先程迄は、思考だけが動き身体は役に立たなかったというのに。何故こんな

状況になると、今度は身体の方が先に理解をしてしまうのだろうか。

——やはり、人間は予想外の事が起ると無力になる。

漸く思考が状況を理解し、今迄に無い程熱を顔に溜めながらそれを痛感した。彼が咄嗟に抱き留めてくれたお陰で私は転ばずに済んだのだが、思い返してみれば彼と私は少々離れていた筈だ。直ぐに支えられる距離では無かったと記憶している。

もしや、私の為にわざわざ駆け寄ってきてくれたのだろうか。彼の腕に抱かれながら、そんな事をぐるぐると考える。

だがどちらにせよ、その行動が故意であつても無意識であつても、込み上げる嬉しさに変わりは無い。

出来る事ならあと少し、あと十秒だけでもこのままで居たかった。だが此処は街中であり、更には他人である私達はそんな事許されない。名残惜しくも彼から身体を離し、自身の頭一つ分程上にある彼の顔を見上げる。

「——ごめん、なさい」

抱き留めてくれた事への感謝を伝えるか、それとも謝罪を述べるか、迷った挙句後者を口にする。これ以上ない程高鳴る鼓動に、酷く震える声。

彼は今、何を思うのだろうか。何を思い、私を抱きしめていたのだろうか。

彼も私と同じ様に、身体を離れた事を名残惜しいと感じてくれていたとしたら、もう少しこのままで居たいと感じてくれていたとしたら、それ程に嬉しい事は無いというのに。そんな期待を込め、彼を見つめる。

だが、現実はその上手くはいってくれない。私の期待を打ち壊す様に、彼が何処か不愉快そうな表情を浮かべ私から顔を背けた。

その表情に、ズキリと胸が痛む。

——どうしてそんな顔するの？

そう尋ねたくても、返事が怖くて中々言葉が喉奥から出てこない。

私達の間に流れる沈黙。彼の体温が身体に残って消えず鼓動は鳴りやまないのに、心に傷を負ってしまった様にズキズキと痛みが引かない。

自身を庇い、抱き留めてくれた事は確かに嬉しかった。だが、そんな顔を見る位なら転んだ方が幾分マシだったかもしれない。

涙が零れそうになるのをなんとか堪え、未だ掴んだままだったセドリツクの腕から手を離れた。

「——そこのお二人さん、初々しくて可愛いね」

突如自分達の間の沈黙を切り裂いたのは、その場に響き渡る凜とした声。無意識的に、声の方向へと視線を向ける。

煌びやかなアクセサリーが並ぶ台の向こう側。壁に凭れ掛かり、にやにやとした笑みを浮かべ此方を見つめるのは、赤毛にシルバーの瞳が印象的な女性だ。年齢は三十代前半から半ば位といった所だろうか。

私達の周囲に二人組は居ない。居ても、小さな子供と母親などの親子位だ。

今の言葉は私達に向けた言葉なのだろうか、と彼女の顔を見つめ首を傾げると、「あんた達の事だよ」と言つてその女性が笑った。

思い返してみれば、こうして街の人と会話するのはこの十八年間で初めてだ。勿論セドリックもマーシャも「街の人」の括りに入る人物なのだろうが、彼等には少し違つた印象を抱いている。

こういう時、どの様に返答するのが正しいのだろう。社交界では、初対面の人物と会話をする際はまず初めに必ずカーテシーと共に自身の名を名乗る。だが街でそれをしてはいけない事位、世間知らずの私だって知っていた。

——貴族の人間だと、気付かれてはいけない。あくまで私は、彼等と同じ階級の街の人間だ。

頭を捻らせた結果、得意の愛想笑いを顔に浮かべふらりとアクセサリーの並ぶ台へ近づいた。

「綺麗ね……これ、全て手作り？」

自然に、動揺を表情に出さない様に。

前屈みになり、台の上のアクセサリーを覗き込む。

並べられているアクセサリーは、言葉の通り綺麗な物ばかりだ。アクセサリーには、宝石ばかりついていて重苦しいという印象しか持っていなかったが、それ等のアクセサリー達は布を合わせて縫って作られた物や、金属で花や鳥などを象^{かたど}った物ばかりで非常に愛らしい。

「手作りの物もあれば、仕入れてる物もある」

「そうなの……、凄いわね……」

見れば見る程、その愛らしいアクセサリーに心惹かれる。アクセサリー等に興味の無かった私でさえ、魅入ってしまう程の美しさだ。

「——お姉さん、見ない顔だね。どっから来たの？」

「！」

不意に投げられた言葉に思考が止まり、思わず息を呑む。

ロンドンの中心部から近い街だとはいえ、此処は下町といっていい場所だ。この様に店を開いていれば、ある程度街の人達の顔を覚えるものであり、見覚えの無い人物がいれば目を引くのは当然だろう。

「——えっと……最近、この街に来て……」

あれ程、父を怒らせない様に、父の望む娘になれる様に、顔色を伺いながら生きてきたのだ。その場を誤魔化す事には比較的慣れている。彼女に疑いを持たせない言葉など、幾らだつてある筈だ。

なのに、そのたった一言の問いに上手く返答する事が出来ない。

この一週間で鈍つてしまったのだろうか。それとも、慣れない場所に居る所為で思考が上手く回らないのだろうか。

出てこない言葉を努力でどうにかする事は出来ず、仕方無く愛想笑いで誤魔化した。

「——そう、最近この街に……ね」

彼女のシルバーの瞳が、射貫く様にじつと私を見つめた。何か言いたげな表情に、冷汗が背を流れる。

だがその直後、ふいに彼女の視線が私の背後に向けられた。

「誰かと思ったら、セドリックじゃないか！ 珍しいね、あんたがこんな所に来るなんて」

彼女の表情がぱっと明るくなったと共に、頭上にゆらりと黒い影が揺れる。反射的に顔だけを背後に向け、その影の正体に視線を向けた。

「――あ……」

女性顔負けの白く美しい肌に、艶やかな黒髪。そして、ぶつかりそうな程近づいた顔。瞳に捉えたそれ等の物に、思わず声を漏らす。

彼の視線は商品台に向けられていて、彼がこの距離を自覚しているのかは分からない。だが少なくとも、不愉快そうな表情を浮かべ、私から顔を逸らした人との距離だとは思えなかった。

彼の気持ちだが、感情が、何一つ読めない。

疎ましく思っているのか、将又はたまたなんの感情も抱いていないのか。

転びそうになったのを抱き留めたのだって、反射的にとった行動であり、彼は何も思っていないのかもしれない。

だが、なんの感情も抱いていない相手を自身のテリトリーである自宅に住まわせるだろうか。特に彼は、その容姿から女性に持て囃はなされる事が多かった様だ。それ

等になんの興味も抱かなかつた彼が、初対面の女を、更には貴族の令嬢を屋敷から連れ出して迄共に行動するとは思えない。

彼に対しては、分からない事ばかりだ。人の感情など読めない事が当たり前なのだが、彼はその中でも特別分かりづらい。

いつかマーシャが、「セディは特に分かりやすいし、注意して見てたら性格とかも色々掴めてくるんじゃないか」と言っていたが、今の私にはその言葉が理解出来そうになかった。

「——あんた、セドリックの連れかい？」

その女性から投げかけられた問いに、こくりと頷く。

「へえ、あの女に興味の無いセドリックが、女の子とデートだなんてねえ」

「デート……という、訳では……」

曖昧にそれを否定すると、その女性がいつかのマーシャに似た笑みを浮かべた。それは、何処か揶揄^かう様な、だが嘲笑とは違った不思議な笑み。

「私はライリー・ワトソン。あんたは？」

極自然な流れで、此方の名を求められる。

これが街での自己紹介の仕方。そう関心を抱きながらも、ふとそこで、自身の名

を簡単に名乗る事が出来ない事を思い出した。

幾ら隣町と言えど、エインズワース家は名家であり、その名を口にすれば直ぐに勘付かれてしまう。だからと言って、フルネームを名乗った相手にファーストネームだけで返すのは失礼にあたるだろう。

時間稼ぎは出来ない。一秒と時間が過ぎる度に、相手へ不信感を抱かせてしまう。早く、何か誤魔化せる名前を考えなければ。早く——早く。

ふと、頭に浮かんだ一つの名前。それは確かに、あの日の私に安堵を与えてくれたもの。

「——エル・バートン、よ」

その名を無下にしないよう丁寧口にし、彼女に笑顔を向ける。

「エルちゃんね、可愛い名前だ。よろしく」

なんの不信感も抱いていない様子で、彼女——ライリーが私に手を差し出した。安堵感で満たされた心のままに、その手を握る。

あの日、本当にこの名を名乗る日が来るなんて事思いもしなかった。それはモリスだつて同じだろう。

彼のあの時の言葉は、私を安心させる為のその場凌ぎだったに違いない。

安堵と感謝、それと、僅かな罪悪感。それ等の感情を胸に、ライリーから視線を外した。

握った手を離し、再び商品台に視線を落とす。

セドリックはというと、もう飽きてしまったのか、私から少し離れた位置で退屈そうに此方を見つめていた。

台に並んでいるアクセサリーは全て女性用で、男性からすれば興味の湧かないものだろう。なるべく早く切り上げ、彼の元に戻らなければと思いつつも、その魅力的なアクセサリーから中々目が離せない。

「——あら……？」

目に入ったのは、大きな台の隅^{すみ}に追い遣られていた一本のペンダント。

鏡の様に周囲を写し込み、光を反射するそれは、他のアクセサリーとは似ても似つかない程に地味な物だった。

まるで他の店の商品が紛れ込んでしまったかのような。これ程愛らしいアクセサリーで溢れているというのに、何故そんな物が此处に並べられているのだろうか。

「何か気になる物でもあったのかい？」

「ええ、これが……」

ライリーに尋ねられるままに、そのペンダントを指さす。

「こんな物に興味を示すなんて、あんただいぶ変わってるね。昔はこの手の物も数多く置いてただけど、やっぱ若い女の子からしてみりゃ『可愛くない』らしくって。売れる事も、手に取って貰える事も無いから、仕方なく数を減らして、今はこの一本だけなんだ」

彼女が徐にそのペンダントを手に取り、私の方へ差し出した。反射的に出した手の中心に、それがぼとりと落とされる。

細いチェーンの先に付いた、銀素材の楕円型のペンダントトップ。その中心には十字架が彫刻されていて、更には開閉式になっているのか側面に小さな凹凸があった。凹凸に指先を掛け、ゆっくりと開いてみる。

「——綺麗……」

開いた先に彫刻された聖母マリア。その美しさに、思わず声を漏らす。

アクセサリーという名の彫刻品を見ている様だ。永遠に見ていられる程の美しさに、ぼんやりと手の内のロケットを眺める。

「余程それが気に入ったんだね」

そんな私を見たライリーが、声を上げて笑った。

もしや、その美しさに見惚れるや否や、だらしない表情でもしてしまっていたのだろうか。慌てて表情を引き締め、「とても綺麗だったから」と言つて彼女に合わせの様に自身も笑った。

「そんなに気に入ったんだったら、あいつに買ってもらえばいいじゃないか」

「あいつ……つて……？」

ライリーが意味有りげな笑みを浮かべ、先程同様私の背後へと視線を向ける。それが何を意味しているか頭では理解していた筈なのに、ついついそれに釣られてしまい、自身も振り返つて背後に視線を送ってしまった。

ばかりと、交わつた視線。

退屈そうな顔が訝^{いぶか}しげな表情に変わり、視線の交わつた人物、セドリックが此方に歩み寄ってくる。

「だ、だめよ！ セドリックには、迷惑を掛けたくないの！」

声を潜め、ライリーに強く訴える。

だが、ライリーは私の言葉など気に留める様子も無く、「アクセサリーの一つや二つ、男なら買ってやるのが普通だよ」と軽い口調で言つてセドリックに手招きをした。

近くに寄つてきた彼が、訝しげというよりも、最早面倒臭そうな顔をして私達に説明を求める。

「エルちゃんがこのペンダント、気に入ったんだってさ。あんた男だろ、買ってやんな」

「ちよつと……！」

少しも躊躇う事無くそう言つてのけるライリーに、一気に鼓動が跳ね上がる。

ロケットペンダントは、まだ手の内に握ったままだ。早く弁解しなくては、と口を開こうとする物の、なんと言葉にしたらいいか分らず取り急ぎ否定を示す様に首を左右に振った。

だが私の思いはセドリックに届かず、彼の手が私の手に重なる。

「……別に、欲しいならその位買つてやるけど」

思わず緩めてしまった手の内からロケットを摘み上げ、彼がそれをまじまじとそれを見つめる。そして金額を確認する様にチェーンの先に付いた値札へと指先を伸ばした。

「——ま、待つて！ 違うの！」

——辺りに響き渡る、自身の声。

その指先が値札へ届く前に、と思った迄は良かった。彼の迷惑にならない様に生きる、それが私の願いであり、強い決意だ。

そんな中、生活する上で無くたつて困らないアクセサリーを買ってもらうなんて以ての外。故に、彼がそのペンダントの値段を知る必要も無い。

出来る事なら、私がこのペンダントに心惹かれたという事すらも彼の耳には入れなくなつたのだが、ライリーが伝えてしまつたのだから仕方が無い。今はとにかく彼の意識をペンダントから逸らさなければ。

——そう思つた結果が、これだ。

自身の口から発せられた声は想像より遙かに大きく、最早叫び声である。周囲の人達の視線が自身に集まるのを感じながら、熱を帯びる顔を隠す様に手で顔を覆つた。

「……綺麗だと思つたのは事実よ。でも、決して欲しいと思つた訳じゃないの。ごめんなさいね、忘れて頂戴」

顔を覆いながらゆつくり息を吐き、なるべく落ち着いた声で告げる。

彼への印象を、悪くする事だけは避けたかつた。色々と手遅れの様な気もするが、彼に煩わしい女だと思われる位なら彼の記憶に残らない方がまだ幾分マシだろう。

止まらない自己嫌悪の中顔を上げると、視界に写ったライリーは俯いて顔を隠し、肩を震わせて笑っていた。彼女には何処か、マーシャと近い何かを感じる。

決して笑い事では無いのだが、今はそれを咎める事も出来ず、こつそりと上目遣いにセドリックの表情を伺った。

「……まあ、お前がそれでいいなら良いけど」

そう告げた彼は相変わらず無表情で、感情が全くと言っていい程読めない。台にペンダントを戻す彼の横顔を見つめながら、小さな溜息を吐いた。

「……あ、」

ペンダントが彼の手から離れた瞬間。

彼が何かを思い出したかの様に、小さく声を上げた。

そして何を思ったのか私の腕を勢い良く掴み、半ば引き摺る様に街の方へと大股で歩き出す。

「ちよ、ちよっと待って、どうしたのセドリック……」

なんとか人にぶつからない様必死に彼の後に続き、彼の背中に問い掛ける。だが私の声が聞こえていないのか、それとも返事をする必要が無いとも思っているのか、彼は振り返る事無く街中を進んでいく。

背後で聞こえるライリーの怒鳴り声。周囲の雑音で聞き取る事が出来ず、聞き返そうと振り返るが、彼の手がそれを許す事なく私の腕を強く引っ張った。

人の少なくなった街路の隅^{すみ}で、漸く彼が足を止める。それに合わせて自身も足を止め、彼の顔を覗き込んだ。

「……今日は、街の人間と接触する為に此处に來たんじゃない」

ぽつりと呟くような彼のその言葉に、本来の目的を思い出す。いつまでも家に籠っている訳にはいかないから、今日は試しに少し街へ出てみると、彼はそう言っていた筈だ。まだ安全だと決まった訳じゃないから、街の人間とは安易に接触しないように、とも。

本来の目的を見失ってしまったのは、完全に私の落ち度だ。謝らなければと、咄嗟に口を開く。

だがそれを遮る様に、彼が先に口を開いた。

「悪い、お前を危険に晒すつもりは無かった」

先程からは想像の付かない、不安げな顔。

「ライリーは俺にとって、……まあ、その……警戒範囲外の人間だったんだ。だから、少なからず本来の目的を見失っていた所があったんだと思う」

「——ま、待つて……ライリーさんの方へ行ってしまったのは私よ。私が悪かったの、ごめんなさい」

彼の言葉を否定するように、首を横に振った。

あの時、ライリーと接触しない方法は幾らだつてあつた。寧ろ、数ある方法の中から見事に外れ籤くじを引いてしまったとさえ思える。

「いや、お前がライリーの元に行く前に、俺が止めていれば良かった話だ。さつきは少し……考え事をしていて……」

「——考え事？」

あまり、詮索をするべきでは無いと思いつつも、ついそれが氣になつてしまい彼の言葉を問い返す。

答えたたくない事であれば、彼も彼なりに上手く誤魔化すだろう。彼の瞳を深く見つめると、彼が漸く私と視線を交わらせた。

「……大した事じゃない」

ぼつりと、独り言の様に漏らした言葉。

やはりその「考え事」は私には教えてくれないか、と少々残念に思う裏腹、彼の囁く様な甘い声が私の聴覚を刺激し、鼓動が早鐘を打つ。

先程、私から顔を背けた時とは打って変わった、熱の孕んだ視線と声。その美しい宝石の様な瞳に吸い込まれそうになりながら、お互い深く見つめ合う。

——やはり、彼の事が分からない。

その視線は、声は、何を意味してるのか。期待を、してしまっても良いものなのか。

「——大した事じゃ、無いんだが……」

彼が変わらぬ熱の籠った視線で私を見つめながら、ぼんやりとした口調で言葉を漏らした。収まる事の無い高鳴る心音を感じながら、その言葉の続きをただ只管ひたすらに待つ。

今の彼の様な、熱の孕んだ視線を向けられる事は社交界では決して珍しく無かった。純粹な熱い視線であったり、下劣なものであったり、込められた感情は様々だ。

だが私はそれ等を、一度だって快こころよく思う事は無かった。自分に値段を付けられている様で、私の背景にある地位や金、名誉を品定めされているようで、ただ怖くて気味が悪かった。

なのに彼にこうして見つめられると、とても心地よく感じてしまうのは何故だろうか。鼓動は高鳴り煩うるさくて仕方ないのに、それは決して不愉快では無く、甘く狂お

しく、心の奥底が切なく苦しい。

「――俺は、お前を……」

言葉が続けられると共に、彼の手が私へと伸びた。

私の鼓動が、最高潮に達する。

私が望んだ、他人以上の関係になれるのかもしれない。彼の心が、分かるかもしれない。

そんな期待で満ちた心は、今にも破裂して溢れてしまいそうだった。

「――っ！」

突如、叩きつける様に吹いた強風。身体ごと飛ばされてしまいそうになる強さに、巻きあがるスカートを咄嗟に押さえ目を強く瞑つぶった。

遠くで、バタバタと店の看板が倒れる音がする。それに伴い聞こえてきた、子供や女性の悲鳴。

珍しいと言っても良いであろう突風は、少なからず街に被害を与えた様だ。

風が収まったのを感じ、恐る恐る瞳を開く。

瞳に捉えたのは、普段通りのセドリックの姿。彼の瞳には、もう先程の熱は宿っていない。

時間にすれば、ほんの数秒の出来事。彼に向けられた熱の籠った視線も声も、全て突風に掻き消されてしまい、それ等の物が段々と幻覚だったのではないかと思えてくる。

「——セドリック、髪が……」

彼の艶やかな黒髪は、先程の突風の所為で乱れてしまっていた。彼と距離を詰め、無意識的にその髪へと手を伸ばす。

彼とは身長差が開いている為、髪に触れるだけでも限界まで背伸びをしなければならぬ。ふらふらと覚束^{おぼつか}無い足で背伸びをし、漸く届いた髪に指先を触れさせた。想像していたよりもずっと柔らかな髪が、私の指の間をすりりと抜けていく。

——いつだったか、屋敷の庭に紛れ込んでしまった猫が居た。

その猫には細かな枯れ葉や土が付着していたが、毛並みが美しく整えられていて、更には首に愛らしいホワイトの首輪が付けられていた為、野良猫で無い事は一目で分かった。何処かの家で飼われていた猫が、家出でもしてきたのかしら、などと言いながらメアリーと共にその猫を愛でていたのは懐かしい思い出だ。苦しい日々の中の、ほんの些細な癒しの時だった。

長毛で、顔を埋めたら嘸かし心地が良いであろう毛並み。彼の髪も、何処かそれ

に似ている様な気がする。

許されるなら、彼の髪にも顔を埋めてみたい。そんな事を考えながらふふ、と笑みを零し、彼の髪を撫でた。

「……おい」

一^{ひとしき}頻り、彼の髪 of 感触を楽しんだ頃合い。複雑な表情を浮かべた彼が、やや強めに私の腕を掴んだ。

どうやら、色々と考えているうちに髪を整えるを^{ちようか}超過し、必要以上に頭を撫でてしまっていたらしい。

「あつ……ご、ごめんなさい。つい……」

浮かせていた踵^{かかと}を石畳に付け、沸き上がる羞恥に彼から視線を逸らす。

最初は、ただ乱れた彼の髪を整えてあげるだけのつもりだった。この辺りには自身の姿を確認出来るものは無く、他人が整える方が早くて確実だと思ったからだ。

しかしよく考えてみれば、本人の許可も無く、更にはこんな^{おうらい}往来で、突然髪を触るだなんて無神経だったかもしれない。

居た堪れなくなり、彼の手から逃れる様に腕を引いた。

だが頭上から降ってきたのは、予想していたものよりもずっと柔らかな声。

「――人の心配するより、自分の心配したらどうだ」

掴まれた腕がするりと解かれたその直後。彼の手が、ぽんと頭の上に乗せられた。まるで小さな子供にする様に私の頭を撫で、そして優しく乱れた髪を手櫛で整えてくれる。

「髪も乱れてるし、フードも外れてる。俺の事より、自分の事を優先して考えろ」彼の言葉は、相変わらず棘がある。だが、それを払拭する様な優しい手付き。

鼓動は高鳴り、顔にはどうしようも無い程熱が溜まっているというのに、何故だかそれはとても心地よく、段々と瞼が落ちてくるような感覚に陥る。

「――ねえ、セドリック」

甘くて、刺激的で、穏やかな時間。

私は彼に、何を望んでいるのか。彼は私に、何を思っていたのか。

止まりかけた思考の中で、一つだけ明確に浮かんだ疑問。

「――先程、私に何を言おうとしたの？」

ふわりと、柔らかな風が私達の間を吹き抜ける。

あの時間は、彼の熱の籠った視線と声は、きつと幻覚じゃない。もしあれが幻覚だったのだとしたら、今この瞬間だって同じであろう。

彼の手は、まだ頭の上に乗せられたまま。もうとつくに髪は整っているというのに、彼は私の髪から手を退かさない。

先程の私と同じ様に、その手はただ愛しむ様に頭を撫でる。

だが私のその問いに、彼の手は止まってしまった。そして暫く考えこむ様な顔をして私を見つめた後、ゆつくりと髪から手が離れる。

「——別に、大した事じゃない」

彼はそれだけ言うと、口を嚙くはんでしまった。少々熱を孕くはんでいるものの、その言葉は私を突き放す様に素っ気ない。

そして、「これ以上聞くな」とでも言うように、頭から外れたフードを掴み、私の頭に乱暴に被せた。

「外に長居するのは良くない。早く行くぞ」

狭くなつた視界の中、瞳に映った彼の足が街の中心部の方角へと向く。

やはり、彼の心を覗く事は私には出来ない。次マーシャに会ったら、彼の洞察どうさつ方法等を伝授して貰おうか、なんて思い、自嘲を漏らす。

——そんな時。

ぽん、と一瞬、フード越しの頭に何かが置かれた感覚。

それはすぐに離れてしまったが、確認せずとも先程迄私の髪を撫でていた彼の手だという事は分かった。

「何してんだ、早くしろ」

街の中心部へと向かって行ってしまう彼の顔は、此処からでは見えない。

足を止めず、振り返りもしない彼は、果たして今何を考えているのか、私は知る由も無かった。

鼓動は自身を急かす様に忙しく高鳴り、のぼせ上がってしまいそうな程に顔には熱が溜まる。

何故そうなってしまうのか、私は未だ知らぬまま。

——だが私は、その知らないふり続けているだけなのかもしれない。

XVI Your voice to save me

多くの人で賑わう、街の中心部。

セドリックに連れられるままに、人混みの中へと歩を進めていく。

この短時間で、彼は沢山の事を教えてくれた。

食材を調達出来る店や場所、街の診療所に、情報収集をするのに適した人物。そして、安易に近づくべきではない場所などなど。

この街は、私の想像とは遥かに掛け離れた活気で溢れていた。

下層階級の人間は心が荒んでいて、喧嘩や盗難が相次ぎ、問題ばかりが起こる。屋敷での教育が私にそのような印象を持たせたのか、私はずっと、街は危険な場所だと思っていた。

しかし、実際はその真逆だった。

笑顔に溢れ、社交界の様な見栄やお世辞も無く、皆が苦労の中に幸せを見つけ精一杯に生きている。

勿論、私が想像していた危険な場所だって存在し、喧嘩や盗難が無いという訳では無い。だがそれでも、私の想像とは全く異なっていた。

私が元居た場所とは大違いだ。

マナーやルールに厳しく、幸福自慢と陰口が絶えない。口を開けば、金、地位、名誉、などそんな事ばかり。

私はそんな場所に居るよりも、此処に居た方が余程人間らしく生きられると、今日やっと確信を持つ事が出来た。

道の隅で足を止め、小さく息を吐き空を見上げる。

雲は多いものの、隙間からは青空が見えていて比較的天気が良い。家を出て彼此^{かれこれ}一時間程が経過しているが、足の疲れなど感じさせない程外の空気は気持ちが良い。った。

今までは、この空を窓から眺める事しか出来なかったのに。今や、自分の足で街を歩き、そして空を見上げているだなんて不思議だ。

温かな風を頬に感じながら、少し離れた先を歩くセドリツクを駆け足で追いかけた。

「お出かけはもうおしまい？」

相変わらずの無表情で歩を進める彼の背に、言葉を投げ掛ける。

幾らこの街の事を知らずとも、進む先は見覚えのある道。彼が帰路についているという事は、なんとなく分かった。

「ああ、もう粗方説明は済んだからな」

振り返る事無く、彼が淡々と答える。

「残念ね……、まだ陽が落ちるには早すぎる時間なのに」

「まあ、気持ちには分からなくも無いが」

約一時間街を練り歩き、彼も私も、薄々気付き始めていた。

注意深く周囲を確認しながら歩いていたが、誰かを探している素振りを見せる人物は居らず、街の人達の立ち話等を盗み聞きしてみても、誰もエインズワース家の話をしていなかった。

屋敷を出て一週間が経過し、この状況だ。本気で連れ戻す気があるのなら、もっと本腰を入れて探す筈。だがこの街は平穏で、絶える事の無い噂話もどれも些細な事ばかり。

それを口にしないものの、もうお互い分かっている。エインズワース家の人間は、私を探していないという事を。そしてもう、警戒を強める必要が無いという事も。

楽しみにしていた外出もこれで終わってしまうのか、と少々残念に思いながら、黙ってセドリックの一步後ろをついて歩く。

欲を言えば、先程見つけた貸本屋や、良い香りの漂う紅茶専門店も覗いてみたい。だが一時間も街を歩いた後だ。私は外出自体然程経験がない為、一時間でも二時間でも問題は無いが、この街での生活に慣れている彼は別だろう。

彼はあまり積極的に物事を熟す方では無く、仕事が無い日は殆どの時間をベッドの上で過ごす。それに、口には出さないものの毎日の仕事も面倒臭いと思っている様だった。そんな彼が、私の為にと一時間も街を案内してくれた事には感謝が尽きない。

何処か気になる店があるのなら、彼が仕事へ行っている間に私が一人で訪れれば良い話だ。今日は大人しく、彼と共に帰ろう。

夕食の時間まではまだ時間がある。

帰ったら、ゆっくり紅茶でも飲みながらマーシャが貸してくれた本でも読んで過ごそうか。

ああでも、帰ったらすぐに眠ってしまうであろうセドリックの寝顔を、こっそりと堪能するのも良いかもしれない。色々と考えながら、一人笑みを零した。

だがそんな自身の妄想は、突如真横で響いた金属音によって掻き消される。一体何事かと、騒音に顔を歪めながら音の方に視線を向けると、そこには一台の馬車が止まっていた。

それは辻馬車でも乗合馬車でも無い、貴族が所有する四輪馬車。そして車体に描かれた、とある名家の紋章。

目にしたそれに、心臓が冷たい手で掴まれた様な感覚に陥る。全身から血の気が引き、身体は強張^{こわば}って動かない。

ガチャリ、と心地良くも重たい音を響かせながら、馬車の扉がゆつくりと開いた。その奥に見えたのは、一人の男の顔。

自らの足で馬車を降り、彼が紳士的な笑みを見せる。

「一週間ぶりだね、ミス・エインズワース」

ブラウンのスーツに身を包んだ、金の髪が印象的な男。

その瞳の奥に潜んだ闇は、今でも忘れる事は無い。

「——キース、様……」

彼は私の婚約者であり、名家の嫡男である、キース・スタインフェルド。

にこりと笑うその顔は、あの晩と同じ、何処か狂気を含んだ薄気味悪い笑み。

——逃げないと。

脳内を埋め尽くすその思考に、咄嗟に石畳を蹴った。

セドリックとは少し距離が出来てしまっているが、ここでキースから逃げる事さえ出来れば追い付ける筈だ。

だが私が走り出すよりも、彼が私の腕を掴む方が早かった。

「酷いな、逃げるなんて」

楽し気に、彼が笑う。

こんな所で、彼に捕まる訳には行けない。叫べばまだ、きっと望みはある。セドリックに助けを求めようと、目一杯肺に息を吸い込んだ。

「おいたが過ぎるよ、『貴族』の私に盾突くなんて」

彼の手が、私の口を強く塞ぐ。またもや、彼に行動を封じ込まれてしまった。

口を塞がれたまま何とか叫ぼうと声を出す、それはくぐもり声にも言葉にもならず、遠ざかっていくセドリックの耳には届かない。

とにかく、なんとかして逃げ出さなければ。

そう思い、抵抗するように彼の腕を両手で掴む。そして強く身体を捻るが、体格に差がある彼に敵う筈も無く、いとも簡単に馬車の車体に背を叩きつけられてしま

った。

自身の目の前は、赤い煉瓦の壁。そして、背後はスタインフェルド家の馬車。

壁と馬車の間に挟まれる形になった私と彼は、周囲から死角になっている為このままでは誰にも気付いて貰えない。

つまり私は、彼から逃れる事は出来ない。

「——どうして君がこんな所に居るんだい？ 君は、重い病に侵されている筈だろう？」

彼の爪が、頬に食い込む。

病氣？ 一体何の事だろうか。それを問い返したくても、彼の手は私の口を塞いだまま。その手を解く気配は無い。

「おかしいな。僕は君のお父様から、君が重い病氣に侵されてしまった為結婚は不可能だ、と聞かされ一方的に婚約を解消されてしまったのだが」

「——!？」

「でも君が此処に居ると言う事は、それはあの方の嘘だったのかな」

彼が「残念だ」とわざとらしく言葉を付け加え、小さく溜息を吐いた。

思った通り、父は私が屋敷を抜け出した事を周囲に話していない。婚約者の彼で

すら、真実を聞かされていなかった。

まさか、本当に父は私の存在を――

「そういえば」

自身の思考を遮るように、彼が言葉を続ける。

「丁度一週間前、君の誕生日パーティーがあつた晩だ。我が家に可愛い可愛い女の子がやってきたんだよ。アッシュの髪が印象的で、美しい白い肌を持った、本当に可愛い女の子が。あの子はスタインフェルド家の長女、そして僕の妹になる子でね、充分に愛を注いで可愛がつてあげたいんだ。でも僕は、少女の愛し方が分からない」

「……？」

彼が再びわざとらしく、残念そうな表情を浮かべる。

恐怖に支配されたこの状況で、どれだけ思考を回してみても彼の言葉が理解できない。いや、理解したくない。

だが残酷にも彼は、その先の言葉をなんの躊躇ためちいも無く口にする。

「――つまり、どれだけの事をすれば少女は死ぬのか、試してみたいんだよ」

触れそうな程顔を近づけて、囁かれた言葉。

――死ぬ。

明確に口に出されたその言葉に、一瞬で血の気が引いた。

ドレスの下のはきは震え、瞳にはじわりと涙が浮かぶ。

「下層階級の女を攫^{さら}って試してみようと思つていたんだが、丁度良かった。君が怯えて泣く顔を、あの晩からずっと見てみたいと思つていたんだ」

先程迄の残念そうな表情は何処へやら、彼は嬉々とした顔で私の口を塞ぐ手に更に力を籠める。

——これは天罰だろうか。

望まぬ結婚は、女であれば仕方のない事。上流階級に生まれてしまったのだから、全て仕方のない事だ。

なのに私はそれから逃げ出して、自由になろうだなんて、そんな事を夢見たから。最初から大人しくこの男の妻になつて居れば、少なくとも命を落とす事など無かつたのだらう。

——いや、違う。

何を今更「死」に恐怖など抱いているのだろうか。私は一度、自死を選ぼうとしたというのに。あの時、死ぬ事に安堵していた筈なのに。

では、この恐怖心は一体何に對してのものなのか？

「――妻であれば、ある程度は大切にしなければならぬと思つていたが、ただの下層階級の女であればそんな慈悲など必要ない。君を傷めつける事だつて、死なせてしまふ事だつて、何も問題は無いんだ」

恍惚とした表情を浮かべた彼の、興奮を感じさせる声が耳奥にこびりつく。その所為で、思考が上手く動いてくれない。

今頃、セドリックはどうしているだろうか。私が居なくなつた事に、気付いてくれただろうか。

あの時私を抱き留めてくれた様に、私を探しに来てくれたら、それ程に嬉しい事は無いというのに。

「さあ、行こう。僕の城に」

彼が口の前で指を立て、私からそつと手を離す。

――ああ、そうか。

漸く、この恐怖心の意味を理解する事が出来た。

あの晩、バルコニーで抱いた絶望とは違う感情。

私は、拘束されたくない訳では無い。自由を失いたくない訳でも無い。
私は、ただ――

「——エル」

耳に届く、私を呼ぶ心地よい声。

「——こんな所に居たのか、探したぞ」

確認せずとも分かる声の主に、張り詰めた糸が緩む様な安堵感を覚えた。今迄聞いた中で一番優しく、一番穏やかなその声に、瞳に滲んだ涙が溢れ次々に頬を伝う。

「なんだ男が居たのか、つまらないな」

彼が舌打ち交じりに呟き、私から距離を取った。それとほぼ同時に、私が望んだ人物——セドリックが私と彼の間に割って入る。

「私の妻が、何かご無礼でも？」

セドリックが変わらぬ穏やかな口調でキースに尋ねながら、私の肩を強く抱き寄せた。

その手の強さは、私の口を塞ぐキースの手と同じ。なのに、痛みを感じるところか何処か心地よくて、恐怖に早鐘を打つ鼓動も徐々に落ち着いていくのを感じた。「ああいや、彼女には道を尋ねていただけだよ」

キースが白々しく、セドリックの問いに答える。セドリックも彼の言葉が嘘だと

悟ったのか、私の肩を抱く手に力を籠めた。

「だがどうやら、彼女を怖がらせてしまった様だね。すまなかつた」

何がおかしいのか、キースがふふ、と笑みを零す。その笑みはとても紳士的だが、先程の会話の後に見るととても正常な物だとは思えなかった。

一刻も早く、此処から離れたい。でないと、セドリック共々キースに食べられてしまいそうだ。

そんな恐怖心から、セドリックのシャツの裾をくい、と引つ張る。

「——そうでしたか。それは失礼しました。では、私達はこれで」

私の思いを汲んでくれたのか、彼がキースに会釈をし私の腕を引いた。

先程よりも、ずっと歩幅が合わない。半ば引き摺られる様に、彼に腕を引かれるまま^{おぼつか}覚束無い足で着いていく。

すれ違い様、キースがポツリと何かを呟いた様な気がした。その瞬間、セドリックが今までに無い程の鋭い視線をキースに向ける。

だがキースは、まるでもう私達に興味を無くしたとでも言うように、馬車へと戻っていった。

人混みを縫って、家路を進んでいく。彼は一度も振り返ること無く、歩く速度を落とす事も無い。

そんな彼に合わせていると、次第に呼吸も乱れてくる。家周辺の見知った道に戻つて来た頃には、額に汗が滲む程疲れ切っていた。

人気の無い道で漸く足を止めた彼が、するりと私の腕から手を離す。

「——セ、セドリック……」

息を切らせながら、感情の読めないその背に向かって名を呼ぶ。

ライリーと話した時、彼はとても不安げな顔をしていた。そして有ろう事か、彼は「危険に晒すつもりは無かった」などと言って謝罪の言葉を口にした。

もしや、今回も彼を心配させてしまったのだろうか。不安な思いを、させてしまったのだろうか。

「あ、あの……」

どう彼に謝ればいいのか、ぐるぐると思考を回しながら言い淀む。

すると彼が、ゆらりと身体を此方に向けた。長い前髪でその顔は隠れてしまっているが、浮かんでいるのはいつも通りの無表情だという事が分かる。

そう、思ったのも束の間——

「お前、なんでちゃんと付いて来なかったんだよ！」

周囲に響いた、彼の怒声。

彼は常に静かで、声を荒げる事は滅多に無い人だ。自由奔放ほんぽうなマーシヤの相手をした時ですら、彼からは多少の苛立ちを感じたものの、然程普段と変わらなかった。

——なのに。

今の彼からは、深い、心の底からの怒りの感情が伝わってくる。

「今自分に置かれた状況分かってんのか、屋敷の人間に見つかったら、お前も俺も終わりなんだぞ！」

彼の言葉に、何故だかふと、父の顔が浮かんだ。使用人を叱責をする父の顔、怒声、罵倒する言葉。

父とセドリックは違う。私が悪いのは分かっている。だがどうしてもその声に父が重なってしまい、止まった筈の涙が再び溢れた。

「……あ、貴方の後ろ、ちゃんと付いて行っていたわよ」

——迷惑かけて、ごめんなさい。

そう言う筈が、口から出たのは真逆の言葉。

「でも、でも、貴方が私を置いて、先に行ってしまったんじゃない」

ボロボロと零れる涙も、彼を責める言葉も、止まらない。

彼の瞳が見られず、自身の涙に濡れた顔も見せられず、両手で顔を覆った。叱られて言い訳をする、子供の様に。

彼は今、どんな顔をしているのだろう。こんな私に、呆れているだろうか。自分が悪い癖に人の所為にばかりして、やっぱり我儘な貴族令嬢なのだと、思われてしまったのだろうか。

それも当然だ。私がセドリックだったとしたら、こんな女絶対に嫌だ。

我儘で、自身の立場も理解出来ず、危険に巻き込まれても尚人の所為にする。呆れて物も言えないだろう。

だが彼は、何も言う事無くただ先程と同じ様に私の腕を掴んだ。その行動の意図が分からず、思わず顔を上げ彼に視線を送る。

「怒るつもりは、無かったんだ……。その、悪かったよ」

彼の顔に浮かんでいるのは、動揺にも似た困惑の表情。

先程とは違う、緩やかな動作で私の腕を引き、彼の胸元へと抱き寄せられる。キースを前にした時は、何も考えられなかった。だが、今ならわかる。

私は、拘束されたくない訳でも、自由を失いたくない訳でも無い。

——ただ、セドリックと離れたくないだけだ。

彼への気持ちの名前はまだ、分からないまま。だがそれでも、彼の体温も、手の強さも、優しさも、全て失いたくは無かった。

それこそ、彼を失う位なら死んでも良いと思える程に。

「……ごめんなさい」

ぎこちなくも彼の背に腕を回し、先程言えなかった言葉を口にする。

彼はそれには何も答えず、ただ私を抱く腕に力を籠めた。

彼と抱き合って、どれ程の時間が経過しただろう。

シャツ越しに感じる彼の心音が心地良く、このまま眠ってしまいそうになりながらもぼんやりと思考を動かす。

父も母も、こうして私を抱きしめてくれる事は無かった。幼少期、私も子供なりに両親に抱いて欲しいとせがんだ事はあったが、両親共に「由緒正しきエインズワース家の人間は、そんな幼稚な要求などしない」などと言って私に触れる事すらしなかった。

それが子供ながらに寂しくて、一人で泣いていた時、いつも私を抱いてくれてい

たのは執事のモーリスだった。「こんな所で泣いていたら、また旦那様や奥様に叱られてしまいますよ」なんて言いながら、私を抱いて庭園と一緒に散歩してくれた。普通、幾ら幼くとも使用人が令嬢を抱くだなんてありえない事だろう。それは、きつと許される事では無い筈だ。

だが、何故だかモーリスだけは特別な気がした。彼は使用人とも家族とも呼べない、不思議な人。そんな彼が、私は好きだった。

セドリックに抱いた感情も、モーリスに抱いていた気持ちと同じなのだろうか。こうして抱きしめられると落ち着くのも、離れたくないのも同じだ。

だが、モーリスには抱かなかった感情を、セドリックには抱いている。

その理由が、意味が、まだ理解できない。きつと身体は理解しているのだろうか、思考が上手くそれに追いついてくれない。

「――あの男、本当に知らない奴なのか。道を訪ねていた様には見えなかったが」そんな自身の思考を遮る様に、彼が落ち着いた声音で問う。

やはり、彼もキースの言葉が嘘だという事に気付いていたのだ。

「あ、あの……あの人は、社交界で一度だけ、お話した事があって……」

「――それで？ お前がエインズワース家の令嬢だって気付いていたのか」

「——い、いや……、私を、何処かで見た事がある……と。それで、顔が、気に入ったから屋敷に来ないかと……言われて」

口にしたのは嘘でもあり、真実でもある言葉だ。

キースからは、パーティーで「天使の様に美しい人」と言われていた。それに先程も、怯え、泣く姿を見てみたいと思っていたと言われた。つまり、顔を気に入っているという事で間違いはないだろう。

だが、キースはエインズワース家の令嬢、エル・エインズワースの婚約者だ。私、はもうエインズワース家の人間では無く、更には婚約は解消されたと聞いたが、社交界で一度だけ話した事があるというのは誤りである。

これは彼を心配させない為の言葉であつたが、八割方私の身勝手な理由だ。

——私に婚約者が居た事を、彼に知られたくない。

何故その様に思うのか、自分でも分らなかった。だが、確かキースはセドリックが助けに来てくれた時「男が居たのか、つまらないな」と言っていた。キースが再び私を狙う事は、無いと断言してしまっても良いだろう。

あれでも、名家の嫡男だ。問題事など起こしたくはない筈。

スタインフェルド家の当主は特に社交界での噂に過敏で、そんな父を持つキース

なら私に関わる事が何を意味するかは分っているだろう。

「大丈夫よ、あの人は……、私の事を知らない筈だから」

彼のじとりとした視線から逃れる様に、再び彼の胸元に顔を埋めた。

キースと接触した場所は、人で賑わい、馬車の通りも多い街の中心部。あの辺りは、今後あまり出向く事が無いであろう場所だ。特別警戒を強くする必要も無い。

「まあ、お前が良いって言うなら良いが……。貴族にも危険なやつは多い。あまり、人通りの多い場所には一人で行くなよ」

私から身体を離れたセドリックが、やや呆れ気味に溜息を吐いた。

そして徐に、私の頬に残った涙の跡を指先でやや乱暴に拭う。

「とりあえず、帰るぞ。帰ったら、菓子と紅茶位出してやるからもう泣くな」

「……貴方、紅茶淹れられるの？」

「当たり前だろ」

身体に残った彼の体温が、嫌に冷えていく。そのまま心に宿った安堵感すらも消えてしまいそうで、思わず踵^{きびす}を返した彼に手を伸ばした。

そつと控えめに重ねた掌。彼と私の間に、新たな会話は生まれない。

だが、その手が解かれる事も無かった。

XVII Awareness of love

「おかえりなさい、セドリック」

時刻は十八時前。

仕事から帰宅したセドリックからジャケットを受け取り、丁寧にハンガーへと掛ける。

テーブルの上に並べられているのは二人分の食事。先程焼きあがったばかりの、夕飯のミートパイだ。

帰ってきて早々、ネクタイを解きながら料理を覗き込むセドリックは、今日もお腹を空かせて帰ってきてくれた様だった。

「美味^{うま}そうだな。ミートパイか」

「ええ、たまにはパイを作ってみようと思って」

パイの焼き方は屋敷に居た頃に教わっていたものの、少々手間が掛かる上に失敗のリスクが高い為、今迄手を出して来なかった。だが、今日街へ買い出しに出かけ

た際、ライリーから「男は野菜多めのスープよりも肉料理を好む」との情報を貰った為、頑張って一から作ってみたのだ。

その結果、少々指先に怪我を負ってしまったものの、パイは綺麗に焼く事が出来た。部屋に充滿するパイの香ばしい香りに、お腹がきゅうと小さく鳴く。

「冷めないうちに、頂きましょう」

彼を促しつつ、最早定位置となった席へと着いた。

皿の向こう側に置かれたグラスを手に取り、注がれた水を口に含み乾いた口内を潤す。そして私と同じ様に席に着いたセドリックに柔らかに微笑みかけ、皿の両隣に置かれたナイフとフォークを手にとった。

「お口に合えばいいのだけど」

「お前が作った料理で、不味かった物は無いって何回言えば覚えるんだ」

不愛想で棘があり、目も合わせてくれない。だが彼のその言葉は、彼なりの褒め言葉だ。

最近漸く、その刺々しさにも慣れてきた。

これがマーシヤの言っていた、彼の“分かりやすい”一面なのだろうか。

未だ素っ気ない彼の対応に不安を抱く事はある物の、彼の性格は凡そ掴めてき

ている様な気がする。

左手に持ったフォークでパイを押さえ、右手のナイフをゆつくりとパイに差し込んだ。サク、と聴覚を刺激する音がした直後、割れたパイの中からフィリングが零れだす。

肝心なのは味だが、見た目だけで言えば満点だ。出来栄えの良いパイに心が弾む。一口大に切ったパイにフィリングを乗せ、零さぬ様にそっと口へ運んだ。

屋敷に居た頃に、特別料理が上手く両親からも甚く気に入られていたシェフから教わったレシピだ。私が配合を間違えてさえいなければ、味に問題は無い筈。

だが、やはり作り慣れていない料理を食べる際には少々緊張感を抱いてしまう。味覚に神経を集中させ、ゆつくりと口の中に含んだパイを咀嚼した。

外側はサクサクとしていて、中はフィリングが染み込みふわふわとしている。パイ生地。そして噛み締める度に肉汁が溢れだす、少々パイスの効いたフィリング。

「——美味しい……！」

思わず口に出してしまった言葉に、向かいに座っていたセドリックが小さく反応した。ぱちりと視線がぶつかり合い、彼が少々間を置いて頷く。

「——ああ、美味しい」

見た目だけでなく、味迄も完璧に作れたのはこの上無く嬉しい。だが、自身が作った料理を彼よりも先に「美味しい」と口にしてしまった事に、言葉にし難い羞恥心が沸き上がるのを感じた。

「ごめんなさい、つい」

熱くなつた顔を冷ます様に、グラスの水を呷る。あお

彼にも、「美味しい」と言わせてしまった様なものだ。出来れば、その言葉は彼の意思で言つて貰いたかつた。

羞恥は収まる事無く、冷たい水で潤した口内も再び熱を持つ。

「——ん？」

不意に、彼が疑問符の付いた声を漏らした。その声に釣られ、彼に視線を向ける。

「——お前、指どうした」

「指……??」

鸚鵡返しに問い、自身の指に目を遣る。おうむ

だがそれよりも早く、彼がフォークを持ったままの私の手を掴んだ。そしてやや乱暴に引き寄せ、私の指先に視線を注ぐ。

彼の視線の先である人差し指の側面には、私がつい先程うっかりナイフで切つて

しまった傷があつた。手を動かす度にフォークの柄が傷に当たつて痛みを感じていたが、自分自身では然程気にしていなかったものだ。

「料理中の怪我か」

「——えっと……」

一般的に、料理中に怪我を負う事は不衛生だと思われる事が多い。屋敷でも、怪我を負つたシェフは完治するまで調理からは外されていた。

だが私の場合、指を切つてしまったのはナイフ等の調理器具を片付けている時。衛生的な話をすれば、問題は無い筈だ。

しかし、その場に居なかつたセドリックには分からない事。片付け中の出来事だと言つたところで言い訳にしか聞こえないだろう。

曖昧に言い淀み、彼の手から逃れようと腕を引いた。

「——怪我、したんだつたらすぐに言えよ」

呆れた様に、将又苛立はたまたっている様に。彼が大きな溜息を吐いた後、私の手を離した。

そしてガチャリと音を立て、ナイフとフォークを皿に置き、席を立つ。

「——あ、あの、セドリック？」

食事中に席を立つなんてお行儀が悪いと、私は小さな頃から教え込まれていた。それに席を立つ事は「食事を終わらせる」事と同義だとも。

彼の皿には、まだ半分以上も残った。パイが乗せられている。怪我をした人間が作った不衛生な料理など、食べたくないという意味表示だろうか。

だが、彼が向かっていくのは物置と言われていた二階。

その不可解な行動に疑問を感じながらも、ぼんやりとパイを眺めながら一人彼が戻ってくるのを待った。

——丁度、彼が二階へ消えてから一分程が経過した頃合いだろうか。

突如ガタガタと響き渡る、物が倒れる音や、何かが散らばる音。天井が抜け落ちてしまうのでは無いかと思う程の騒音に、思わず天井を見上げる。

だが間も無くして、その騒音はぴたりと治まった。

今のは一体何だったのだろうか。増していく疑問を抱えながら、二階から降りてきた彼に視線を向ける。

彼の手に持たれているのは、銀の取っ手が付いた木箱。中に何が入っているかは、話の流れからすると大体察しが付く。

だがそれよりも目に付いたのは、埃を被った彼の姿だった。

この家に来てから、二階には一度も足を踏み入れていない。その為、私は二階の物置がどの様な場所なのかを把握していない。入ろうと思えば入れる場所であり、特別入るなど言われている訳でも無かったが、それでも二階へ行く事が無かったのは人のテリトリーには必要以上に踏み入りたくないというのが大きな理由だ。

しかし、雪が降ったかのように白くなつた黒髪に、煤^{すす}でも付いたのかと思う程所々黒く汚れているシャツを見てみると、そんな二階の有り様に興味が湧いた。

「――貴方、一体何を……」

げんなりとした顔の彼に問いかけるが、彼から返事は無い。

彼はただ黙ってその木箱をテーブルに置き、留め具を外し蓋を開いた。

木箱の中に入っているのは、包帯やガーゼ、消毒液だと思われる透明な液体が入った小瓶等々。怪我の手当に必要な物が入った箱なのだという事はすぐに分かる。だが私の怪我はほんの小さな切り傷であり、手当をする程の物ではない。それに、もう出血は止まっている為手当の必要も無かった。

「あの……怪我は大した事無いから……」

「大した事無いかどうかを決めるのはお前じゃない」

私の言葉をぴしやりと跳ね返し、彼が箱から銀の小鉢と掌程の大きさのガーゼを

取り出した。

それを慣れた手付きで小さくカットし、次に取り出したのは高さの低い小瓶。その瓶の中には薬剤であらう何かが入られているが、濁った緑色をしていてとても美しい物だとは言えない。

「それは何？」

「昔、マーシャが診療所で貰って来た薬だ。感染症を防ぐとかなんとかで、傷の治りも早くなるらしい」

「そう……貴方も良く使うの？」

「俺は怪我をする事が無いから殆ど使わないな。怪我の多いマーシャを見兼ねて医者が渡したらしいが、何故か俺に押し付けられた」

開かれた小瓶からは、薬草特有の青臭いにおいが立ち上っている。それはやや鼻に突く程度で、時間が経てば慣れるものではあるが、恐らくマーシャはこの臭いを嫌ったのだろう。

セドリックにこの薬剤を押し付けるマーシャの姿は易々と想像が出来た。

彼がその薬剤を人差し指で掬い取り、切ったガーゼに満遍なく塗り広げていく。その姿に、ふとある事が頭に浮かんた。

彼は何故、私の怪我に気が付いたのだろう。指先の怪我など、その人をよく観察していないと気付けない筈だ。

少し前にマーシャが、セドリツクは人の事を全く見ておらず髪型を変えても気付かない、と嘆いていた事を思い出す。もし彼が本当にそういう人なのであれば、私の傷だつて気付く筈が無い。もし気付いたとしても、それを口に出し、更には態々食事中に席を立てて迄手当をしてくれるだなんて考えられない。

それこそ、相手が特別な人で無い限り。

——彼は私の事を、注意深く見てくれていた？ 私は、彼にとって特別な人だった？

そう考えてしまうのは、自惚れだろうか。

再び私の手を取った彼が、薬剤を塗った面を下にして、ガーゼを傷口に貼り付けた。そのひやりとした薬剤の感触も、自身の上がる体温で直ぐ様掻き消される。

握った手から、自身の高鳴る心音が彼に伝わってしまいそうだ。徐々に顔も熱を帯びていき、発熱時の様に頭がぼんやりとしてくる。

ガーゼを押さえながら丁寧に包帯を巻いていく彼の手は、普段の棘のある言葉を吐く人だとは思えぬ程に優しくかった。それがとても心地よくて、ずっとこうしてい

たくなってしまう。

だが時間はあつという間に過ぎてしまい、気が付けば包帯は綺麗に巻きあがつていた。

たかが指先を切っただけなのに、随分と仰々ぎやうぎやうしい見た目だ。これでは、フォークを扱う事すら困難だろう。

それでも、彼がこうして自らの意思で手当てをしてくれた事は純粋に嬉しかった。「あ、ありがとう……」

手早く箱の中に包帯やガーゼなどを片付けていく彼に礼を告げると、彼はふと手を止め、私の顔をじつと見つめた。

その視線は冷たい訳でも、熱が籠っている訳でも無い、不思議な視線。

段々と黙って見つめられる事に居た堪れなくなつてきて、ぎこちなくもにこりと笑い首を小さく傾げた。

彼の性格は凡そおおよ掴めてきている様な気がする、なんて思っていたが、実際は全く掴めていない。

思い返してみれば最近、彼が私の顔をぼんやりと見つめる事が多く、その度にこうして愛想笑いを見せている様な気がした。

彼は今何を考えているのだろう。

そんな事を思いながら彼をじっと見つめ返すと、不意に彼が小さく笑った。

いや、笑ったという表現は適切では無い。口元をふわりと緩めた程度だ。だがその表情は、普段の物よりずっと優しく、私の鼓動を高鳴らせるのには充分すぎるものだった。

「自分の身体は大事にしろよ」

ぱたり、と小箱の蓋を閉め、彼が私の髪をくしやりと撫でる。

撫でると言うには少々乱暴だが、掌から彼の優しさが伝わってくる様で全く嫌では無い。寧ろ、時々こうして髪を乱す様に撫でてくれるのは彼の愛情表現の様で、彼への期待が高まる一方だった。

頭を撫でる手が離れるのとほぼ同時に、彼の足が再び二階の方へと向く。

小箱を持つて階段の方へと消えていく彼の背を見ながら、まだ彼の手の感触が残った頭に、そっと自らの手を触れさせた。

彼が居なくなり、しんと静まり返った居間。^{リビング}冷めてしまったパイから発せられる僅かなスパイスの香りを感じながら、治まらない鼓動と顔の火照りを冷ます為に水が注がれていたグラスを手を取った。

そのグラスの中にはもう水は残っておらず、グラスもぬるくなつてしまつてゐる。だが、その温度ですら今の私には冷たく感じ、グラスを頬に触れさせた。

——あんな風に、突然笑うだなんてずるい。

喜怒哀楽が乏しく、表情も硬い彼が、私にそんな顔を見せるなんて。どれだけ彼に特別な意図は無いと思ひ込んで、意思と心は一致せず、悲しくなる程に期待が膨らんでいく。

「……好き」

誰に言う訳でも無く、静かな居間^{リビング}で一人呟く。

メアリーは優しく、可愛くて、大好きだった。

モリスも、誰よりも優しく接してくれて、いつも私の我儘を聞いてくれて大好きだった。

マーシャだって、出逢つて日は浅いが優しく頼れる女性で好きだ。

——では、彼の事は？

不愛想で、言葉に棘があつて、感情が読めなくて、どう接するのが正しいのかが分からなくなる。

だが、時々優しく、時々髪を撫でてくれて、時々、私にだけ普段と違う表情を

見せてくれる。

それは、メアリーやモーリス、マーシャへの“好き”と違う。

この感情は――

To be continued.

本書は、2021年6月13日発行の「DachuRa 1st story-Ivy-」に修正を加え、再編集したものです。

[DachuRa 1st story-ivy-]

2023 年 5 月 18 日 第 1 刷発行

著者：白城 由紀菜

カバー：白雪

印刷所：株式会社ブックフロント

ご意見・ご感想お待ちしております。

●宛先

https://odaibako.net/u/w_yuki_1601

